
COMBINATION

遙-ombrage

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COMBINATION

【Nコード】

N7327D

【作者名】

遥—ombrage

【あらすじ】

警察官たちのお話です。主人公は、望月修平、26歳。県警本部捜査一課に人事異動になった修平とコンビを組むのは、顔はいいが、つねに無表情で何を考えているかわからない田村恭一。まったく頼りにならない上司や女好きで世話好きな同僚など個性あふれるメンバーが登場します。修平と恭一の息の合った(?)コンビぶりをお楽しみください。

episode 1 コンビ誕生

―― 1 ――

――いつまでも、ここに突っ立っていても仕方がない。

俺は十度目の深呼吸をし、ドアを開けた。

「失礼します。本日付で捜査一課強行犯捜査係に配属になりました望月修平です」

「よし、望月。行くぞ」

短く髪を刈り上げた中年の男にいきなり声をかけられたかと思うと、次々と捜査員らしき人間が俺の横を抜けて廊下へ出ていった。

訳が判らず戸惑う俺に、「ついてこい」と俺と同年ほどの男が声をかけてきた。

「え、あの、どこへ……」

「事件だ。俺はあんたとコンビを組むことになった田村。一応、よろしく」

田村と名乗った男が早口で言った。

「事件？」

「早くしろ」

田村は足を止めることなく進んでいく。俺は慌てて田村の後を追った。

階段で地下駐車場まで下りていくと、田村は一度も俺の方を振り返ることなく黒いデミオに乗り込んだ。

俺はどうすればいいのか。彼の車に乗り込んでいいのだろうか。それとも、自分の車で彼の後をついて行くべきなのか。わからん。

エンジンがかかった。慌てて彼の車に走り寄り、運転席の窓を叩くと、「早く乗れ」と田村が睨みながら窓を開けて言った。

「え、あ、はい」

急いで助手席に回り込み、車に乗り込んだ途端に田村は車を発進

させた。俺はシートベルトをかけながら、事件についての説明を待った。

事件ってどんな事件だ。強盗、傷害、まさか殺人か。初仕事で殺人事件は遠慮したい。でも本部が動くってことは、やはり殺人だろうか。

まだかまだかと田村からの説明を待ったが、結局、南警察署に着くまでこの能面男はひと言もしゃべらなかった。こんなしんどいドライブは初めてだ。

「おい」

さすがに腹が立ち、車から降りようとする田村に声をかけた。だが、田村は俺を無視して車から降りるとスタスタと正面玄関へと歩いていく。

「ちょっと待てよ！」

急いで車から降りると先を歩く田村の肩を掴んだ。すると彼は俺の手を払いのけ、振り向きざまに、「詳細は今から始まる捜査会議で聞けばいいだろ」と言い放ち、さっさと建物の中へと入っていった。

俺は呆気にとられながら田村のうしろ姿を見送った。

「なんだ、アイツ……つか、ムカツク！」

堪らず地団駄を踏む。

「やほー、新人。荒れてるねー」

背後から軽い口調で声をかけられた。振り返ると、男前と美人が立っている。

「あの……」

篠原班にようこそ。俺たち、君の先輩ね。俺、若林。彼女は若林が隣の美人に手を差し向けると、「里見です」と名乗った。

「あ、よろしくお願いします。望月と言います」

「よろしく。じゃあ、行こうか」

そう言うと、若林は歩きながら事件の概要を手短に説明し始めた。よかった、まともな先輩がいて。

episode 1-2

予想していた通り、やはり殺人事件だった。しかも犯人は三人の命を奪っている凶悪犯。交番勤務の時にも何度か殺人事件の初動捜査に加わったことはあったが、あの時とは訳が違う。

本部の刑事として捜査をするという重責に動揺を隠せないでいる俺に若林は、「力み過ぎるなよ」と背中を軽く叩いた。

「は、はい」

上擦った声をあげた俺に、里見がくすりと笑った。

美人に笑われてしまった。落ち込みかけた時、「誰でも始めは緊張するわよね。私も、若林くんもそうだったから大丈夫よ」と里見が言った。

「あ、りがとうございます」

緊張の糸が解れ、肩の力がスッと抜けた気がした。強張っていた表情も、いつものしまりのない顔に戻っている。美人の威力はいろいろとすごい。

「じゃあ、行こうか」

若林は奥の講堂を指差し、歩き出した。

講堂の入口には「連続強盗殺人事件」と書かれた看板が掲げられている。若林たちの後について中に入ると、五十人ほどの捜査員たちが険しい顔をしながら捜査資料に目を通していた。

ピリピリと張り詰めた空気に、再び顔が強張る。

「望月っ」

いきなり肩を掴まれてギョツとする俺に、「班長の篠原だ。初日から大変だろうが、しっかり頑張れよ」と刑事部に入った時に声をかけてきた男がニヤリと笑いかけてきた。

「は、はいっ」

また声の上擦る。

「じゃあ、席は田村の隣な」

篠原は田村を指すと、俺たち捜査員と向かい合う形で置かれている席へと戻っていった。俺はうな垂れながら、捜査資料に目を通していた田村の横の席に腰かけた。

案の定、何の反応もない。考えるのも面倒なので俺はすぐに机の上に置かれていた捜査資料を手取る。緊張で手が震える。

本部の人間として捜査に加わる以上、足手まといにだけはなりたくない。俺は捜査資料を掴む手に力を込めた。

事件は、一カ月前から同様の手口で三件起きていた。

犯人は深夜に独り暮らしの老人宅に押し入り、住人を殺害後、現金を奪って逃走していた。所轄署によってすぐさま初動捜査が行われたが、犯人の目撃情報はおろか、被害者間の繋がりも見つけることができず、捜査は難航した。そして本日、捜査本部の設置となったのだ。

被害者の唯一の共通点は、当日、銀行で現金を下ろしているということだった。ただし、金額も利用した銀行もバラバラで、金額は三件合わせても二十万程度。

当初、所轄署は犯人逮捕は時間の問題だと高を括っていた。銀行には防犯カメラがあるからだ。けれど銀行や付近の防犯ビデオを回収したが、三件の銀行の防犯ビデオに共通する人物はおろか、不審な動きを見せる人物も映ってはいなかった。

焦る捜査員たちの姿が目につかぶ。俺は所轄署の捜査員たちの報告を聞きながら、資料に視線を戻した。

犯人について判っているのは、右利きであることだけ。犯人は持参した刃渡り二〇センチほどのサバイバルナイフで被害者を刺殺していた。そして司法解剖の結果、それが判った。

だが、この世の中に右利きの人間——ちなみに俺も右利きだ——がどれほどいるか。俺は、周りに気付かれないように小さく溜め息をついた。

episode 1-3

俺と田村は地取り捜査——被害者宅の周辺を聞き込む班——をすることになり、田村の車で三番目の被害者宅へと向かう。車中、チラチラと田村の方に視線を送ったが、ヤツはひと言も発することなく車は現場に到着した。

しんどい。まだ捜査もしていないのに、車中にいた十分ほどでかなりの神経をすり減らしてしまった。

俺は先を歩く田村の背中を見つめながら、大きな溜め息をついた。古い民家が立ち並ぶ、閑静な住宅街。この辺りは、ほとんどの家が子供が独立している年配者夫婦の家庭で、就寝時間もかなり早いようだった。しかも昼の時点でこの人通りの少なさ。深夜なんてほとんど人なんて歩いていないだろう。

俺は、不気味なほど静かに佇んでいる主を失った家を見つめる。その周りには黄色い規制線が張られている。部外者の侵入を阻む為というより、この家の中で起こった惨劇を忘れさせない為に張られているように感じた。

「なんだか遣り切れない事件だな」

「何が？」

田村は手帳を見ながら、聞き込みの済んだ家にチェックを入れている。

「だって五万円で殺されちゃうんだぜ。しかも老人狙って強盗するのも卑怯だろ？近所の人たちも被害者との交流がほとんどなくてさ——独りきりで生活して、誰にも知られず殺されちゃうなんて、悲しいよな」

もしヘルパーの人が見つけていなかったら、発見ももっと遅れていただろう。そうなっていたら、亡くなってもなお独りきりでいなければいけなかったのだ。哀しすぎるじゃないか。

田村が立ち止まって、俺をじっと見つめた。

「お前、刑事に向いてないな」

そう言うと、スタスタ歩いて聞き込み先の家のインターホンを鳴らした。

呆氣に取られた俺は、その場に立ち尽くす。

なんだ今の。バカにされたのか。ふつふつと怒りが込み上げる。

――初対面のコイツの失礼な態度にも俺は我慢した。一緒に行動することになったにもかかわらず、なんの配慮もなく協調性に欠けるコイツの性格にも俺はなんとか我慢してきた。世の中いろんな人がいるんだな、とそんなに広くない心を薄く広く伸ばして俺は許した。

なのに、なんだその言い草は。

俺は田村は睨みつける。

――絶対、コイツに俺を認めさせてやる。

episode 1-4

―― 2 ――

洗面台に手をつき、大きく息を吐く。そして目の前の鏡に映る自分の顔を見つめた。

――酷い顔だ。

ここ数日、まともに寝ていないせいか目の下にくまができていた。顔も数日前に比べると随分とやつれている。

捜査本部が設置されてから一週間。新たに一件、同一犯による事件が発生し、これで被害者は四人となった。

四人目の被害者も、他の被害者同様、事件当日に銀行で少額の現金を下ろしていた。

俺たちは、犯人の凶行を止めることができなかったのだ。

「つくそ！」

俺は洗面台に思い切り拳を振り下ろした。蛇口をひねって乱暴に顔を洗うと、排水溝に吸い込まれていく水を見つめながら、唇を噛み締めた。

悔しい。俺たち警察がもっと早く犯人を捕まえていれば、こんなに犠牲者はでなかったはずだ。

……それを思うと、悔しい。

「――おい！」

肩を掴まれ、ハッと我に返る。振り返ると、無表情の田村が立っている。

「事件のことで心ここにあらずって感じだな。捜査会議始まるぞ」

田村は捜査本部の方を顎で差した。捜査から戻ってきた捜査員たちが続々と捜査本部へ入っていくのが見えた。

「……ああ、そうか」

寄りかかっていた窓枠から離れると、フラリと体がよろけた。俺は慌てて窓枠を掴み、体勢を立て直す。

何か変だ。頭が朦朧とする。ここのところ食事もたいして取らず、連日泊り込みをしていたせいかな。うまく力も入らない。

そんな俺の様子を見て、田村は呆れるように息をついた。

「それじゃ、捜査もろくにできないだろ。力み過ぎなんだよ」
その言葉に、何かが切れた音がした。

俺は田村の胸ぐらを掴み、そのまま壁に体を押し付けた。

「力入れて何が悪いんだよ！俺たちのせいで四人も亡くなってるんだぞ！ふざけんな！」

本当のことだ。自分たちの捜査が至らなかったせいで、何人もの人が犠牲になっているのだから。

ところが、どうしたことかいつも無表情の田村の顔がみるみる凶悪な顔に変貌していった。驚いて胸ぐらを掴んでいた手を緩めると、田村は乱暴に俺の手を払いのけた。

「お前こそふざけるな！警察がなんでもできると思ってるのか？警察の怠慢で殺されたと言っても言うのか？じゃあ、お前は今までの捜査で手を抜いていたのか？他の捜査員が手を抜いていたと言っても言うのか？殺す人間がいる限り、殺人は起こるんだよ！」

田村は一層鋭い眼差しを俺に向け、

「冷静になれ。俺たちのやるべきことは、犯人を逮捕することだろうが。自己批判や感情移入は、犯人を捕まえてから一人でやってくれ」

そう言われた瞬間、体から熱が引いていった。

刑事としての熱が冷めた訳ではない。今まで頭の中でぐちゃぐちゃに絡み合っていたものが解け、いきなり目の前の視界が広がった感じがした。

「ひっ」

俺は思わず声を上げる。

俺たちの周りを若林たちや篠原、そして一課長の小林などの面々

が取り囲んでいることに、今気がついた。どれだけ視界不良だったんだ、俺は。

固まる俺を小林はギロリと睨み、「終わったか？馬鹿どもが！時間を無駄遣いするな！」と廊下中に響き渡る怒声を俺たちに浴びせた。

田村は平然としていたが、一九〇もの上背のある刑事部の中でも一、二を争うほど強面の小林に睨まれ、俺は蛙のように身動きひとつできないでいた。――怖すぎる。

「すみませんでした」

なんとかそのひと言を絞り出すと、小林は「ふん」と大きく鼻を鳴らし、捜査本部へと戻っていった。

俺はホッと胸を撫で下ろし、ちらりと田村を見る。さっきと同じく、何事もなかったかのように平然としている田村。俺は呆れを通り越して感心した。

コイツの心臓には、剛毛が生い茂っているに違いない。

何事かと部屋の中にいた所轄署の捜査員たちが顔を出す中、「望月、お前に捜査の基本を教えてやろう。明日から、お前ら解析班に行け。いいな」と篠原がニヤリと意地の悪い――俺にはそう見えた――笑みを浮かべた。

銀行の防犯ビデオを解析し始めてもう三日。

白黒の単調な映像を一日中観続ける作業が、これほど辛いとは思わなかった。よく映画館をはしごしたりするが、それとこれとは全然違う。解析班の仕事を甘く見ていた。

山積みされたビデオを投げ捨てたくなる衝動に駆られるのは、俺だけではないはずだ。俺たちの代わりに地取り班へと向かった捜査員たちの顔がほころんでいたのを俺は見逃さなかった。——まあ、田村は別なんだろうが。

往来する通行人、ポストの手紙を集荷する郵便局員、犬の散歩をする男性、制服姿の女性会社員、慌ててATMに駆け込んでくる主婦、ATMの操作を教える行員、作業服姿の男性。

ATMの機械に吸い込まれるように人が集まり、そして散っていく。そんな様子をただじっと観ていると、多種多様な人間が機械の前に一様に並んでいる姿がなんだか不思議に思えてくる。

何の為に並んでいるのか、一瞬、判らなくなるのだ。それくらい、繰り返し何度も同じ映像を観ていた。すべての映像を脳内で鮮明に再生することができてしまう自分が怖い。

椅子の背に深く腰を落とし、俺は溜め息をついた。

テレビで観る刑事ドラマとは大違いだ。刑事の仕事は、もっと華やかな仕事だと思っていた。でも実際は、なんていうか、地味。

こういう地味な作業を地道に繰り返して犯人逮捕に漕ぎつけていくのだが、こんな作業をドラマで続けていたら視聴率取れないよな。……まあ、拳銃ばんばんぶっばなす刑事ドラマもどうかと思うが。

隣の田村を盗み見ると、相変わらず無表情で映像を観続けている。飄々として何を考えているかさっぱり判らないが、それでも俺よ

り犯人逮捕への執念が強いことは、ここ数日、一緒に捜査をしていて判った。悔しいがそれは認める。

なんだろう。篠原たちは、俺にコイツの生態研究でもしろというのだろうか。

堪らず頭を抱える。

……勘弁してくれ。まともな会話すらできず、どう田村と付き合っ
ていけばいいのか判らないのに。

俺は事件のことを考えるべく、逃げるように映像に視線を戻した。

映像を見る限り、不審な人物は見当たらない。しいて言うなら、慌ててATMに駆け込んできた主婦が振り込め詐欺の被害者ではないか、と不安になったことくらいだ。どうやら、振り込め詐欺の被害者ではなかったようだ。

被害者の利用した銀行も時間もバラバラ。住んでいる地域も近くはない。だから捜査本部は、当初から複数犯の犯行と見ていた。

「複数犯、か」

「いや、単独犯だ」

田村がきっぱりと言いつつ切った。

episode 1-6

おっと、無意識に口に出していたようだ。しかし、単独犯と断定する言葉が返ってくるとは思わなかった。田村を観ると、相変わらずの無表情のまま画像を観続けている。

俺はまだこの表情以外見たことないが、コイツって笑ったりするのだろうか。想像できない。

俺は気を取り直し、「なんでそう思うんだ？」と田村に尋ねた。

「お前こそ、どう思ってるんだ？」

初めて画面から視線を外した田村は、俺を見据えた。

「どうって……」

俺は一瞬口ごもり、

「被害者はバラバラの銀行で金を下ろしていることから、複数の人間が銀行で網を張ったと考えるのが妥当じゃないか？ それにいくら老人とはいえ、声を出させずに殺すのは難しいだろ」

「そうとも限らない」

すぐさま田村は反論する。

「銀行で下ろされた金額は少額だ。網を張って見ていたのなら、まずターゲットには選ばないはず。もし銀行で現金を下ろしているのを確認しただけだとしても、複数の人間が住宅街をうろついたのなら、いくら閑静な住宅街とは言え目撃情報がでてこないのはおかしい。それに複数犯ならば移動には車が必要になったはずだが、不審車両の情報もでてきていない。――被害者は独り暮らしの老人ばかり。人間は、とっさにすぐ反応して声を出せるものじゃない。老人ならなおさらだ。独りでも声を出させずに殺すのは可能だ」

いきなり多弁になった田村に俺は驚き、言葉を失う。自分の考えを否定されたことも忘れるほどの衝撃だった。

「お前……なんだよ、普通に話せるんじゃないか」

俺は隣に座る田村の腕を思い切り叩いた。思わず顔が緩む。腕を

摩りながら俺を睨む田村に、「悪い悪い」と軽い口調で謝りながら俺は画像に視線を戻した。

「確かに単独犯なら目撃情報が出てこないのも頷ける。……被害金額って四件合わせて二十七万だったよな。数人で分けるには少なすぎるか」

「それに、被害者がすべて独居老人ってのは偶然にしては犯人にとって都合良過ぎると思わないか？」

田村が言った。

言われて初めて俺はそのことに気づいた。

「そっか、そうだよな……。てことは、犯人は顔見知りってことか？」

「まあ、事前にリサーチしていたのかもしれないけどな」

田村は自分で自分の疑問を打ち消すようなことを言った。納得した俺の立場はどうなる。

「なんだよ……結局、なんも判かってねーんじゃん」

不満げに言うと、「当たり前だ。判かってたらデスクに上げてるさ」と気怠そうに田村はワイシャツのボタンをひとつ外した。ネクタイはどうに外され、机の端に無造作に置かれている。

「だよな」

俺はテーブルに頬杖をついた。

「っつーか、単独犯ってお前の見解も言った方がいいんじゃないの？」

「そう思うなら、明日お前が言えればいい」

「は？」

思わず田村に顔を向ける。

「明日、お前が言え」

もう一度、今度は命令口調で言ってきた。

episode 1-7

「はぁ？おっ前、それは協調性がないとかの問題じゃないだろうーが。つーか、なんでそんなに偉そうなんだよ」

信じられない。

呆れる俺に、「さっき気付いたからな」としれっと田村が答えた。

「ああ、そういうこと。なんだよ、それを早く言えよ」

でもその偉そうな態度はなんだ。

「今、言っただろ」

「遅せえよ」

俺は椅子の背にもたれ掛かり、

「つーか、明日報告するにしてもなんか説得力のあるものを提示しないとなあ」

すると田村は腕時計を見つめ、「明日の捜査会議まであと九時間ある。それまでに映像の中から不審人物を見つければいい」とさらにと言ったのけた。

俺は絶句する。

「……お前、頭大丈夫か？この地獄の三日間を思い出せ。それに、その前から他の捜査員たちが探しても見つからなかったんだぞ？」

お前はどうか判らないが、俺は結構ギリギリの状態なんですけど。片肘をつき、戸惑う俺を見つめる田村。俺を試しているのだろうか。生意気な。俺はネクタイをさらに弛め、映像の中の人間を見据えた。

「見つけてやろーじゃねえか」

隣から「その言葉、忘れるなよ」と声がした。
くそ生意気な。

「お前もな」

疲れた目をこすり、深く溜め息をつく。

……見つけれない。

目がかすんで、映像に集中できない。目頭を押さえ、椅子の背に深く腰を落とす。時計を見ると、午前四時を少し過ぎていた。あれから五時間、ぶっ続けで映像を観続けていたのか。顔をしかめ、隣の田村を見る。

疲れた様子もなく、真剣な眼差しで映像を見つめる田村。

——なんて集中力だよ。

身動きひとつしない田村に俺は舌を巻く。

鉄人だ、鉄人。鉄仮面どころの話じゃない。心臓に毛が生い茂る、つつーか鉄の心臓を持った鉄人だ、コイツは。いったい、俺はどうすりゃいいんだ。リモコンとかないのか？取扱説明書は？

だいたい、新人の俺に何故こんな鉄人をあてがうんだ。若林さんとか里見さんとか他にもまだいるじゃないか。まともな人間が。…もしかして、俺歓迎されてないのか？

一瞬、沈みかけるが、思い直すように首を振る。

篠原や小林の性格からして、田村を俺にあてがった深い理由はない気がする。ちょうど俺が配属された時に田村が一人だったからというだけで、合う合わない、コンビを続けるか解消するかは俺たち次第で関心がなさそうだ。

頭を掻きながら立ち上がる俺に、「おい」と田村が声をかけてきた。

「な、別に逃げねーよ。コーヒー淹れてやろう、と思って……」俺はそのまま言葉を失った。

田村が俺を見てニヤリと笑ったのだ。

「見つけた」

「……は？」

間の抜けた返事をする俺に、「コレを観ろ」と田村はテレビモニターにいくつもの映像を並べて表示した。

モニターに映し出された画像のすべてに、ポストから郵便物を集荷する郵便局員の姿が写っていた。

「……まさか、お前この郵便局員が怪しいとでも言うのか？」

そこにポストがあるのだから、郵便局員が集荷にくるのは当然だろう。

だが田村は満足げに映像を見つめながら、「この郵便局員がすべて同一人物だったらどうする？」と言った。

「同じ？」

俺はモニター画面に視線を戻す。

「ああ。事件はバラバラの町内で起きてはいるが、すべて同じ区内で起きている。調べてみる価値はあるだろう？被害者の映るすべての映像の中に、郵便局員が映っているんだからな。四件の事件で唯一の共通点と言ってもいい」

俺は田村の言葉を無言で聴いていた。

何度も観ていた映像。この郵便局員のことももちろん覚えている。なのに、俺には気づけなかった。いや、無意識のうちに除外していたのかもしれない。

——そこにポストがあったから。

「落ち込む前にやることがあるだろ。捜査会議までに見つけてやるって言ったよな」

田村が俺を現実に戻す。

「……お前もだろーが」

悔しげに顔を歪める俺に田村は、「報告するのはお前だ」と言った。

「お前な……」

俺はチラリと映像に視線を向ける。

「――確か、ヤツの乗ってきた車も映ってたよな。まずは、ナンバ
ーの確認と集荷区域の確認だな」

episode 1-9

——調べた結果、映像に映る郵便局員はすべて同一人物だということが判明した。

その後、この郵便局員を任意で事情聴取すると彼はすぐに犯行を認めた。

借金の返済に困り、銀行で現金を下ろしていた老人を狙ったのだという。集荷業務をする前は配送業務をしており、被害者とは顔見知りだったらしい。だから殺した、とも彼は言った。

被害者に繋がりがあった数少ない人間が犯人だったことに、ショックを受けた。たかが数十万で、どうしてそんな簡単に人を殺すことができるのか。

罪の意識の薄い男の言動を思い出す。俺は瞳を閉じ、唇を噛んだ。窓枠に置いた手に力を込める。

「お疲れ」

背後から声がした。

振り返ると、田村が缶コーヒーを投げて寄こした。慌てて俺はキヤツチする。

「危ないだろ」

せめて少し間をおけ。

「そんな鈍いのか、お前」

「失礼な」

田村を睨みつけ、俺は缶コーヒーのプルタブに手をかける。

「まあ、これからよろしくな」

コーヒーを口に含んだと同時に田村が言った。田村を見ると、ふっと少しだけ口角が上がった。

——笑った。

俺は一瞬驚き、ゆっくりと唇から缶を離す。

「おう、よろしく」

悔しいが、なんだか少しだけコイツとっやっていけそうな気がした。……ほんの少しだけ。

俺はふつと肩の力を抜いた。

——もう立ち止まらない。何があろうと、前に進むと決めたから。

俺の初めての事件は、こうして終わった。

episode 1-9 (後書き)

episode 1完結です。

引き続きepisode 2 (加筆修正版) を随時掲載していくつもりです。

また、「囁くもの」 (新作長編小説) も掲載していくのでそちらも読んでいただけると嬉しいです。

ランキングの参加しているのでポチッと投票していただけると今後の励みになりますのでよければお願いします。

ご意見、ご感想もお待ちしています。

つたない文章ですが、ありがとうございました。

episode 2 刑事部の人々（前書き）

現在加筆修正を行っているので、episode 2の次がepisode 5になっていますが気にしないでください。
もうしばらく、ご迷惑おかけします。

episode 2 刑事部の人々

事件も無事解決し、しばらくは平穏な日々が送れるものと思っていた。

だが、そうさせてくれない人がいた。

「時間がある時は、藤さんに稽古つけてもらえよ」

一課長である小林の言葉は絶対だ。もっとのんびりと報告書を書くべきだったか。やることもないので、しぶしぶ県警本部内にある道場へ向かった。

警官になるまで柔道をやったこともやろうと思ったこともなかった。交番勤務の時でさえ決められた稽古日以外練習をしてこなかった不良警官の俺が、よく刑事になれたものだ。

道場に入ると、藤堂の他に数十人の警官が稽古をしていた。もうすぐ県警柔道大会がある。その出場選手たちなのだろう、きっと。皆、いかつい体をしている。

尻込みする俺の横を田村が涼しい顔で通り過ぎていった。生意気な奴め。投げまくってやる。

「大丈夫か？」

藤堂が、横になったまま動かない俺を心配になったのか声をかけてきた。

「……吐きそうです」

なんとかそれだけ答えると、「無理しない方がいい。今日の連中は全国大会常連のヤツばかりだから。昼も近いし、今日はこれで終わりにしよう」と藤堂は俺の手を取り、立ち上がるように促した。どうりで皆、強いはずだ。俺はよろけながら片膝をつくと藤堂を見上げる。

この穏やかな笑顔を浮かべる藤堂が柔道五段だということを今日初めて知った。人は見かけによらない。

小学校で道徳を教えていそうなこの藤堂が昨年の県警柔道大会で準優勝していることにも驚いたが、優勝したのが間宮だと聞き、さすがに閉口した。しかも間宮は全国大会でも優勝したらしい。

……あの人を怒らせてはいけないと誓った。

けれど、そういう人間って普通は機動捜査隊とか全日本のコーチとかになるんじゃないか？

猛者たちに投げられまくった俺は、今にも吐きそうなのを堪えながらゆっくりと立ち上がる。

田村をちらりと見ると、俺ほどバテた様子がない。そつなくこなすヤツがいつの世にもいるものである。憎い。

「今日の稽古、終了します。皆、整列。礼っ」

声を張り上げている訳ではないのに、藤堂の声が道場中に響き渡る。

二時間にも及ぶ稽古がやっと終了した。

「望月は筋がいいよ。学生時代に何かやってたのか？」

隣を歩く藤堂が訊いてきた。

田村はいつものごとく、ひとり前を歩いている。強調性のない奴め。

俺はキッと田村の背中を睨み、「中学からずっとテニスをやってきました。大した成績は残してませんが」と興味深げに俺を見ている藤堂に答えた。

「大学まで？」

「はい」

「じゃあ、俺と似てるな。俺も中学から大学まで柔道一筋だったから」

懐かしそうに目を細めながら、安定感のあるテノールの声で藤堂が言った。

「望月は主将とか似合いそうだな」

「一応、高校と大学では部長でした」

「そんな気がした。人をまとめるのが上手そうだ」

褒められてこんなに嬉しくなったのは初めてかもしれない。藤堂の言葉に思わず顔が緩んだ。

「ちよつと篠さんに似てるかな」

「え……」

さっきまでの嬉しい気持ちが一気に吹き飛び、顔が引きつる。きれいさっぱりとあとかたも残らないほどの威力を藤堂の放たれた言葉は持っていた。

episode 2 刑事部の人々（後書き）

ブログの方でもランキングに参加しているので、よければ投票していただけると嬉しいです。

「遙らombrage」からプロフィールのページに移動するので、HPのバナーをクリックしてください。

episode 2

「悪い意味で言った訳じゃないよ。アイツはああ見えて、人を統率する力が長けているから」

素直に喜べないのは何故だろう。……ああ、篠原のあの性格のせいか。自問自答する俺の傍らで藤堂が苦笑を浮かべながら少しだけ昔話をしてくれた。

高校、大学と篠原が柔道部の主将を、そして藤堂が副主将を務めていたそうだ。藤堂と篠原、そして間宮は中学から大学までずっと一緒だったと少し前に若林から聞いていた。きっと藤堂は苦勞の絶えない日々を送ってきたことだろう。しかもかけがえのない青春時代に。恐ろしい話だ。

ところで、よくあの間宮が篠原が主将になることに文句を言わなかったものだ。

「まーさんには未だに勝てたことがないよ。というか、アイツが負けたところを見たことがない」

藤堂が言った。

「そうなんですか？」

驚く俺に、「知らなかったか？柔道やってるヤツでアイツを知らないヤツはいないよ」と藤堂が目を細めながら言った。

「知りませんでした。——そう言えば今日、間宮警部いませんでしたね」

いつも俺に悪魔のような稽古をつける間宮。稽古中に所在を尋ねて呼ばれるのも嫌だったので、今まで聞けなかったのだ。いつもなら、一番奥の自分の席から駆け足で稽古に誘ってくるのに。

「ああ、まーさんなら由美ちゃんの、娘さんの試合を見に行ってるよ」

「娘さんがいるんですか？」
意外だった。

というか、どうしてこの藤堂が独身で篠原や間宮が結婚できたのだろうか。謎だ。世の中の女性の目はどうなっているのだろう。

「可愛くて、いい子だよ」

刑事部のドアを開けながら藤堂が言った。

「試合って、テニスか何かですか？」

俺は藤堂と共に部屋へと入る。と同時に、机にうつ伏せになって眠る田村の姿が目に入った。今、一応仕事中的のはずだが。

「いや、柔道だよ」

藤堂はそんな田村を注意することなく自分の席についた。周りを見渡すと、新聞や雑誌を読んでいる人間や大胆にも机に足を乗せて眠っている人間もいた。

つかの間の休息、か。俺は何も言わずに藤堂の隣――田村の隣でもあるが――の席に腰を下ろした。

「娘さんも柔道やってるんですね」

その瞬間、脳裏に女装姿の間宮が浮かんた。

……想像力豊かな自分が怖い。

「今頃、決勝じゃないかな。県大会の。去年は準優勝だったからまーさんも気合が入ってるみたいだ」

「県大会で準優勝ですか？強いんですね」

「いや、全国大会だよ。まあ、まだ高校一年生だったからしょうがないけどね」

「全国？え、高校生？！」

小学生の部ではなかったのか。完全に間宮の遺伝子を受け継いでいるということか。再び、脳裏に女装姿の間宮が過る。

おぞましい想像を振り払うべく頭を勢いよく振ると、藤堂が驚いたように「どうした？」と声をかけてきた。

「あ、いえ、なんか虫が飛んでたんで」

俺は慌てて誤魔化した。藤堂は気にするでもなくニコリと微笑むと、引き出しに手をかけた。

危ない、危ない。おかしい人間だと思われてしまうところだった。

ホッとひと息つく俺に、引き出しから一枚の写真を取り出した藤堂が「これが由美ちゃんだよ」と俺に見せてきた。

episode 2-3 (前書き)

episode 2にepisode 5～7の内容をまとめることにしたので、掲載していたものを一旦削除させていただきました。
新しい話ができると思うので、お楽しみください。

episode 2-3

写真を持っているところが藤堂らしい。俺は微笑ましくなりながら、写真を受け取る。

写真には藤堂と篠原、間宮といったいつもの三人の姿があった。そしてその中央に、肩につくかつかないかくらいの髪を風になびかせながら愛らしく笑うセーラー服姿の女の子が映っていた。くりくりの大きな瞳に少し小さめの鼻が印象的だった。

「……あの」

俺は写真を凝視しながら、

「……この子がユミ、ちゃんですか？」

「そうだよ」

「……なるほど」

言葉が続かない。この小柄な少女が、柔道の全国大会で準優勝したというのか。しかも可愛いではないか。生命の神秘にしみじみと感心していると、ふと机に積み上げられた書類に目が止まった。

……増えてる。

目を凝らしてもう一度確認してみたが、やはり今朝よりも報告書の束が増えていた。堪らずネクタイを緩め、息をつく。

若林と里見は、ある事件の検察側の証人として出廷することになっていてまだ帰ってきていないはず。藤堂と田村は俺と一緒にいたし、藤堂とコンビを組んでいる陣内は今日は非番だ。

俺は、ペン底を鼻に擦りつけながらパソコン画面をつまらなさそうに見ている篠原に顔を向けた。眉間に皺を寄せ、聞こえるように咳払いをする。

無視する篠原。

もう一度、少し大きめに咳払いをしてみたが、篠原はパソコン画面から顔を上げることはなかった。

——こんな上司、嫌すぎる。

「できたあ」

椅子の背もたれに寄りかかり、思い切り伸びをする。

「飯食いに行こーぜ」

言ったあとに後悔した。隣の田村に普通に飯に誘ってしまった。なんてこった。集中し過ぎていたせいかな、隣が田村なのを忘れていた。

「行くか」

「お？お、おう」

断られると思っていた俺は、予想外の田村の言葉に一瞬うろたえてしまった。先に席を立つ田村の後を追うように俺も席を立った。

「食堂にいます。何かあったら携帯に連絡下さい」

藤堂にそう伝えると、彼はニコリと微笑んだ。

「いってらっしゃい」

藤堂の声を背に受けながら、俺は中学の時の担任を思い出した。生徒から絶大な人気であった長谷川先生。いつも穏やかな彼が、一度だけ本気で怒ったことがあった。

クラスで数人の生徒がひとりの女子生徒をからかって遊んでいた。あれは、言葉の暴力だった。けれど当時の俺は、気にも留めずに他の生徒と他愛のない会話をしていた。

それを知った彼は、その生徒たちを教室の前に整列させると声を震わせながら彼らを叱った。いや、彼らだけではない。クラスにいる生徒全員を叱っていた。

からかった人間はもちろん悪いが、それを見ていながら止めなかった人間も悪い。薄情な人間になるな。彼は俺たちに懇々と訴えた。その一件以来、俺たち一年三組の結束は固くなり、今も年に一回、長谷川先生を交えてクラス会を行っていた。しかも、からかわれていた女子とからかっていた男子が去年めでたく結婚した。仲人はも

ちろん、長谷川先生だった。

その長谷川先生と藤堂が重なって見えた。

「あの二人、普通じゃないもんなあ」

思わず声に出してしまった。訝しげな顔で振り返る田村に「なんでもね」と答え、肩をすくめた。

どれだけ藤堂が懇々と訴えても、あの篠原たちに聞く耳があったようには思えない。きっと何度も同じようなことを繰り返して藤堂を困らせたに違いない。

……よく見捨てなかったものだ。

「お前、明日どうするんだ？」

俺が、ニヤニヤしながら田村に聞いた。

ここは『オンブラージュ』。仕事帰りに、いつものように田村と飲んでいるのだ。

田村は、烏龍ハイを気怠そうに、頬杖をつきながら一口飲んだ。

俺と田村は、明日が非番なのだ。

「お前はどうするんだ？」

「ん、俺？俺は、映画館で一日過ごすつもり。観たいのが溜まってさ。好きなんだよね、映画。で、お前は？」

明日が楽しみで、酒がうまい。今日二杯目のジントニックを頼む。
「別に、決めてない」

つまらなさそうにそう言うと、田村は烏龍ハイをもう一杯注文した。忙しかったから休みたいのかな。そういえば、コイツ趣味とかあるのか？テレビはニュースしか見ないし、本読まないし――。

清々しい空気の、山の中を歩く仏頂面の田村――を想像したら思わず吹き出してしまった。

「大丈夫か、お前？」

田村が呆れている。

「悪い。ところでお前何か趣味あるのか？――登山とかサーフィンとか」

俺がそう聞くと、田村はジロリと俺を睨んだ。

「お前さっき失礼な事考えたら。俺だって趣味くらいあるさ」

おお、バレてしまった。でも似合わねーじゃん！お前に登山って――。

「悪い悪い。で、何？」

「何が？」

「お前の趣味だよ」

俺が興味津津な目で見てみると、呆れた顔をした。

「言わない」

「なんで？笑わねーって」

「さっき笑っただろ」

根に持つヤツだなー。

「絶対笑わないからさ」

気になって仕方ない。

田村は、グラスを持ったままため息をついた。

「・・・ピアノ」

「は？」

「ピアノだよ」

ピアノ・・・とは音楽室にあったあのピアノーか？

「えー！？弾けるの？すげーな！」

「少しだけな」

田村は照れ隠しなのか、顔を背けた。

「へー以外だな。小さい頃習ってたのか？」

——小さな仏頂面の田村が、ピアノを弾く姿が頭に浮かんだ。小

さい頃から仏頂面かいっ！

楽しそうな田村って想像できねえ！ベートーベンとか似合いそうだ。

「母親がピアニストだったんだ。だから少しだけ・・・な」

田村は、酔っているのか顔が少し赤くなっている。

「へーすごいな、ピアニストなんて。うちなんて小学校の校長だぜ？」

母親から口酸っぱく公務員になれと言われて、根負けした俺は警察官になったのだ。

「そうか？普通だろ」

いやいや、普通じゃないだろう。じゃあコイツ、お坊ちゃまだったのか？似合わないな——。

「あ、じゃあフランス語が読めるのもそのせいかな？」

確か店に初めて来た時、少しだけわかるっていったよな。

「・・・覚えてたのか。向こうに少しだけ住んでた事があるんだ」

「フランスに？すげー！」

「少しだけだぞ」

今日の田村はよくしゃべるな——酔ってるせいかな？それにしても田村の『少し』とはどれくらいなんだ？

「じゃあ母親のコンサートとかには行かないのか？」

田村の母親だから、きっと美人な人だろう。——まさかこの無表情は母親似じゃないよな。

「ないな。十年前に死んでるし」

田村は無表情のままそう言い、残りの烏龍ハイを飲み干した。

「すまん。調子に乗りすぎた」

失礼な事を聞いてしまい落ち込んでいると、田村が俺を見てため息をついた。

「別に何とも思っちゃいないさ。それよりお前のその性格どうにかしろよな」

本当に何ともないのか？表情が読めないからわからない。

今日は天気もよく、休日びよりだ。忙しく行き交うサラリーマンを尻目に、軽い足取りで歩道を歩く。

朝から、映画館で映画を三本梯子^{はしこ}し、それがどれも面白かったので大満足だった。

現実から隔絶された、映画の世界が好きだった。子供のころに観た映画に、感銘を受けたのが始まりかもしれない。

高校時代は、テニス部の傍ら、映画研究部にも入っていたくらいだ。将来は、映画を制作する仕事に就きたいと思っていたが、両親に猛反対されて諦めた。

今では、そんな俺が警察官になっているのだから人生とはわからないものである。でも、今の仕事も自分なりに満足しているけれど。陽も沈み、少しは涼しくなっていたが、まだ湿度も高く、風がないので汗がジンワリと出てくる。

こんな充実した休日は、久し振りかもしれない。忙しい日々を過ごしていたからか。

田村はどう過ごしたんだろう？ 昨日は、あのまますぐ別れてしまったので、気にはなっていた。母親のこと、触れられなくなかっただろうな。俺って、進歩ねーな――。

そんなことを考えて歩いていたら、いつもの知っている道に出ていた。ああ、癖になっているのか？ 気づかずに足が向かっていたことにおかしくなり、そのまま店に行くことにした。

『オンブラージュ』に入ると、いつものカウンターの席に田村がいた。

「なんだ。お前も来てたのか？」

少し驚きながら、田村の隣に座る。

「映画はどうだった？」

「ん？ 最高だね。やっぱり週に四本くらいは、映画観たいな。まあ忙しくて難しいけどな。お前は？」

「マスターとお前の悪口言ってた。くしゃみでなかったか？」

田村が、マスターと目配せした。マスターは、穏やかに微笑んで頷く。

「なんだよ、それ。マスターまで。気になるだろー」

口を尖らせながら言う俺に、ジントニックを置きながら「失礼しました。田村さんと、ジャズの話をしていたんですよ」マスターは穏やかな口調で言った。

「なんだ、びっくりさせるなよ」

俺は田村を横目で睨みつつ、ジントニックを一口飲んだ。この熱気の中、歩いて来たので冷えたジントニックが渴いた喉を潤して気持ち良かった。

「お前の話なんて、全くしてなかったさ」

田村が無表情で烏龍ハイを飲みながら、ふてぶてしく言い放った。それも悲しいじゃねーか。

「わざわざ口にだしていうな。傷つくだろ」

俺が拗ねた口調で言うと、マスターと田村が顔を見合わせて笑い出した。

「あー悪い悪い。一言くらいはしたぞ、お前の話を。どーせ女いないから、映画観たらここに来るだろうってな」

「うっせ、お前もいないだろ」

しかし、田村とマスターが予想した通り、俺は店に来ちゃった。くそう、悔しいぞ。

ジントニックを飲み干し、田村とマスターのジャズ談義に加わった。

やっと休日だ。

早速、携帯を取り出し、何人かの女性に電話をする。

「明日休みなんだ。よければ、新しくできたお店でランチしない？」

この仕事は休日とはいえ直前にならないと、本当に時間が取れるかどうか解らないのが難点だ。

それでも、二人の女性と約束を取り付ける事が出来た。

「よし、と」

携帯を閉じ、冷蔵庫から缶ビールを取り出す。

こここのところ、かなり大きな事件が立て続けに起こりさすがに疲れた。昇任試験受けて、警部になれば日勤のみになるから今よりも楽になるだろうが、それじゃあ物足りない気がして悩んでいる。前に、藤堂にどうして昇任試験を受けないのか聞いてみたら、『現場にいたいから』と返事が返ってきた。確かに現場のほうが、動きやすいし、遣り甲斐があると思う。でも、やはり現場を動かす上人間がしっかりしていなければ、現場は思うように動けない。

篠原は、普段はいい加減だが一旦指揮官になれば、現場重視で物事を考えてくれて、上からの圧力も撥ねつけてくれる。

藤堂だって、昇級して管理職になれば、信頼できる指揮官になるだろう。でもそれをあの人は拒む。それは、部下にとっては大きな損失な気がするが、言えない。俺が言うことではない。それに——他に何か理由があるような気がする。まあ、俺がとやかく言うことじゃないか。ソファに腰掛け、ビールを飲みながら雑誌を広げる。

そういえば、里見と非番が同じなので、修平にからかわれてたな。里見とは同期というのもあって一緒に組んでいるが、ハッキリいつて女としての魅力を感じたことはない。もっと、意志の強い女の方が好きなんだよね——俺。修平、俺と里見が同期っていうのにかなり驚いてたけど、里見に気があるのか？

そんな事を考えながらも、目は新スポットの特集をしつかり追っている。ビールを飲みながら、ダイニングバーの記事に目が留まる。お、ここいいな。総務部の女の子とのコンパを、ここでやってもいいな・・修も、顔いいのになんで女作らないんだか。若いのにもったいないね。

最近では田村と飲んでるみたいだし――。

男とつるんでないで、もっとコンパに行けばいいものを。ま、いつか。さてと、明日の為に今日は早めに寝るか。

缶ビールを飲み干し、寝室へむかう。

「――どうしよう」

明日、欲しい雑貨を買いに外出するか、家でDVDを観るか――どっちにしよう。たまの休みだし外出したいが――あまり人込みは好きではない。

でもここところ、忙しくて大分ストレスが溜まっていたから、好きな雑貨のお店にいつて癒されたいし。んー迷う。

頭を抱え、目を瞑り考え込んだ。

「決めた！」

明日は外出することにしよう。予報では、晴天って言うたし、せっかくの休みだから買い物に行こう。どんな服着ていこう？ワンピースにしようかな。普段女らしい格好ができないから、休みくらい可愛らしい服着ようかな。

そういえば、若林さんとのこと望月さんにからかわれたけれど、全くそんなじゃないのに――結局何も言えなかったな。

望月さんが強行犯捜査係に来てもう五ヵ月になるけど、すぐに皆と馴染んでしまったのが羨ましかった。

私にも色々声をかけてくれるのに、上手く答えられない自分が嫌になる。あの時は嬉しかった。私の言葉で爆弾の仕掛けられている場所がわかったからありがとう、って言われた時、嬉しかったなあ。

私も、言いたいことをきちんと伝えられたらな――。

「あんな性格羨ましい」

ため息をつきながら、ソファに横になった。

クッションを抱きながら望月のことを考える。

あの田村さんとも仲良くなったのには、本当に驚いた。田村さん、よく笑うようになったし。彼の人望なのかな。もう少ししたら、うまく話せるようになるかしら。

起き上がり、もう一度深くため息をついた。もう寝よう。

クローゼットから、ラベンダー色の花柄のワンピースと真っ白のバックを取り出し、ソファの上に置いた。

明日は早めに外出して、雑貨を買ってすぐ帰ってこよう。家の模様替えするのもいいな。

明かりを消して、寝室にむかった。

若林と里見が休みなので、山積みの書類を片付ける事になった俺。田村は、南東区で逮捕された犯人が、俺たちが担当していた事件も自供したので調書をとりに南東警察署に向かう事になった。

「頑張れよ——変わってやろうか？」

「結構」

田村は部屋から出ていった。くそう、ジャンケン三回勝負にすればよかった。山積みの書類を見て、俺は目眩がした。

愛車のエンジンを、スタートさせる。地下駐車場中に、エンジン音が響き渡る。地上への坂道をゆっくりと登ると、相変わらずたくさんさんのサラリーマンたちが往来していた。

このまま国道一号線に合流していれば無事、南東区まで行けたのだが、渋滞を見越して裏道に入ったのが受難の始まりだ。

五分程進むと、道路工事で道が通行止めになっている。

「参ったな」

引き返そうとギアに手をかけた時、近くで女性の悲鳴が聞こえた。どうせ通行止めだしな。工事の責任者に素性を伝え、車をその場に止めると悲鳴の聞こえた方へ急いだ。

資材置き場がある。声がしたのは、確かこのあたりだ。

「誰かいるのか？」

敷地内に入り声をかけると、後ろでガタン、と音がした。振り向くと、フェンスに立て掛けてあるベニヤ板の後ろから、二十代前半と思える化粧の濃い女が不安そうに出てきた。

「警察だが、どうした？」

警察手帳を見せながら言うと、女は安心したのか駆け寄ってきた。

「た・・・助けて！男に追われているの！」

女は田村にしがみつきながら、声を震わせて言った。女の手をどけながら、ため息をついた。

「その男はあんた知り合いか？」

あまりにも冷たい口調だったからか、女が怯^{ひる}んだ。

「そ、れは——彼氏だけど」

「警察はそういうのには関わらないんだ」

女を残して立ち去ろうとしたが、女が必死の形相で腕を掴んだ。

「な・・・なんで！警察でしょ？」

「民事不介入で無理だ」

腕を掴んでいる手をどけると、出入口の方へ向き直った。

出入り口には、一人の男が立っていた。女は悲鳴をあげ、背中にしがみついていた。最悪だ。顔をしかめたら、相手の男が叫んだ。

「お前なんだよ！！アリサの新しい男か？」

「警察だよ」

その言葉に、一瞬、男が怯んだが、すぐに薄笑いを浮かべた。

「へっ嘘つくんじゃねーよ！そんなタイミングよく警官が来るかよ」
くそっ！やっぱり望月と変わっておけばよかったぜ。

「残念だが、偶然、警官がいたんだよ。お前も嫌がる女を追いかけてないで、新しい女つくったらどうだ。わかったら、そこをどいてくれないか」

面倒臭いけれど、一応仲裁を試みたが、男の顔が見る見る真っ赤になっていった。

「ふざけんなよ！！やっぱりお前アリサの男だな！」

女は背中から離れ、ベニヤ板の裏にまた隠れてこちらの様子を伺っている。南東署での聴取もあるのに、なんでこんな目に合わなきゃいけないんだ——。だんだんとイライラしてきた。

「面倒だから早く来いよ。こっちは忙しいんだ！」

田村が叫ぶと、男はポケットからナイフを取り出し、両手でナイフを握り締めながら、突っ込んできた。男の体をかわし、右手首を掴んで捻りあげた。ナイフは男の手から落ち、男は両膝について呻いている。

「十五時四十分、公務執行妨害で逮捕する」

手錠をかけフェンスに男をつなぎ止め、所轄の中央警察署に電話する。女はベニヤ板の裏から出てこず、男は声をあげて泣き出した。ふざけんなよ、まったく。望月に奢らせてやる！

五分程でパトカーが来たので、後は任せて車まで戻ろうと歩き出すと、女がベニヤ板の裏から飛び出して来た。

「ま、待って！」

「所轄の警察官が来たからそっちに言って」

「ち、違うの！あの、名前教えて！」

女が、熱っぽい目をして見てきた。

「ああ、若林だ」

そのまま、女を残して資材置き場から車まで出て行くと、工事も終わり道路も通れるようになっていた。引き返す必要がなくなり助かった。

車に乗り込み、エンジンをスタートさせた。もうこんな面倒は懲り懲りだ。

「なんでだよ！」

隣に座っている望月が、納得いかない、とでも言うように声をあげた。

南東署から戻るなり、望月に奢れと言い放ったのだ。

「なんで俺が、お前に奢らなきゃいけないんだよ！しかも、お前の分の書類も片付けたのによ！逆だろー！」

「うるさい。お前の代わりに、俺が痴話喧嘩に巻き込まれて散々な目に合ったんだ。奢れ」

またあの二人の顔を思い出し、苛つきながら望月を睨んだ。

「な・・・なんだよ！自分で、結構つつって出てったんだろ！無茶苦茶だつーの」

篠原が、笑いながら仲裁に入ってきた。

「まあいいじゃねーか！奢ってやれ」

「そんな！篠原さんまで！」

「決まりだな」

恨めしそうに睨む望月を尻目に、淹れたてのコーヒーを一口飲む。
うまい。

「大変だったなー修平！」

若林が、篠原から昨日、俺が田村に奢らされた話を聞いて笑いながら言ってきた。

全然、心がこもってないですよ。

ほんと、機能は散々だった。コイツ店で、いつもよりも多く烏龍ハイ頼むんだからな。給料日前で俺がどれだけひもじい思いをしているか――。くそう、田村め。覚えてろ。

「若さんまでひでえ。ほんと昨日は、散々でしたよ。俺なんて、若さんたちと田村の書類の他に、どさくさに紛れて篠原警部が置いてった書類を片付けたのに奢らされたんですよ！」

若林が淹れてくれたコーヒーを飲みながら、隣の田村を睨んでやった、つもりが机に突っ伏して爆睡していたので効果はなかった――。

毎回思うが、仕事なのに誰も注意しないのもどうよ。コイツを甘やかしすぎだろ。

「・・・ごめんなさいね」

俺が呆れながら田村を見ると、斜め前に座る里見が申し訳なさそうに謝ってきた。

「里見さんは悪くないですよ。俺が休みの時は、俺の分の書類片付けてもらってるんですから」

謝らなければいけないのは、隣で寝ているこの男だ。

それにしても、里見が若林と同期とは驚きだ。年下だとばかり思っていたのに。

「じゃあ俺も悪くないな」

若林がコーヒーカップを片手に、笑いながら言った。

「若さんは別です。若さんの書類が一番多かったんですから」

「あららー、バレましたか」

「バレてます」

「じゃあ若林は、望月に何かご馳走してやらなきゃいかんな」

若林の隣の席の陣内が、楽しそうに笑いながら言った。

「そうですね、陣内さん、いいこと言いますね。若さんゴチになります」

「陣内さん、修平を甘やかしちゃダメですよ」

若林は口を尖らせながらそう言ってから、少し考え俺に言った。

「しかないな。じゃあ今日、総務部の女の子とのコンパ開いてやるよ」

「ほんとですか？じゃあ、仕事頑張ります」

陣内や藤堂が「調子がいいなー」と言って笑った。

でも、昨日が厄日だったのだから、今日は良いことあってもいいではないか。報告書を今日もいくつか抱えていたが、なんとか頑張れば終わらせられる。いざとなれば、田村に押しつけよう。ヤル気がでてきたぞ。

書類を紛れこまそうする篠原を阻み、昼休みの睡魔と闘いながら頑張った。俺って——単純だな、と自分のことながらおかしくなった。

その後もデスクワークをして平穩無事な一日が終わろうとしていたその時、篠原の机の電話が鳴った。嫌な予感がして、電話が終わるのを俺や若林がじっと見つめていると、受話器を置いた篠原がニタニタ笑いながら俺に言った。

「残念だったな、望月！中央署に捜査本部が設置されることになったぞ」

何ですって？！

固まったまま動かない俺に若林が「修平君、残念。また今度な」と笑いを堪えながら、肩にポンと手を置いた。若さんすごく楽しそうですね。

「残念だったな、行くぞ」

田村がニヤリと笑い、背広を片手に部屋から颯爽と出て行った。

くそーっ！

「行きますよ！行・き・ま・す！」

田村の後を追いつ、俺は走り出した。
ちきしょー。厄日続きじゃねーか！

episode 12-1 ダジャレ

中央区のビジネスホテルで殺害されたのは、T県で喫茶店を営
する山田太郎、四十一歳とわかった。

I県には、コーヒー豆の調達^{はるな}に東区にある卸店まで来ていた。

翌日朝一番に、T県から妻の山田陽菜^{はるな}が駆け付けてきた。長い黒
髪をひとつに束ね黒いワンピース姿の彼女は、どこか遠くを見るよ
うに目を宙に這わせ呆然としていた。

安置室に案内すると、目の前に現れた残酷な現実^{はるな}に全身を震わせ
両手で顔を覆った。冷たくなった亭主にしがみつき泣き崩れるのを
見て、いたたまれなくなり安置室から出たが部屋からは陽菜の慟哭
が哀しく漏れ響いていた。

捜査会議が始まり、中央警察署の刑事が事件の概要を説明する。

「死亡推定時刻は昨日の十三時から十六時の間。死因は、鋭利な刃
物による刺殺です。凶器はまだ見つかっていません。指紋も、ホテ
ル関係者、被害者以外のものは見つかっていません。唯一、部屋の
ドアノブの指紋だけが拭き取られていました」

何人かの捜査員が、ホテルの関係者からの話を報告した。ホテル
のフロント係の話では、被害者本人は、シングルの部屋を二泊の予
定で希望していたらしい。しかし、ホテルは満室状態だったため、
唯一空いていたツインの部屋をとったそうだ。チェックイン時は一
人だった。

このホテルは、フロントに寄らずカードキーをもったまま外出が
出来るので、いつ被害者が外出先から戻ったのかはフロントではわ
からないそうだ。念のため、妻の陽菜の写真を見せてみたが、フロ
ント係は「わからない」と答えた。

それもそのはずで、この日はC市名物の「はじけ祭(※)」があ
り、多くの祭参加者や観光客で街は賑わっていた。

この祭りは、主要道路を通行止めにして、一般参加のグループが

踊りながら道路を練り歩くという祭りである。年々参加グループの数が増え、地元婦人会や幼稚園児のグループや会社の有志で作ったグループ、サークルなど今では七十のグループが踊りを競っている。観光客も年々数が増え、今年は二日間で八十万人の人が祭りを見るためにC市に来ていた。

ホテルが満室状態だったのもこのためで、被害者がいつホテルに戻ったかわからないのも無理はない。

T県警からの資料では、山田は資産家らしく、いくつかのビルオーナーをしていた。喫茶店は、趣味でやっているようなもので常連客も五、六人ほどの店らしい。その後も、いくつかの報告があったが犯人に繋がるものはなく三時間程で会議は終了した。

「望月、お前T県に行ってこい」

篠原が旅費申請書にサインし、俺に手渡した。

「T県にですか、わかりました」

内心、小躍りしながら旅費申請書に目を通した。ん？二人？まさか――。

「田村と一緒にだ。土産は酒以外、受け付けないからな」

くそう。なんで俺と田村がセットなんだよ。――そりゃコンビ組んでるけどさ。

「T県いいな！」

若林が色々と名所を教えてくれた。有り難いが、遊びに行くわけじゃないし、観光名所へ野郎二人で行けと？田村は相変わらず無表情で捜査資料を読んでいる。まあいいや。

I県からT県までは、新幹線で四時間程で行くことができる。被害者が経営していた喫茶店は、T駅から徒歩十分のところにある。

駅前にいくつかビジネスホテルがあるだろうし、大丈夫だろう。

田村を見ると、お前に任せたと云わんばかりに無表情でコーヒーを飲んでるところだった。俺は添乗員じゃねーよ。

※はじけ祭り…「はじけまくり」のダジャレ。C市役所の観光課、課長である斉藤栄一郎が考えたネーミング。「みんなで、歌って踊ってはじけまつ（く）ろうぜ」観光課職員全員が猛反対の中、斉藤本人がかなり気に入ってしまいこのネーミングで押し切られてしまった。市役所全職員が一丸となって阻止してほしかったと、のちに市民運動にまで発展したが、今では受け入れられ愛着をもたれている。ちなみに斉藤のあだ名は「極寒大王」。毎日のように振りまくダジャレに観光課の職員は寒い思いをしている。

episode 12-2 缶コーヒー

翌日、十時十分発のぞみ319号に乗りT県へ出発する。

二人席の窓側に田村が座り、俺が通路側に座る。席に着き、鞆から手帳を取り出すと新幹線が動き出した。最初はゆっくりと、そして次第にスピードを上げ車窓の景色はコマ送りのような速さで後ろに流れていく。

「腹へったな」

乗ってすぐ飯かいつ。呆れながらも、自分もさっきから空腹を我慢していた。買ってきた駅弁を食べることにする。手帳を見ながら、ふと目に付いたことがあった。

「なあ、死亡推定時刻が十三時から十六時までってあるけどさ、被害者が殺されたのって、犯人を部屋に通してすぐじゃないのかな？」

「指紋のことか？」

驚いて田村を見た。なぜ俺の言いたいことがわかる?! エスパーか!

「今頃気付いたのか？」

くそう、こうなったら腹立ち記録をつけてやる。俺は手帳に線を横線を一本引いた。ていうか記録してどうする俺。

そんな俺を無視して、田村は牛肉弁当を食べながら話し出した。

「部屋には指紋が残っていなかった。ある程度部屋に居れば、どこかにその形跡が残るのに拭き取られた場所はドアノブだけ。つまり犯人は、ドアノブしか触ってないということだ」

そう。その事に気付いた。

「でも、手袋をはめた可能性だってある。結局まだ、断定は出来ないさ」

田村はそういうと、牛肉弁当の最後の一口を口に入れた。

あ、手袋か——。この事件は計画殺人という方針で捜査を進めている。ホテルでは、部屋に刃物や凶器になるようなものは置いてい

ない。実際、部屋から持ち出されたものもない。だから凶器は犯人が持ち込んだということによる判断からだ。手袋だって、用意してきたとしてもおかしくない。俺ってぬけてるな――。

俺が事件について考えていると田村のムカつく声が聞こえてきた。「少しは頭働くようになってきたな」

はい、もういっぽーん！ギリギリ！と力を込めて手帳に記録をつけていると、携帯の着信を報せるバイブレーションの振動が体に響いた。驚く俺に田村は呆れながらデッキの方を指差した。

「わかってるよ！」

電話に出ると、相手は若林だった。何か新たな情報がでたのだろうか。

「何かあったんですか？」

「ん？何もー。あのね、部屋を取ろうと思ってホテルに電話したらさー、ツイン一部屋しか空いてないらしいんだよね。どうする？」
気の抜ける電話だった。

「わざわざありがとうございます。他のホテル当たってみますね」
ヤツと同じ部屋なんてくつろげねー。

「いやそれがさー、駅付近にあるホテル全部当たってみただけど、まだ夏休み中だろ？空いてないんだよね。そのホテルのツインしか」
今、最後の方、声が震えて聞こえたのは気のせいかな？

「――じゃあ・・・そこで、お願いします」

頭がクラクラしてきて、振動する壁にもたれかかりながらため息をついた。

「帰ってきたら、また飲みに連れてってやるよ」

若林が笑いながら、ホテル名を教えてくれた。

「お願いしますよー」

電話を切って席に戻ると、田村が缶コーヒーを飲んでいた。俺の席にも、同じものが置いてあったので、まあよしとしよう。

「なんだって？何かあったのか？」

「ホテルが、ツインしか空いてないんだとよ」

そう言うと、田村が心底嫌そうな顔をした。俺だって嫌だよ！気を取り直して、手帳を見ていく。

「被害者は、コーヒー豆の調達に、東区にある卸店まで来てたんだよな。そうとうコーヒーにこだわってたんだな」

東区の卸店を後にしたのが、十二時頃だ。その後の行動は、わかっている。

「趣味が高じて、喫茶店を開くことにしたらしいな。これよりは、うまいだろう」

田村が、食後の缶コーヒーを飲みながら失礼なことを言った。

「当たり前だ。缶コーヒーよりまずかったら、商売にならないだろ」

田村は、コーヒーにこだわりがまったくなくない。缶だろうがインスタントだろうが、コーヒーであればいいのだ。安上がりなヤツだ。ちなみに強行犯係で飲んでいるコーヒーは、若林こだわりのブレンドコーヒーだ。コーヒー代を課で積み立てて、毎回彼が買ってきてくれている。

T駅に降りた俺たちは、まず荷物を置きにホテルに向かった。

若林が予約してくれたのは、駅の目の前にある九階建ての小綺麗なホテルだった。若林が気を利かせなければ、俺たちはベットで寝れなかったかもしれない。夏休みのことを、すっかり忘れていた。

ツインの部屋は、思っていたよりも広く清潔感のある部屋だった。これなら疲れも取れそうだな、と安心した。荷物を置き、すぐに部屋を出て、タクシーでT県警へ向かう。

県警には篠原から連絡がいつていたので、挨拶もそこそこに被害者の店まで県警の谷口という若い刑事が案内をしてくれることになった。

「二人とも若いですね。幾つですか？」

ジャニーズ系の、かわいらしい顔立ちのこの刑事は二十九歳だという。

細身のスーツをさらりと着こなすあたり、若林と気が合うだろうなと思った。警察車の助手席に乗り込み、出発する。

「二人とも二十六歳です。谷口さん訛りがないですが、関東にお住まいだったんですか？」

後部座席の田村が一切話さないの、俺が気を使わなくてはいけない。だから、その人見知りなんとかしろって。

「大学が東京だったんだ。なんか、訛りを使うのが恥ずかしくて――、なんて職場で言ったら怒られるけどね」

やっぱり若林に似ている。彼とは、仲良く出来そうだ。

「事件のことですけど、何かこちらでわかりましたか？」

今まで何も話さなかった田村が急に声を掛けたので、谷口は一瞬言葉に詰まるがすぐに田村の質問に答えた。

「夫婦仲は、悪かったようだ」

以外だった。安置室で、被害者にしがみつく陽菜を思い出す。

「近所の人がよく、喧嘩する夫婦の声を聞いてたみたいだ。なんか一方的に奥さんが、旦那を怒鳴っているらしい。前は仲よかったらしいんだけどね――」

「そんな風には、見えなかったのにな」

安置室での奥さんの様子を谷口に話しながら、なんだか無性に哀しい気持ちになった。

「――演技だったんじゃないか？」

俺が口にできなかったことを、谷口がサラリと言った。あれが演技だったら――俺は怖くて結婚なんてできないよ。

「着いたみたいだな」

後部座席の田村が、手前にある喫茶店を指差した。

episode 12-3 ブレンドコーヒー

ロツジ風の一軒家を、改築して作られた喫茶店には『太陽』という名前が書かれた木のプレートがつけられていた。夫婦の名前から一文字ずつとってつけたのだろう。昔は仲がよかった――か。いつから夫婦の間に、亀裂がはいったのだろう。ぼんやりそう思いながら、プレートに刻み込まれた太陽の文字をじっと見つめた。

店の入口のドアには、臨時休業の張り紙が貼ってあった。入口の横にある玄関のインターホンを押すと、ドアがゆっくり開き憔悴しきった顔の陽菜が顔を出した。店の中に通されると、コーヒーの香りに全身が包まれた。主張しない柔らかなコーヒーの香りは、オンブラージュを思い起こさせた。ここはきつと、あの店と同じだった、と思うと残念な気持ちになった。

「よければコーヒー淹れますね。主人のブレンドは、美味しいと有名なんですよ」

陽菜がぎこちない笑顔を浮かべながら、お湯を沸かしはじめた。

「奥さんは、どうしてご主人と一緒に行かなかったんですか？」

席に着くなり、谷口はいきなり陽菜に尋ねた。その質問に、沸騰したお湯をフラスコに移す手の動きが一瞬止まった。

「お店がありますから」

「夫婦仲が、悪かったと聞きましたが？」

谷口が遠慮なしに言った。

「そんな事は、ありません」

伏し目がちに、震える声で答えた。尋問に対する恐怖からくる震えなのか、それとも失礼な質問に対する悔しさからくる震えなのかわからない。

香り豊かなコーヒーが、三人の前に置かれた。一口飲むと、口の中にほのかな酸味と甘味が広がる。これは、美味しい。若林のコーヒーも美味しいが、これにはかなわない。

「美味しいです。こんな美味しいコーヒーは初めてです」

俺の言葉に、やっと奥さんに笑顔が浮かんだ。

「自慢の味なんです。喜んでいただけてよかった」

結局、収穫はこのコーヒーだけで他には何の情報も得ることができなかった。自慢のコーヒー豆を土産用に購入し、店を後にすることにした。

「失礼な質問の数々、申し訳ありませんでした。もし何か思い出したことがあれば、また県警まで連絡を下さい。失礼します」

店を出ると、少し先の電柱横に隠れて女がこちらを覗いていた。

「あの、山田さんが亡くなったって本当ですか？」

女が、俺たちのところへ駆け寄ってきた。

「貴方は？」

俺たちは店から離れるように、女を促し歩き出した。

「私、叶といいます。あの店の常連なんです」

ただの常連客ならば、奥さんに聞けばいいことなのだが。

「山田さんは残念ながら一昨日に、お亡くなりになりました。ところで、少し時間よろしいですか？ 山田さんご夫婦についてお聞きしたいんですが」

口元を手で覆い、涙ぐみながら叶は大きく頷くと、まだ何も聞いていないのに山田夫婦について話し出した。

「山田さん可哀相でした。毎日毎日、奥さんが機嫌悪くてすぐ怒鳴るんです。山田さんは優しいから——いつも奥さんに気を使っていました」

ただの常連客にしては、随分と被害者の肩を持つではないか。

「そんなに、毎日喧嘩をしていたんですか？」

「そうなんです。客の前でも平気で、山田さんに怒鳴るんです」

叶は、身を乗り出しながら訴えるが、あの陽菜がそんなことするとは信じられなかった。

「山田さんは、奥さんと別れたがってたんでしょうか？」

叶をより饒舌にさせるためか、谷口が質問した。

「当然よ！毎日あんなに一方的に怒鳴られてれば、愛想つかすに決まってるじゃない！」

叶が当たり前だと言わんばかりに、谷口を睨んだ。

「別れて貴方と一緒にになると？」

無表情の田村に、叶は一瞬怯んだが開き直ったように言い放った。
「ええ、そうよ。私、山田さんのコーヒーが好きで店に通うようになったけど、いつの間にか山田さんの事を好きになってた。山田さんにも私の気持ち伝えてあるわ」

妻のいる男に恋するほど不毛な事はないと思うが……。女は怖いな。

「そうですか」

田村はもう話に飽きたらしく、早々に話を切り上げた。谷口が、事件関係者には皆聞いていると説明し、事件当日の叶のアリバイを聞いた。一日中、家にいたと彼女は言う。叶に連絡先を聞いて、俺たちは県警に一度帰ることにした。

「自己主張の激しい女だったな」

谷口が、苦笑しながら言った。

「でも、やっぱり夫婦仲悪かったのかなあ」

「望月さんは奥さん派なの？実は、近所の人の話だと被害者は奥さんのこと、随分大切にしていたらしいよ。だから、さっきの彼女の話を聞いて、あれ？と思ったんだよね。喧嘩するほど仲がいいとも言えうしね」

「被害者に恨みを抱いてる人は？」

「それが、温厚な男だったらしく悪くいう人が一人もいないんだ」

俺たちが話している間も、田村は無表情で後部座席に座っていた。
お前ね――。

「まあ、さっきの彼女については明日調べることにして、今日常連客の四人から話を聞くことになっているから行こうか。あと一人は今、S県に行っていて明日話を聞くことになっているから」

駅前の駐車場に止めた警察車に乗り込み、常連客のいるビルに向かった。

雑居ビルに小さな旅行会社を構えている川田は、冷房の効いている室内にも関わらずハンカチで汗を拭っては熱心に山田夫婦について語ってくれた。

「あそこの店は美味しいんだけど、こだわってる分、他より割高だからあんまり客が入らないんだよね。まあ、趣味でやってる店だから本人たちはあんまり気にしてなかったみたいだね。店に通うようになってもう八年だけども、あの二人すごく仲良かったよ。最近はずっと言い争いとかよくしてたけど、すぐ仲直りしてたよ。羨ましいね」

「叶という女性はご存じですか？」

さつき会った、女性のことを聞いてみた。

「あー彼女ね。一年くらい前から常連になったんだけど、最近は週に四日くらいは店に来てたんじゃないかな。いつも一人でコーヒー飲んでさ。若いのに遊ぶ男いないのかねえ」

谷口から聞くと、彼女は現在無職で、実家に住んでいるようだ。

「その他に、気付いたことはありませんか？」

しかし、それ以上の情報は得られなかった。結局残りの三人も同じような内容だった。そのまま県警に帰り、篠原に叶のことだけを伝えて初日が終わった。

「ほんとには、美味しい店あるから連れて行ってあげたかったんだけど、ごめんね」

県警に戻ってみると、強盗殺人事件が起こっていて捜査員たちが慌ただしく走り回っていた。谷口もどっちの事件に加わることでなくなり、明日は俺たち二人で聞き込みにまわることになった。

episode 12-4 温暖化な南極

谷口に店の場所を聞き、今日のお礼を伝えて県警をあとにした。

タクシーに乗って、谷口から教えてもらった店の名を告げ、シートにもたれかかった。疲れた――。どこも同じなんだな。殺人を犯す人間がいる限り殺人は起こる、か――。思わず大きなため息をついてしまった。

「お前は考え込みすぎだ」

隣の田村が横目で睨んできた。お前はなんでもお見通しなんだな。「わかってるよ」

窓の外を見ると、皆楽しそうに笑いながら歩いている。今このときにも、犯罪は起こっているのだ。

「わかってても――遣り切れないじゃねーか」

犯罪が身近なこの仕事だからこそ、余計に遣り切れない。窓の外の行き交う人々を見ながら、ボソリと呟いた。

「深みにはまると抜け出せなくなるぞ」

眉間に皺を寄せながら、田村が言った。

考えるのが、無駄なのは解っているさ。でも、そんな簡単に割り切れるもんじゃないだろ。田村、お前はどうかんだ？お前は割り切れるのか？――深みか。立ち止まらないって決めたのに。はまりまくってるじゃねーか。進歩ねーな、俺。額に手を当て、田村に気づかれないように小さくため息をついた時、タクシーが止まって一瞬ビクリとした。店に着いたのだ。

「うまい」

地元名産の日本酒に舌鼓を打った。テーブルには、数種類の食べ物が並んでいる。

谷口の紹介してくれた店は、威勢のいい声が飛び交う活気のある店で大勢の客で賑わっていた。料理も美味しい、酒の種類も揃っていて安い。なのに、田村は相変わらず烏龍ハイだ。

「調子がいいヤツだな」

田村が烏龍ハイを飲みながら、呆れた様子だ。

「テンション上げなきゃ、やってられないだろ。俺は、立ち止まらないって決めたんだから。だから飲む」

頬杖をつきながら、口を突き出した。田村は表情を少し和らげ、グラスをテーブルに置き明日の予定を確認してきた。

「明日は、S県に行ってるっていう坂崎っていう女性に話を聞いて、今日の彼女の身边を調べようか。彼女、被害者と一緒になるみたいなこと言ってたけどさ、なんか話聞いていると一方的な横恋慕みたいな感じなんだよな」

「思い込みの激しい女なのかもな。以前の勤め先にも行ってみよう」
「俗に言う、三角関係か？彼女は家にいたって言うしアリバイはな
いんだよな。奥さんは、店にいる姿を見られてるんだよな」

「近所の人が、店の外から見たんだよな。客はいなかったらしいが」
場所が駅前から少し外れているので、集客数はかなり少なかった
ようだ。それでも、ビルの収入があったからやっていけたのだろう。
ふと、憔悴した陽菜を思い出す。

「奥さん一人でお店やっていくのかな」

「さあな」

「お前は冷たいなー。南極の海水くらい冷たいぞ。・・・ああ温暖
化で南極暖かくなってるから違う違う、えっとね、ちよつとまって
よ・・・」

「お前・・・酔うとウザイ」

「おおっ、酔ってないときはウザくないんだな、ひひ」

「いつもにましてウザイってことだよ」

「そーですかあーだ。さてホテルに戻るかあ。あ、先輩お勘定お願
いします」

嫌そうな顔をする田村を残して店の外にでると、熱気が体にまと
わりついた。街にはまだ多くの人が溢れ、夏の終わりを楽しんでい
るかのようだ。

「ホテルまで歩いて帰ろーぜ。どうせ駅前まで十分くらいだしさ」
仏頂面で店から出てきた田村にそう言うと、フラフラと歩き出した。同じように酔っ払った観光客と何人もすれ違いながらホテルに着くと、ちょうどロータリーから深夜バスが出るところだった。

「バスの運転手も大変だね・・・」

部屋に戻り、シャワーを浴びてもなかなか眠る気になれなかった。田村がいるからではないが――。田村が唯一の椅子に座り、手帳とにらめっこしているのでベッドに腰掛ける事にした。

「ビール飲むか？」

「ああ」

冷蔵庫からビールを取り出し田村に渡した。

「今んとこ怪しい人物は？」

「陽菜、叶――ぐらいか。明日の証言でまた人が増えるかもな」

二泊の予定のこの出張・・・無事二泊で帰れるのか心配だ。

「予定通り、絶対名所を見て歩くぞ！」

「そんな予定はない」

田村につれなく一蹴された。

「なんだよ冷たいなー。お前南極の海水くらい冷たいよ・・・あれ、温暖化だからだめだ。えっとねー」

「それはもういい、お前は寝ろ！」

「・・・ネルソン？誰？提督？」

「お前はもう酒飲むな」

持っていたビールの缶を、奪われてしまった。

「イビキは勘弁してね」

ベッドに入りながら、背中を向けている田村に言う枕が飛んできた。

「あぶねっ」

「寝ろ」

「あいよー」

長い一日が終わった。

episode 12-5 ブルームーン

目が覚め、時計を確認すると五時だった。また早くに目が覚めたな。隣のベッドを見ると、まだ田村は背を向けて寝息を立てていた。起こさないように洗面室に向かって、顔を洗った。

洗面室から出ると田村も起きていた。

「早いな」

「デリケートなんだよ、俺」

「よく言うよ」

寝癖のついた頭を掻きながら、田村は洗面室に入って行った。

ホテルのラウンジで軽い朝食を終え、坂崎との待ち合わせ場所の駅構内にある喫茶店に向かった。S県に友人の結婚式に出席していた彼女は、急遽予定を変更してI県に帰ってきてくれたのだ。

店の入口から真直ぐ俺たちの前に歩いて来た女性は、黒いワンピースからスラリと伸びる長い手足に、肩にかかるほどの黒髪のストレートヘア、自信に溢れた切れ長の目が印象的な和風美人だった。

彼女が、坂崎紫保子だ。

「I県警の谷口さんでしょうか？」

「いえ、谷口は別の仕事が入り来られなくなりました。私たちはI県警の望月と田村と申します」

俺たちは立ち上がり挨拶をすると、彼女に空いている席に座るよう促した。

「山田さんが亡くなったって本当でしょうか？」

座ると同時に彼女は尋ねてきた。

「はい、残念ながら三日前の二十五日にI県のビジネスホテルの一室で殺されているのを発見されました」

「どうして山田さんが――陽菜は？陽菜は無事ですか？」

口許を両手で押さえていた彼女は、テーブルから身を乗り出して聞いてきた。

「大丈夫です。奥さんの陽菜さんは無事です。随分と陽菜さんと仲がいいようですね」

田村がメモ役を譲らないので、俺が聞き役にまわる。もう慣れたけど。

「陽菜とは高校の時の友人なんです。私が関東の大学に行ってから連絡をずっと取っていました」

「山田さんとはいっつ？」

「大学卒業すると同時に、陽菜は結婚しました。彼女は地元の大学に行っていて、彼とは同級生だったそうです」

彼女はそのまま関東で就職するが、七年後、地元のI県に戻っている。そして、山田夫婦に感化され自らも、実家近くに喫茶店「ブルー・ムーン」を開いた。「ブルー・ムーン」とは、バラの品名で紫色の花を咲かせるバラだそうだ。

「何か山田さんが殺されるような理由は、思い当たりませんか？」

彼女は、力なく首を横に振る。

「あの二人は、人に恨まれるような人間じゃありませんから」

このセリフは昨日何度も聞いたセリフだ。彼女のその言葉に頷き、また質問をする。

「いつも山田さんは、一人でI県まで豆の調達に行かれてたんですか？」

彼女は頷き、「店もありますし、その時は私が陽菜の手伝いに入っていました」と言った。

「そうですか。ところで話は変わりますが、なぜ貴方は喫茶店を開かれたんですか？」

「ああ、あの二人の店に行くといつも私、癒されるんです。私も同じように誰かを癒せるような店を開いてみたいと思ったんです。それに地元は観光名所もあるので、採算もなんとか取れると思って――」

少し恥ずかしそうに彼女は言った。

「昨日『太陽』でコーヒーをいただきました。味も素晴らしかった

ですけど、店の雰囲気がとても素敵でした」

俺の言葉に、彼女は自分のことのように喜んだ。

「あの二人は私にとって太陽だったんです。暖かくて、眩しくて、二人を見ているだけで元気になった。陽菜が——赤ちゃんができないってわかってても、太郎さん、優しく彼女を抱き寄せて言ったんです。『一緒に喫茶店をやろう』って。『太陽』って名前も子供が出来たら付けようって考えていた名前なんです。だから——あの店は、二人の子供なんです」

彼女は涙を流し、嗚咽を漏らした。関東にいる時、色々あったんだな・・・と彼女を見て思った。彼女は、山田夫婦に救われていたのかもしれない。

「では、叶さんという常連客はご存じですか？」

質問をするや否や、勢い欲顔を上げ、怒りを帯びた目を俺に向けた。

「知ってるも何も！あの女のせいで、陽菜がどれだけ傷ついたか！・彼女です！山田さん殺したのは！」

彼女が興奮して、机を思い切り叩いたので近くにいたウェイトレスがびっくりして顔をしかめた。

「——夫婦喧嘩の原因は、叶さんだったんですか？」

「ええ。始めは、コーヒーを飲みに来ていたただの常連客だったんです。でも会社を辞めることになって落ち込んでいた彼女に、山田さんが特別ブレンドを淹れて彼女を慰めたんです。そしたら何を勘違いしたのか彼女、山田さんにアプローチしたんです」

最初は、二人共相手にしていなかったらしい。しかし、ある時から無言電話がかかるようになった。毎日のかかってくる無言電話と連日店に来ては、山田を見つめる叶に陽菜は我慢の限界を超えてしまった。元々おとなしい性格の陽菜は、精神を患い精神科に通うようになったらしい。山田は何度も、叶にもう店には来ないで欲しいと言ったようだ。だが、彼女はその後も店に来続けたのだ。

「あの女——前に街で見掛けた時に、連れの女友達に言ってたんで

す。あと少しで私のものになるって。全然・・・山田さんの気持ち伝わってなかった」

悔しそうに、坂崎は唇を噛んだ。妻を苦しめない為に、山田が必死に頼んでも彼女には伝わってなかったのだ。この人は、憧れの二人の家庭が壊れていくのが、我慢できなかったんだろう。

「すみません――見苦しいとこ見せてしまって。お願いします。必ず犯人を捕まえて下さい！」

目を赤く腫らして、坂崎は俺たちに訴えた。勿論そのつもりだと答えると彼女は、安堵した。坂崎は、今から陽菜のところに向かうつもりだと言った。

駅前で俺たちは別れ、彼女から聞いた叶の前の勤め先に行くことにした。

episode 12-6 ロックオン

叶は、地元の建設会社で受付をしていた。同僚である女性社員に話を聞くことにしたのだが、皆話すことは同じだった。

彼女は、いつも妻子ある年上男性社員に手を出すのだそうだ。

これまでに二度、相手の奥さんが怒鳴り込んできたことがあるらしい。女性社員曰く、自分のせいで他人の家庭が壊れることに酔っていたらしい。しかし、次の相手が悪かった。本社からきた支店長代理に、いいように遊ばれ奥さんにも相手にされず、会社で暴れたのが原因でクビになったのだ。

そして山田に乗換え、自分を取り戻したってどこか――。迷惑な話だ。

「叶があやしくないか？」

会社を後にして、叶の家にタクシーで向かいながらメモを見つめる田村に声を掛けた。

「さあな、まだわからない」

家にいたという彼女は、アリバイがない。山田を追いかけて、I 県に行ったのではないか？

「相手にされていないのにわざわざ？」

エスパー田村が俺の心を読んだ。

「しつこくすれば相手が折れるかも・・・はないよなあ」

周りの話を聞くと、山田はそんな男ではない。陽菜を傷つけることを自らしないはずだ。

「最初から殺す気だったんだよ――会社で暴れたっていうくらいだから」

「そこまで出来る女じゃないだろ。所詮、相手に無言電話かけるくらいが関の山だろ」

確かに――殺すほど山田を愛していたわけではないのだろう。彼女は、自己満足のために山田夫婦を苦しめていたのだから――本人

は自覚していないかもしれないが。叶の家に、タクシーが着いた。俺たちを待ち構えていたかのように、玄関から彼女が出てきた。

「上がって下さい。もっと早く来ると思っていたのに」

媚びるような口調で、彼女は俺たちを家に招き入れた。

「I 県の刑事さんなんですか？ 二人ともお若いですね」

お茶を出しながら楽しげに話す彼女に抵抗を感じた。昨日の今日で、なぜそんなに楽しそうに笑えるんだ。背筋が寒くなるのを感じつつ、田村がメモを準備して待っているの、仕方なく俺が話を切り出す。

「貴方は、山田さんの亡くなった二十五日家にいたそうですが、どなたかそれを証言してくれる人はいませんか？」

「いないです——でももういいんです。私もう山田さんのこと何とも思っていないですから」

彼女の熱っぽい視線が、俺に向けられている。狙われてるのか、俺？ 冗談じゃない。

「そうですか、では何かあったらまた連絡下さい」

急いで立ち上がりかけると、彼女は何かを思い出したかのように慌てて立ち上がる俺の腕を両手で掴んだ。

「待って！ そういえば、確か二十五日は……お客様が来ました」それがもし本当なら、彼女のアリバイが証明される。座り直して、彼女に誰が来たか聞き返すと覚えていないと言う。

「どこかの勧誘の人だったんですけど、でも確か今日また来るって言っていました。だからもう少し家にいて下さい。ねっ！」

叶は、覗き込むようにそう言うのにつこりと笑った。うーん、いつ来るかわからないのに足止めされるのは——時間が惜しい。

「では、その方が見えたら連絡下さい」

携帯の番号を書いたメモを、渡そうとすると田村がそれを制した。「いい加減にしろ、同じことを繰り返すな」

叶に言い放つと、田村は俺の手を引っ張って外に出て行く。叶は泣きそうな顔をして、放心したまま動かなかった。

「バカが。アレはお前を引き止めておく為の嘘だよ」

玄関から出ると、田村が横目で睨みながら言った。ゾッ・・・とした。もし、あのまま携帯番号を渡していたらと思うと。そうまでして、彼女は男に何を求めているのだろう。やはり自己満足ではないのか――。あまりにも哀しい行為ではないか。陽菜はどれだけ苦しかっただろう。病院にまで通うくらい。

「――まさか」

「被害者に恨みを抱くような人間はいなかった。叶も殺しが出来る人間ではない。残るは――」

「でも、昼近くに姿を確認されている彼女にはアリバイがあるぞ。俺たちの把握していない別の第三者がいるんじゃないか？」

「もう一度、彼女の店に行こう」

タクシーに乗って行くと店は閉まっていた。近所の女性に聞くと、坂崎が彼女を連れて地元に戻ったらしい。

「あの、すみません。確か、あなたが陽菜さんを見かけた方ですよね。二十五日ですが奥さんは本当に店にいましたか？」

近所の女性は首をかしげながら、店に入っていないけどカウンターに人がいたのは確かよ、と以前と同じように答えた。やはり、犯人は第三者なのか？と考え込んでいると、女性は思い出したように「ああ」と呟いた。その声に反応して、俺たちが振り向くと彼女は少し恥ずかしそうに言った。

「たいしたことないのよ。確かその日、開店が早かったのよ。朝、ゴミを出しに行った時にはもう開いていたし」

「何時頃ですか？」

「七時前よ。ここゴミの回収が早いから大変なのよ」

「二十五日だけですか？時々早めの開店などはなかったですか？」

「そういえば――あら、ないわね。いつもは九時に開店してたわ」

店の開店は九時のはずだ――。なぜ、二十五日だけ開店を早めたんだ？礼を言って駅前まで戻った。坂崎の地元まで、車で二十五分程で行ける。田村が駅前のレンタカー店で車を借りている間、ロー

タリーで待つことにした。いくつかのバス停がある。暇つぶしに一つ一つ見ていると——見つけた。
まさか——コレを使ったのか？

episode 12-7 太陽のエレジー

慌てて、店まで走り出した。さっきの女性が、玄関前に何人かの女性と立ち話していた。

「すみません!」

息を切らしながら声を掛けると、びっくりして皆が振り返った。

「二十四日の夜は・・・何時まで・・・店は・・・営業してましたか?」

「貴方、大丈夫?二十四日夜?そういえば――十二時頃外みたらまだ店開いてたわね。今、皆で話していたんだけどね。この田中さん店に入ったらしいのよ、ねえ」

田中さんは、困ったような顔をしながら頷いた。

「たいしたことないから警察の人にも言わなかったんだけどね、お昼頃店に行ったら、席に座っていた男の人に、陽菜さんなら買い出しに言ってるよって言われたのよ」

「どんな男性でしたか?」

「よく店にコーヒーを飲みにくる方ですよ、いつもハンカチで汗拭いてる人よ」

川田だ。始めてあった時、エアコンの効く部屋でハンカチでずつと顔を拭っていた彼を思い出した。

「ありがとうございます」

礼を言うと、駅前まで急いで引き返した。駅では、田村がバス停の時刻表を見ながら立っていた。

「夜中も店は開いていたのか?」

さすがエスパー田村!

「十二時頃にまだ営業してるのを・・・見た人が・・・いた」
走り過ぎて心臓が破裂しそうだ。

「話は車の中で聞く。乗れ」

田村に運転を任せ、さっき聞いたことを話した。

「おかしいな」

田村が呟いた。そう、おかしい。店にいたのなら川田は何故そのことを言わないのか。店にいなかった陽菜を庇うためか？ いや違う、話せない何かがあったんだ。彼は、隠しごとをしている。

誰もいない店。昼頃確認された、カウンターの人影。陽菜と思われるていたその人影は、陽菜ではなく川田だ。何をしていたのかは、おおよそ見当がつく。携帯を取り出しI県警に電話する。谷口にこのことを説明し、川田のもとへ向かってもらうように頼んだ。

陽菜は、店にはいなかった。遠く離れたI県にいた。物証もなく、あれだけの証言で陽菜が犯人であると立証するのは難しい。だが、犯人は彼女だ。

I駅からは、I県行きの深夜バスがあった。彼女は、それに乗って旦那のもとへ向かったのだ。篠原に連絡を取って、陽菜が飛行機や新幹線を使っていないか、もう一度確認してもらうように頼んだ。その後、叶に電話する。

「二十四日、貴方は山田さんの家に電話しませんでしたか？」

受話器の向こうで、彼女は声を詰まらせた。

「奥さんに、何て言ったんですか？」

「私——私は、ただ・・・山田さんと今一緒にいるって・・・」

「叶さん、貴方すべてを知っていたんじゃないですか？」

言い終わる前に、電話が切れた。彼女は、陽菜がやったことを知っていたのだ。知っていて——何も言わなかった。言えなかったのか。自分のしたことが、何を意味するのかを考えるのが、怖かったのかもしれない。だからといって、許されることではないのだが——。

坂崎の店は、閉まったままだった。坂崎のご両親に聞くと、砂丘に行ったと言う。砂丘に着くと、二人の女性が座り込んでいた。

「——刑事さん」

俺たちに始めに気付いたのは、坂崎だった。陽菜は、どこか遠くを見たまま動かなかった。初めて陽菜に会ったときもこんな状態だ

った。彼女の目には何が映っているのだろう。

「刑事さん、どうしたんですか？」

坂崎が、心配そうに聞いてきた。

「陽菜さんに伺いたいことがあって来ました。陽菜さん、二十五日は早朝から店を開けていたそうですが、何故ですか？」

「刑事さん？何を――」

坂崎を制しながらも、陽菜に質問の答えを促す。陽菜は、声が届いていないのか何も反応しない。

「二十四日の深夜まで営業していたのは何故ですか？」

「刑事さんっ！」

坂崎の悲鳴にも似た叫び声が、俺を非難する。

「I県まで行く深夜バスがI駅から出ています。それに乗ってI県まで行っただけではないんですか？」

陽菜はもうどこか遠くへ行ってしまったかのように、空を見つめるだけだった。誰の声も、もう彼女には届かないのではないか――と思った。

「山田さんを殺したのは貴方ですね？」

篠原の連絡を車で待っていた田村が、いつの間にか隣に立っていた。

「飛行機の乗客名簿に『山田太陽』という名前がありました。貴方ですね」

陽菜が、田村の言葉に僅かに反応した。

「貴方は、叶さんからの電話で店を開けたまま深夜バスでI県に向かったんですね。そして、山田さんを殺害し、中部空港から飛行機に乗って帰ってきた。違いますか？」

陽菜が頭を抱えて、何かを振り払うかのように頭を激しく掻きむしった。

ドアを開けると、彼は強引に部屋に入ってきた私の姿に驚いていた。店はどうしたんだ、と尋ねてきたがそれには答えず、彼女はどこにいるのかと詰め寄った。

『陽菜！なぜお前は俺の言うことを信じてくれないんだ！』

彼は、私の両肩に手を置いて自分の潔白を訴えた。

『だって、あの女が今、貴方と一緒にいるって言ったのよ！』

彼の手を振り払い叫んだ。彼はそれでもまた両肩に手を置き諭すように真剣な目で訴えてきた。

『彼女はただの客だ！俺は彼女のことなんて、なんとも思っていない！』

『だったらどうしてベットが二つあるの？！おかしいじゃない！！』

『これは違うんだ。ホテルが満室で——』

『毎日！毎日！！店に来て貴方のこと————見てるじゃない！！』

頭を抱え、腹のそこから絞り出すような叫び声を出した。

『陽菜・陽菜、俺を信じて。陽菜、俺はお前しか・あ』

優しく抱きしめてきた彼の背中に、隠し持っていた果物ナイフを奥深くまで突き刺した。

『イヤよ、貴方を誰にも渡さない』

信じられない——といった顔で男は床に崩れ落ちた。

恐ろしい記憶を振り払うかのように、頭を激しく振りながら声を絞り出しながら叫んだ。

『何を信じればいいの。私は・・私は！ あの人には私だけの・・・私の大切な、人なの。愛してる、あの人を愛してる、愛してるの！』

泣き叫びながら、両手で砂を掴んだ。だが砂は、指の隙間から逃げるようにさらさらと零れ落ちていった。

『失いたくなかった。だから、主人を・・・殺したの・・・ああ、ああ、私は・・・どうして、こんな——』

陽菜は両手で顔を覆い、低い叫び声を上げながらそのまま泣き崩れた。いたわるように坂崎が、陽菜を引き寄せて抱き締めた。

「陽菜——力になれなくてごめん……ごめんね」

片手に靴を持ち、裸足でやわらかな砂の上を田村と歩いている。細かな砂が、足の裏に纏わりついてくる。砂丘の先には何があるのか、文芸少年気取りで地平線を見つめた。田村のタクシーの中の言葉を思い出す。俺は、田村のように割り切ることはできない。だから割り切れないことを、『割り切れないもの』として『割り切る』ことに決めたのだ。

もしも、シングルが空いていれば、叶があんな嘘をつかなければ、深夜バスが出ていなければ。もしかしたら、もっと違う未来になっていたかもしれない。何が良くて、何が悪かったのか、考え出したらきりが無い。ただ、二人が出会っていなければ良かった——とは絶対に思わない。二人は最後まで愛し合っていたのだから。

「俺——当分、結婚はいいや」

空を仰ぎながら呟いた。

「お前ね、せめて相手ができてから言ってくれ。突っ込みどころ満載すぎて困るだろ」

相変わらず腹の立つ男だな、コイツは。

「悪かったよ。あーお前に言うんじゃないよ」

「帰るぞ」

背中を向けて歩き出す田村に、ふと気になって尋ねてみた。

「田村、砂丘の先には何があると思う？」

田村は振り向くと真面目な顔で「道路だろ」と言った。

その答えに、俺はおかしくなって笑った。不満そうに睨んでいる田村を見て、コイツとコンビを組んでよかったと思った。

episode 12-7 太陽のエレジー（後書き）

何とか終わりました。

もう既に、別のところで載せてはいるのですが読み直してみたくさんの矛盾を発見してしまい慌てました。ちよつと、まだあまり納得のいけない部分もあるような気がしますが（麻痺しててわからないです）今ある力を出し切って書いたので載せます。

ちなみにこのT県の砂丘は、鳥取でもていずおか（静岡）でもありません。私の空想上の砂丘です。しかも砂丘を実際に見たこともありません。サハラ砂漠（いったことないけど）をイメージして書いてみました（笑）日本なのに、すっごい広大な砂丘なの・・・。

読んでくださって、ありがとうございました。

episode 13-1 アツイ男

砂丘も堪能し、土産の酒を持って昼過ぎにI県に降り立つと、むせ返るほどの熱気に迎え入れられた。暑い――。県警にたどり着くまでに、今日一日の気力と体力を使い果たしてしまいそうだ。

「ただいま戻りました」

部屋に入ると、若林や陣内、藤堂があたたかく出迎えてくれた。

「土産は買って来たか？酒以外は受け付けんぞ」

篠原が扇子を仰ぎながら、右手を出して催促している。

「買って来ましたよ」

篠原の机に大吟醸を置くと、ニンマリと表情を弛め「お前はいいヤツだな」と手にとって喜んでいいる。今度から、篠原に何か頼む時は酒を渡そう。

「サイキョウ？」

「いえ、最強と書いてツワモノと読むそうです」

「ほう、本気と書いてマジと読むヤツか」

「――そうです」

よく分からないが、同意しておいた。篠原は満足そうに頷いて、俺に顔を向けた。

「じゃあ早速、報告書出してくれよ」

鬼か、この人は――。酒を渡してもこの人には意味がないな。

「久しぶりだな、田村」

席に着くと、後ろの捜査二課から威勢のいい声が聞こえてきた。振り向くと、短髪が目鼻立ちがハッキリとしたデカイ男が立っている。誰だ？見ない顔だな――。田村の知り合いか？

「誰だ？」

「さあ」

田村は彼を一瞥し、すぐ背中を向けた。その田村の態度に、男は怒りを帯びた目で田村を睨みつけた。

「いや、明らかにお前の名前呼んだだろ」

俺の言葉が無視して、報告書に取り掛かる田村。まあいいか、俺関係ないし。座り直してT県の報告書に取り掛かろうとすると後ろから肩を掴まれた。

「無視するな」

「なんで俺なんだよ、田村に用があるんだろ！」

なんだよ一体。訳がわからずにいる俺に、若林が苦笑しながら彼を紹介してくれた。

「彼ね、猪又タケシって言って、一年前まで強行犯係で田村と組んでたんだ。二か月だけだけどね」

「九月から捜査二課に異動になりました。またよろしくお願いします！」

強行犯係の皆に礼儀正しく挨拶をする。周りの皆も、各々猪又に声をかけている。俺も猪又のほうを向いて、挨拶をした。

「俺、望月といいます。よろしくお願いします」

挨拶は済んだが、田村を睨みつける猪又とまったく猪又を相手にしない田村の間に挟まれて、俺はどうすればいいんだ？ていうか、俺を巻き込むな。

「あの――報告書があるんで」

俺がそう言うと、猪又は田村をもう一度ひと睨みし席に戻っていた。陣内と藤堂は、「若いね」といいながら笑い合っていた。ため息をつき、報告書に取り掛かった。篠原がちよっかいをかけてくるのを無視しながらなんとか完成させることができたのは、二時間後のことだった。

藤堂が、事件解決のお祝いに寿司をとってくれた。なぜ篠原は、こういう気遣いができないのか。買ってきた酒を、いち早く飲んでご機嫌でいる篠原を見ながら、この人が上司なんて世の中何か間違っていないか――と疑問に思った。

「かわいい子いたか？」

若林が寿司を乗せた皿を片手に話しかけてきた。相変わらずの若

林に、叶の話をしてみた。若林の表情が見る見る曇っていく。ですよ、そうなりますよね。

「若さん行ったら大変だったでしょうね」

「女は怖いね」

若林としみじみと語り合っていると、小林と、なぜか一緒に加わっている間宮が酒を飲みながら割り込んで来た。

「うちの娘はいい子だぞ！」

「あーはいはい、そうですね」

小林と間宮が満足して向こうへ行くのを、見送りながら若林と苦笑した。

「ところで、猪又のこと気にならないか？」

いつ切りだそうかと思っていたことを、若林から話を振ってくれた。ありがたい。若林の目を見返して答えた。

「なります」

「田村さあ、ああいうヤツだからこれまでに四人、相棒代わってるんだよね。修平が五人目」

初耳だ。若林の話では、四人は結局、他の部署へ異動していったそう。その一人が、猪又だった。最短が3日、最長が猪又の二ヶ月だったらしい。猪又は我慢したほうなのだ。その記録も、半年目の俺が抜いている。やったー、て喜ぶべきなのか？ 確かに難しいヤツだが、異動したいと思うくらい嫌だと思ったことはない。むしろ最近、ヤツの生態が気になって面白いとさえ思っている。

「猪又もそうだけどさー皆、真面目すぎたんだよね」

若林は、しみじみと言いながらウニを口に放り込んだ。

「ん？それじゃ俺が不真面目みたいじゃないですか、ひでえ若さん」

がつくりと方を落とす俺に、ごめんごめんと若林は笑った。

「違うって、お前も真面目だよ。田村もな。ただ彼等は入りすぎちゃうんだよね、アツイ男だったんだね。だから田村が手を抜いてるみたいに見えるちゃうのよ」

あの実直そうな猪又の顔を思い出す。ああ、そういうことか――。初めての強盗事件を、思い出した。被害者に感情移入しすぎて自滅しそうになってた俺を、冷静にさせてくれたのは田村だった。彼等も同じだったはずだ――ただ受け入れられなかったんだな。どっちが悪い訳でもない。同じくらい犯人を捕まえたいと思っていたのだから。

「難しいですねえ」

「なんだお前、田村の気持ち達が彼らに伝わらなかったのが悲しいのか？ 優しいなあ、修平は」

酔っ払った若林が、もたれ掛かりながら頭をグシャグシャと撫で、ぐいぐい髪の毛を引っ張ってきた。

「違いますよ、もう若さんは。あと髪の毛引っ張らないでください、ハゲたらどうするんですか！」

乱れた髪を直していると、ニヤニヤしながら若林は人差し指を立てて俺の頭を指しながら、アデラース！とウインクした。そして、意地悪そうにニヤリと笑い、両手を俺のほうに向けて近づいてきた。

「冗談じゃないっ」

慌ててその場を離れ、席に戻ると廊下にいる田村が目に入った。よくみると猪又に絡まれてる。気になって近寄って行くと、猪又の苛ついた声が聞こえてきた。

「まだ強行犯係にいたんだな。あんたみたいな警官がいるから、警察が叩かれるんだ」

顔を真っ赤にしている猪又を無視して、田村は酒を淡々と飲んでいる。

「聞いているのか？ なんであんたが刑事部に残って、俺が異動させられるんだよ」

「上の人間に聞けよ」

田村が、面倒くさそうに答えた。・・田村、お前それじゃあ、猪又より自分が有能だといってるみたいじゃないか。案の定、猪又の顔が仁王像の顔のように変化していくのを見て、ヤバイと思い飛び

出した――俺がバカだった。

なんだろうなる――。隣には、酒を飲みながら悪態をついている猪又がいる。ここは、猪又行きつけの居酒屋だ。あの後猪又到に捕まり、ここまで連れて来られたのだ。

田村―、覚えてろよ―っ！二度と助けてなんかやらね―からな！

episode 13-2 蹴り飛ばす

店は、仕事帰りの会社員で埋まっていた。皆、楽しそうに料理をつまみながら酒を飲んでいる。頑固そうな店主が一人で切り盛りしている店で、旬の食材や地元で作られた野菜を使って作られた料理が人気なのだそうだ。出てくる料理はボリュームがあり、里芋の煮物やぶつ切りにされたカレイの煮つけなどが目の前のテーブルに並んだ。美味そうだと一口食べてみると、素朴で家庭的な味だった。あの頑固そうな店主が、これを作ったことに驚くとともに、俺の母親の料理より美味しいことに小さな衝撃を受けた。ここも彼らの憩いの場なのだろう。

「大丈夫か？」

料理にも手をつけず酒を煽^{あお}っている猪又に声を掛けると、真っ赤に充血した目で、うるさいとでも言うかのように睨んできた。一人になりたいのなら、何故俺をここに連れてきた。付き合いきれなくなって、手元の酒を飲み干した。

「あんた——望月さんはなんとも思わないのか？」

「何が？ ああ、田村の事？ 憎たらしいヤツだとは思うよ」

あの野郎、俺が出て行ってコイツを宥^{なだ}めている間に逃げやがって。覚えてろよ。

「あんないい加減なヤツを、なんで刑事部に置いておくのか俺はわからん！」

「別にいい加減でもないだろ。アイツはアイツなりに考えて動いてるだけだよ」

「何でだよ！」

猪又がテーブルに拳を叩きつけたので、周りの客が驚いてこちらを見てきた。また怒りが込み上げてきたのか握った拳が震えている。頼むから俺を殴るなよ。

「静かに飲めよ。周りの客に迷惑だろ。アイツは、職務に忠実なだ

けなんだよ」

今にも暴れ出しそうな勢いの猪又を、周りの客は心配そうに見ている。前にもあったぞ、こんな状況。なんで俺が田村を擁護しなくちゃいけないんだ。

「まるで自分は何も悪くないかのような顔で、遺族に無神経な質問をするアイツが残って何で俺が異動させられなきゃいけないかったんだ」

悔しそうにテーブルを何度も叩きまくる猪又に、店主が外に向かって指を差した。出て行けということらしい。この状態じゃ無理もないよな。ため息をつき周りの客が心配そうに見守る中、猪又の腕を掴んで外に引きずり出した。

「すみません、お勘定コイツにつけといて下さい」

店の外に出るや否や、俺の手を跳ね除け一人でフラフラ歩き出す猪又に無性に腹がたってきた。もうコイツと酒を飲むのはごめんだ。

「俺は、犯罪を無くしたくて警察官になったんだ。これ以上傷つく人が出るのは嫌なんだ。なのに、俺は止められなかった。俺たちのせいで、何人も亡くなったんだ。なのに、アイツは——」

「田村は、何ていうか線引きをして仕事をしてるんだよ。俺たち警察だって、ただの公職だ。民間の企業と同じで、仕事を細分化するためにいくつかの部署に分けられている。その中の刑事部の強行犯捜査係の仕事は、犯人を逮捕して事件を早期解決することなんだよ。でも、被害者や遺族を軽視している訳じゃない。彼らの苦しみを少しでも早く取り除くためにアイツだって真剣なんだ。猪又、お前は背負いすぎなんだよ、少し——」

言い終わらないうちに「お前も田村と同類かよ」と猪又に捨て台詞を言われて、ブチッと頭の中の何かが切れる音がした（実際はそんな音はしてないし切れてないが——してたら大変）と同時に猪又の背中を思い切り足で蹴り飛ばしていた。前のめりに倒れこんだ猪又は、驚いた顔をして俺を見上げる。

「思いつがるなよ、ボケが！何でも抱え込んで背負っちゃったら、

やらなきゃいけないことすらできなくなるだろーが。どあほうが！感情に流されれば迅速な判断もできないだろ。頭を冷やして冷静になれ！」

俺の豹変に、猪又は口をパクパクさせながら座り込んでいた。俺はそのまま呆然としてゐる猪又を残して歩き出した。

蹴ったのは、田村が馬鹿にされたからじゃない。それは断じてない。ただ、悔しかった。同じ日本人なのに、同じ刑事なのにまったく伝わらなかったことが。こんなに、悔しいものだとは思わなかった。話せば分かり合えるなんて――嘘っぱちだとしか今の俺には思えなかった。よく、田村は二ヶ月ももったな――。夜空を見上げて、深く息をついた。

飲み直すために『オンブラージュ』に行くことにした。俺にはあそこの方が落ち着く。ドアを開けるといつものカウンターの席に田村がいた。

「お疲れ」

「ほんと疲れた、お前の相手してるほうがずっと楽だ」

前に置かれたジントニックを一口飲むと、火照った体からじんわりと熱が引いていく。

「やっぱりここが一番いいや」

マスターに笑いかけると、ありがとうございますと会釈で返された。

「仲良くなれたか？」

意地悪そうに聞いて来る田村にニヤリと笑いながら答えた。

「さあな」

episode 13-3 二人もいない

朝出勤すると、刑事部の廊下で猪又が仁王立ちで立っている。若林の「アツイ男」という言葉が頭に浮かぶ。やめてくれ、朝から猪又の相手をしている暇なんてないんだから。目を合わせないようにして部屋に入ろうとしたが猪又に呼び止められた。やっぱり無理だったか。なんで田村じゃなくて俺なんだよ。

「望月、昨日はすまなかった」

恐縮しながら、猪又が頭を下げてきたので、驚いて何も言えないでいると猪又が力のこもった眼差しを俺に向けた。

「確かに俺、感情的になってた。あの後、冷静に考えてみたんだ。お前、捜査二課に来ないか？ 末広警部もお前の事気に入ってるし、俺と組もう」

「は？」

なんかこの展開前にあったぞ。コイツ——まさか、間宮属性か？！ まずい、今すぐ丁重に断らなければ。

「断る」

後ろから声がしたかと思うと、腕を引っ張られて部屋に連れ込まれた。

——田村？ お前、なんでこんなタイミングで出て来るかな。廊下を見ると、猪又がこっちを見て睨んでいる。

「お前が出て来ると、ややこしくなるんだよ。ほらこっち睨んでるじゃねーか」

田村は平然とした顔で席に着き、報告書に取り掛かり出した。なんだよ、面倒だけ押し付けやがって。廊下でまだ恨めしそうにしている猪又のところに戻ろうとしたが、若林たちが部屋に続々と入ってきたので行けなくなってしまった。なんか俺ここに来てから、気苦労が絶えない気がする。ゲンナリしながら報告書に取り掛かる。仕事は山積みなんだ——猪又とのことも、もうどうでもよくなって

きた。

取り掛かった報告書が、出来上がったところで若林が声をかけてきた。

「修平、今日飲みに行かないか？いい店見つけたんだよねー」

「行きます。ところで、総務部の女の子たちとはどうなったんですか？」

ふと気になって聞いてみると若林がニンマリ笑って残念だったねーと意味深な事を言った。

あー俺って運がないな――。

「あの、俺もいいですか？」

ぎよっとして後ろを振り返ると、いつの間にか後ろに猪又が立っている。

「いいよ、猪又も来いよ。多い方が楽しいしさ」

若さーん！俺の気持ち察して――。結局三人で飲みに行くことが決まった。こんなに憂鬱な飲み会は初めてだ。

コーヒーを飲もうと席を立とうとした時、篠原の机の電話が鳴った。篠原の電話が鳴ると緊張する。事件の発生を報せる電話だからだ。こればかりは慣れない。俺たちは、じっと静かに篠原の電話が終わるのを待った。篠原が何度か相槌を打って受話器を置いた。

「中央署で捜査本部設置だ。俺は、藤さんたちと少し遅れて行くから、先に行ってくれ」

「例の通り魔事件、やっぱり・・・な」

廊下を歩きながら、若林が苦々しそうに言った。二ヶ月前から起こっている通り魔殺傷事件の事だ。

「確か一人亡くなってますよね――」

俺が言うと若林が頷く。

一貫して、深夜帰宅途中の女性を背後から襲うというこの事件。最初に犯行が行われたのは、二か月前の六月下旬、被害者は背中を刺されて重傷を負った。二件目は七月中旬、被害者は、背中を数カ

所刺され重症。三件目は、八月上旬に背中を刺されて重傷、そして四件目とうとう死者がでた。八月二十六日、俺たちがT県に発ったその夜、帰宅途中の女性が背中を数ヵ所刺されて失血性ショックにより死亡。いずれも中央署管内で事件は起こっている。被害者も後ろから襲われているというのもあり、犯人の特長を覚えてはいなかった。

「卑劣ですね」

嫌な事件だ。女性を、しかも後ろから襲うなんて――。アレ・・・でも。

「犯人が女っていうのはないのかな？」

頭に閃いた事を口に出してみた。背後からなら、女でも犯行は可能ではないか？

「忘れたのか、犯人が3件目の事件で被害者の流した血を踏んで逃げた事を」

田村に突っ込まれて思い出した。情けない。そう、犯人は靴跡を残して逃げたのだ。右足27cmのスニーカーの。

「27cmの足の女か――彼氏の靴を履いていたとか？」

隣を歩く里見に笑われてしまった。ショックだ。

「ごめんなさい、若林さんと同じ事いうから・・・つい」

若林をみるとニンマリ笑って、「俺たち同類だな」と言った。同類のはずなのに何故若林だけモテるのか――。納得がいかないまま地下駐車場に着き、いつものように田村の車に乗り込んだ。二台の車のエンジン音が地下駐車場内に響き渡った。向こうは若林の車で行くようだ。

「こんな事件、早く終わらせようぜ」

「そうだな」

地上に向けてアクセルを踏み込んだ。

地上はダンテの『神曲』に描かれている煉獄地獄の様相を呈していた。太陽の強烈なまでの日差しに、行き交う人の目は虚ろで生気がない。恐ろしい光景ではないか。でもこの地獄の業火の中でさえ

犯罪は起きるのか。それとも地獄の業火の中だからこそ犯罪は起きるのか。この暑さで人を殺したくなって、無差別に殺しているとか？わざわざ深夜を選んで？随分と冷静じゃねーか。

「なあ、被害者はお互い面識ないんだよな」

「だから通り魔なんだろ」

ハンドルを握りながら、素っ気なく田村は言い放った。

「お前な——だからさ、よく推理小説で、ある一人を狙う為に通り魔に見せかけて殺人を犯すってのがあるだろ。なんか今それが頭に浮かんだんだ」

「どうだろな」

随分今日は素っ気ないな。事件に集中してるのか。

中央警察署に着くと、すぐに捜査会議が始められた。今まで出ていた情報以外で目新しい情報が出ることもなく、俺たち二人は第一被害者のもとに聞き込みに行くことになった。

「またあとでな」

若林たちは、まだ入院している第三被害者のもとへ行くことになっている。第二被害者は、同じ病院の集中治療室に入っていて、未だに意識は戻っていない。

第一被害者は、アパレル会社に勤務している佐々木頼子、二十四歳。彼女も数日前に退院したばかりだった。今は実家に帰っている。そうなので、実家のある南東区に向かう。

「私はI県警の望月、隣が田村といいます。何度も申し訳ありませんが、事件当夜のこともう一度詳しく話していただけないか？」
モダン調の広いリビングに通された俺たちは、オフホワイトのソファに腰掛け、向いに座っている頼子が話し出すのを待った。彼女は当時のことを思い出すのを一瞬躊躇したが、ゆっくりと深呼吸をして話し出した。

「あの夜も、音楽を聞きながら一人で歩いていました。後ろから誰かついて来てるなんて、思ってもみませんでした。何かが背中によ

つかったと思ったら背中が冷たく感じたんです。痛みは最初、ありませんでした。背中を触ったら手に血がベトリついてるのを見て初めて刺されたことに気付きました。それからどんどん痛みが出てきて……。しゃがみ込んで、叫び声を上げました。近所の人が出て来てくれなかったらと思うと――ゾッとします」

話をする間、彼女の膝の上で握り締められた手が震えていた。いくつか質問をしても、入院中に証言してもらった内容と同じで、新たに思い出した記憶などはなかった。犯人は刺したと同時に逃げていて姿も見えておらず、犯人について思い当たることもないと言うことだ。彼女の体調のこともあり、佐々木邸をあとにすることにした。「ありがとうございます。また何か思い出したことがあったら連絡下さい」

頼子に送られて玄関先まで行くと、後ろから力のこもった声で頼子が声を掛けてきた。

「絶対、犯人捕まえてくださいね。もう誰にもこんな怖い思いして欲しくないから」

力強く頷くと、頼子は笑った。今日始めて見た、彼女の笑顔だった。

車に乗り込み、事件現場の聞き込みに向かう。

現場は、中央区の大通りから一本奥に入った路地で、雑居ビルと民家が隣接している。日中は、雑居ビル内のテナントで働いている会社員などが多く出入りしている。

「目撃者もいないんだよな——運のいいヤツだな」

四件とも目撃者がいないのだ。いくら深夜とはいえ中央区の中心街で事件が起こっているのだ——運がいいとしかいいようがない。

「神様が味方してるのかもな」

運転しながら、田村が吐き捨てた。やっぱりおかしい——いつもの冷静な田村ではない。

「——お前どうかしたのか？」

「別に」

強い拒絶を含んだ口調だった。

「話したくないなら聞かねーけどさ——あんまり無茶するなよ」

何か通り魔事件に思い入れがあるのか？田村は相変わらずの無表情でハンドルを握っている。俺には、その表情から田村の考えを読むことはできない。

車を止め現場周辺の聞き込みを試みたが、収穫は得られなかった。そんなすぐ何か見つかるようなら、とつくに所轄が見つけているはずだ。黄昏があたりを包みはじめていた。いくつかの民家の電灯が、いつの間にか灯っている。背広を脱ぎ、ハンカチで汗をぬぐいながら現場をくまなく歩いてみる。辺りも暗くなり、事件発生から二ヶ月も経っているのに、さすがに何も見つけることはできなかった。車に戻り、大きく息をついた。

中央警察署に戻り、捜査員が集まったところで捜査会議が開かれた。意識を取り戻した第三被害者の証言で、犯人が少しの間その場に留まっていたことがわかった。

「低く押し殺したような笑い声が聞こえたそうです」

若林が報告するのを聞きながら、他の捜査員たちは苦虫を噛み潰した顔をした。怖かった、と被害者は話しながら泣いていたそうだ。「もう二度と次の犠牲者を出さないように犯人逮捕に尽力してくれ！以上」

篠原がそう言うのと、捜査員たちの顔が一気に引き締まった。会議終了後、捜査員たちが次々部屋から出ていき、最後に俺たち二人が残った。何も収穫がないまま一日が終わった。今までだってそんな日はあった。無駄だとも思っていない。可能性を一つ一つ当たっていった、最後に行き着いた所に真実があるのだから。でも今日の田村は、明らかに苛立っていた。

県警に戻ると、田村がこんな状態なのに――後ろで猪又の気配がする。ヤツは、背後霊か。

コーヒーを飲んで一息ついている若林のところに行き、猪又を連れだすように頼むと若林はニツコリとほほ笑い親指を立てた。

「OK！今度何か奢れよ」

あんたは篠原か。

「わかりました。食堂のカレー奢ります」

「安っ！あれ一杯四五〇円だよ?!」

愚痴をこぼす若林を急ぎ立て、なんとか二人を部屋から出すことに成功した。猪又は、何か言いたそうに俺を見ていたが、今はお前を相手している暇はない。事件資料と向き合う田村を横目で見つつ、席につき手元の資料を広げた。どれくらいの間、資料と向き合っていたのだろう。気付けば部屋には俺たちしか残っていなかった。

「付き合う必要ないぞ」

田村が事件資料を読みながら、いつもにまして素っ気なく言ってきた。

「別に付き合ってるわけじゃねーよ。早くケリつけたって言うただろ」

様子がおかしいヤツ残して帰るわけにもいかないだろーが。それ

に、事件も気になってはいるのだ。イスに深くもたれ、資料を一瞥する。犯人に繋がるものがない。他に何か突破口見つけなきゃ、やっぱダメか――。

襲われた日も曜日もみんなバラバラだし、被害者も性別以外、職業も年齢も見た目も共通するところはない。やっぱり無差別に選んでいるだけなのか――？

窓の外を見ると、周りのビルの窓からちらほらと明かりが見える。もう十一時だ――俺たちの他にも頑張っている人たちがいるんだな。犯人は今何をし、何を考えているのだろうか――。コーヒーを淹れに席を立ちながら、犯人の事を考えてみる。犯行はすべて平日深夜。仕事が終わって、そのまま犯行に及んでいるのか？スニーカーってことは、会社勤めではない？それとも一旦家に帰っているのか？土日に犯行に及ばないのは何故だ？もしかして犯行に及んでいるのは犯人の休みの日か？いや、そうとは限らないか――うわぁループだ。頭を振り、深呼吸をする。

何故犯罪を犯す？

田村の机にコーヒーを置き、窓際に立つと、さっきよりも明かりが減っている。急にぞわりと体の中に嫌な感覚が沸き上がってきた。じわりじわりと体中に広がっていく。まただ、この嫌な感じ。色々な感情が、縋^ない交^まぜになったもの。

子供の頃、居残り授業や授業後の委員会が嫌いだった。周りの友達が帰っていく中、自分だけが取り残されていくようで無性に寂しく思ったのを覚えている。未だに、最終電車に乗るのが苦手なのだから、まだ直っていないのだろう。部屋に独りでいるときは、何とも思わないのに、深夜の最終電車が苦手だなんて自分でもおかしいものだと思う。両親が共働きだったので、独りには慣れているはずなのに。それとも、本当は寂しかったのか――俺は。ああ、もしかしたら犯人もそうなのか。寂しいのか――？

窓の外の明かりが、またひとつ消えた。ああ、どんどんとに残されていく……。寂しい。独りは、寂しい。独りは怖い。

でも、寂しさから人を殺そうと思うか。むしろ、誰かに一緒にいてほしいと願わないか。

何故殺す？

いつも凶器を持ち歩いて衝動に駆られて刺しているのだろうか？
殺すと決めてから獲物を探して刺しているのか？

「どっちが先でもまたループか」

——いやまてよ。

「衝動的だろうと計画的だろうと、その時何らかの要因があるはずだよな」

「どんな要因だ？」

声に反応して振り向くと田村がこちらを向いていた。

「犯人にとって人を殺したくなる程の何か」

「もっと詳しく言えよ」

「詳しく？ 犯罪論でも言えと？」

「お前にそんなのあったんだ」

大げさに仰け反りながら田村が言った。失礼な男だ。

「小学生並のならな」

「言ってみろよ」

頬杖をつきながら、田村が片手をひらひらさせた。

「それが人にものを頼む態度か」

「うるさい演者だな」

田村は、俺のほうに体を向け姿勢を伸ばして座ると拍手をした。

余計むかつく。しかも・・話にくいじゃないか。

「——あくまでも俺の意見だぞ。犯罪は、怒りや不満などの抑圧された感情が爆発して、一瞬理性が吹っ飛んだその時に起きるものだ

と思う。それも、時間はそこには関係しないんだと思う。何年も計画を立てて犯罪を実行する人間もいるし、衝動で犯罪を犯す人間もいる。それも、要因と言えるストレスの度合いによるものなんだと思う。だから、衝動的な犯行だろうが計画的な犯行だろうが、犯罪を犯すに至る要因は必ずある。被害者によって刺された回数が違うのも、要因の度合いによるものではないのかな」

「ふうん、でも愉快犯なんてのもいるぞ」

「それも同じだ。ストレスを溜めた人間が、何かのきっかけ、例えば殺人事件のニュースを見てストレスを解消することができた。スッキリした気持ちから犯罪に興味があると錯覚する。そして、犯罪を犯す」

「なるほどね、で、その要因がなんだ？」

「だからさ、日もあいているし無差別という点から、犯行当日に何か要因があったんじゃないのかな？競馬とか競艇とかで負けた、とかさ」

我ながらいい点ついていると思ったが、あっけなく田村に却下されてしまった。

「当日とは限らないだろう、毎日の積み重なったストレスが偶然その日に爆発して、犯行を犯したのかもしれない。時間は関係しないんだろ」

確かに――でも諦めないぞ。

「でも一応、事件当日に共通するものがないかを調べてみる価値はあるはずだ。毎日のストレスの限界がきていて、計画的に日付を決めていたのかもしれないだろう。他は――事件で共通することっていったら『深夜』『女性』『背後からの犯行』。そこにこだわる犯人の理由はなんだ？」

「何も考えていないか、完全主義者か、それか犯罪哲学でもあるんじゃないか？」

『深夜』『背後』を選んだのは、犯行や顔を見られないため。確実に犯行を実行するため。『女性』を襲うのは、非力な相手を狙っ

て犯行の成功率を上げるため。でも、犯人は足跡を残している。ずいぶんお粗末じゃないか？

「哲学ね――」

話しながら、急に頭にあることが浮かんた。

「もしかしたら、四件の犯行の前に、犯人が衝動的な犯罪を犯しているかもしれない――少しこのまま話させろ。衝動的に犯罪を犯して、捕まったのかどうかはわからない。もしかしたら未解決事件かもしれない。だが犯人は、その犯行でストレスを発散することが出来たとしたら？ 一件目から四件目まで一貫して、深夜に女性を襲っている。前の犯罪でも深夜に女性を襲ったんじゃないのか？」

「随分強引だな。さっき言ったように、ニュースで見た犯罪を真似ているだけかもしれないぞ。それに、完全主義者かもしれないし、何も考えていないかもしれない」

田村は、コーヒーを飲みながら、冷静に俺の推理を論破した。

「血を踏んで足跡を残すような抜けたヤツが、完全主義者なわけではない。それに、これだけ騒がれている事件で四件とも目撃者が現れないんだ。綿密に犯行を実行しているに違いない。だから、何も考えていないヤツには無理だ。俺は、この犯人は愉快犯ではないと思っている。世間が騒ぐ様子を楽しんでいる感じも受けないし、犯行がエスカレートしていくわけでもない。ただ、同じ事を繰り返すだけだ」

「根拠が弱いな」

「うう、やっぱりループか、ていうかお前は何かないのかよ。俺の考えを、ことごとく却下しやがって」

少し考えこんでから、田村は意外な事を言い出した。

「実はお前と同じなんだ」

「何が？」

「色々考えたんだが、お前と同じように犯人はもうひとつ犯罪を犯してるんじゃないかと思ってな」

はあ？ だったらなぜ同意しないんだよ。恨めしそうに睨んでいる

と、ニヤリと笑いながら言っただけだ。

「なんとなく同じ考えなのが嫌で、力はいっちゃった」

「お前なっ！」

ムカつく。この男ほんとムカつく。今なら、猪又と同盟組めそうだ。

「他に手掛かりはないんだ。思い当たることを一つ一つ潰していくしかねーだろ。ほらやるぞ」

田村は、いつもの田村に戻ったらしい。でもムカつくヤツには、変わりない。ふと外を見ると、ビルの明かりがなくなっていた。でもさっきのように寂しくないのは、独りじゃないからか。

「深夜、女性が襲われる事件——なんて結構な数あるんじゃないか？　いつまで遡^{さかの}ぼって調べるんだ？」

深夜二時過ぎに何故俺は、田村と一緒に仕事をしているのか——。それもこれも犯人と猪又のせいだ。

「細かな条件つけて、ヒットさせていくしかないだろ。そんな大変な作業じゃないさ。地道にやろうぜ、朝まで時間はタップリある」

一気にヤル気を奪うようなことを言うな——。コイツも鬼だ。ため息をつき、気になって全国の殺傷事件を検索してみた。過去五年で、十八万件ヒットした。

「ふざけんなーっ！　十八万件ってなんだよ。日本の未来は真っ暗だーっ」

「落ち着け、前の犯罪がI県とは限らないんだ。全国すべて当たっていくしかないだろ。手を動かせ手を」

「くそ、やってやるよ」

田村といくつかの条件付をしながら絞り込んでいく。『深夜』『20代から30代の女性』『殺傷事件』『背後からの犯行』それでも解決した事件、未解決事件合わせると三万件ヒットした。殺す気かっ。

「俺は解決事件を調べる。お前は未解決事件を頼むぞ」

田村はそう言うと、すぐに解決事件の振り分けにかかった。相変

わらずの集中力だな。やっぱりまだいつもの田村じゃないのか？大丈夫か——このまま止めなくても。

「急げよ、もう三時だぞ」

どうせ止めたって聞きゃしないんだ、このまま行くしかないだろう。パソコン画面に向き直り、事件の振り分けを始める。付き合っ
てやるよ。

episode 13-5 点心のラーメン

「お前ら——何してるの!？」

黙々とパソコンに向かってる俺たちを見て、いつもより早めに出勤した若林が呆然としながら尋ねてきた。

「ああ若さんおはよー……ございまふぁー。あ、すみません」
話している途中で、欠伸がでてしまった。

「修平……目が真っ赤だ。何してるんだ？」

昨夜の田村との話をする、若林も興味をもったらしく一緒に作業を手伝ってくれることになった。

「お前ら顔洗って来い。ヒドい顔だぞ」

廊下にでると、朝日が眩しすぎて一瞬目の前が真っ白になった。

「うあ、目がチカチカする」

フラフラと、二人で壁にもたれ掛かりながら洗面室まで歩く。こんな朝を迎えるのは久しぶりだ——。大学時代、レポートを毎回ギリギリになって慌てて仕上げていたあの日々を思い出した。出来ればもう迎えたくはない。

顔を洗って部屋に戻ると、若林が出勤した篠原に昨夜の俺たちの話をしているところだった。篠原も興味を持ったようで、俺のパソコン画面のファイルを一瞥して言った。

「若から聞いた。中央署の捜査員には俺から言っておく、お前ら四人は引き続き過去の事件を洗い出してくれ。何かあったら俺の携帯を鳴らせ」

このまま続行か。でもこれで、何か犯人に繋がるものが見つかるかもしれない。俺たちは、またファイルの振り分けを始めた。

「何やってるんだ？」

休憩がてらコーヒーを飲んでいると、猪又が強行犯捜査係の方を見ながら話かけてきた。全員が、朝から一心不乱にパソコンに向かっていれば気にもなるわな。

「んあ、ああ・・・アレね」

昨夜の俺たちの話をする、猪又は驚いた顔で田村の方をみた。

「何の手掛かりもない今の状況じゃ、小さな可能性でも地道に調べられないしな」

「どれくらいあるんだ？」

ネクタイを緩めながらストレッチをしていると、猪又が心配そうな顔で聞いてきた。

「ん？三万件、ハハ、やんなるだろ」

「・・・頑張れよ」

「サンキュ」

席に着き、パソコン画面の中のファイルを一つ一つ見ていく。それにしても――全国津津浦浦よくまあこんなに犯罪がおこるもんだね――。しかも未解決ときた。のうのうと暮らしている犯人に無性に腹が立ってきた。

「これはキツいなー、お前ら一晩中ずっとこんなんやってたのか？」

若林が、目頭を押さえながら呻いた。

「そうですよ、だから昼飯奢って下さい」

パソコン画面の横から顔を覗かせ、若林に笑いかけた。

「たくましくなったね、修平君」

「若さんの指導のお陰です」

「点心のラーメンの出前とってやるよ」

「――安過ぎますよ」

点心のラーメンは一杯三〇〇円という格安のラーメンだ。県警内では、安い早いということで人気がある。ちなみに味は普通。

「昼まで頑張ろうな」

「了解」

今回の事件と類似する、事件ファイルの振り分け作業を淡々と続けていく。気が遠くなるような地道な作業だが、それでも四人でやるようになってからは大分楽になった。田村は相変わらず、食いいるように画面を見据えたまま動かない。

始めは、何か通り魔事件に強い思い入れがあるのかと思った。でも考えてみれば、事件は二か月前から起きている。田村は、その間この事件に関心を寄せるようなこともなかった。じゃあこの田村らしからぬ行動は——一体何だ？この事件とは本当に関係ないのか——。まさか亡くなった被害者が知り合いとか？妹？親戚？片思いの相手とか？片思い？片思い？！

「修平——どうした！？大丈夫か！？」

若林が、不安そうに俺を見ている。何でだ？

「ニヤニヤしながら画面見てたぞ。おかしくなったか？」

いけない、つい面白くなって顔がニヤついたらしい。アイツが女に片思い——とか想像できねえ。

「すみません、考え事してました」

「余計怖いぞ」

「若さん、ひでえ」

「何を考えてたんだ？」

隣の田村が、気になったのか聞いてきた。いや、悪い。事件のことじゃないんだ。何考えてたかなんて言えねえよ。

「いや、その、うん。大丈夫」

自分でも意味の分からない事を言ってしまった。俺が大丈夫か——。

「みたいだな」

呆れた顔をして、また画面に向き直る田村。

「修ちゃんえっちい」

若林が囁はやしたてると、隣の里見が顔を真っ赤うつむにして俯うつむいてしまった。

「ち・・違いますよ！変な事言わないで下さい、若さん」

慌わてて訂正するが、里見はなかなか顔を上げない。最悪だ。

「じゃあ修平君は、何考えてたんですかー？」

若林は、ファイルを見ながらからかってきた。

「そんなこと聞く若さんはキライです」

「アハハ悪い悪い、でもほんとおかしくなったかと思ったよ」

「そんなひどい顔してましたか——以後気をつけます」

時計を見るともう一時を過ぎていた。他の捜査員たちは、外を駆けずり回って犯人の手掛かりを探しているのだろう。何か少しでも犯人の手がかりになるものが見つかればいいが——。

その後も、なかなかファイルと向き合うが、酷似した事件がなかなか出てこない。俺たちの考えは間違っていたのだろうか？ ネクタイを緩めながら、ファイルを見ていると目に入ったファイルにネクタイを緩める手が止まった。おい・・・コレ。食い入るようにファイルを見つめると、だんだんと動悸が激しくなってくるのがわかる。

「田村、ちょっと」

田村が俺のパソコン画面を覗き込むと、表情が陰しくなっていた。やっぱり——この事件だ。田村の反応を見て、若林と里見も俺のパソコン画面に集まってきた。

「この事件か？」

若林が、食い入るように事件ファイルに目を通す。

『事件は今から一年前のS県K市で発生。被害者は、二十五歳。市内の会社で事務員をしていた女性で、深夜帰宅途中、背中を包丁で刺され失血性ショックで救急車が来る前に死亡』

「確かに、うちの事件と似てるな——。所轄のK警察署に連絡して資料を送ってもらおう」

若林が電話をしている間に、事件について話し合う。

「発見者の男性が救急車を呼んだってあるけど、被害者から何か聞いてないのかな？」

「まだ息があったってことは、犯行からそんなに時経ってないよな。でもこのファイルには、目撃情報なしってあるな——」

ファイルには事件の概要しか載っていないので、詳しい資料は所轄から送ってもらわなければならない。

「早く資料が見たいな——」

そう言って若林の方を見たとき、俺の腹が豪快な音をたてた。し

ん、と張り詰めた空気の中誤魔化せないくらい大きな音だ。

「そういや、お前ら朝飯も食ってないだろ？ 出前とってやるよ」

あまりの恥ずかしさに、机に突っ伏して落ち込んでいる俺の背中を叩きながら、電話を終わらせた若林が震える声で慰めてくれた。

なぜ田村の腹は鳴らないのに俺の腹は鳴る。我慢するということができないのか、俺。しかも主張しすぎだっつーの、もうこんな俺辞めたい。

episode 13-6 電話待ち

「お手柄だったな」

廊下で猪又に声をかけられた。

「これからだよ、やっと事件が前進するんだ。お前の方は？」

朝話した後、すぐ猪又も捜査で外出したのは覚えている。

「ある詐欺グループを担当してるけど、もう少しかかりそうだよ」
俺たちの前を、点心の店員が岡持おかもちを持って刑事部の部屋に入っていった。

「頑張れよ。おっ、ラーメンが来た、じゃあな」

「ああ、じゃあな」

猪又が笑った。はじめてみる猪又の笑顔に一瞬驚いたが、空腹のせいで頭がうまく回らない。そのまま部屋に入ると田村たちが待っていてくれた。

「詳しい資料は、メールで送ってきてもらうようになったから早く食べよう。中央署にもさっき連絡したら、四時から捜査会議開くそうだ」

若林の報告が終わると、みんな一斉にラーメンを頬張りだした。美味い。点心のラーメンってこんなに美味しかったつけ。

「廊下で猪又と一緒にいたんだけど、何話してたんだ？」

ラーメンを食べながら若林が聞いてきた。

「事件の手掛かりを掴めたことを少し——あとアイツ笑ったの初めて見ましたよ。やっぱり同じ刑事部でも、扱う事件が違う課だから緊張してたのかな」

「そうかもな、そういや昨日の夜も大変だったよ。修平かなり気に入られてるな」

「彼は間宮さんと同じ属性の人間ですから」

ラーメンを食べ終わり、満足しながらそう言っていると若林が笑い出した。隣で里見も笑っているところを見ると、みんなも同じように思

ってたのかもしれない。田村もか？と思って見ると無表情だった。なんだ、そんな事もないのか？ああ、興味がないのか。

「若ーっ！」

小林がパソコン画面を見ながら若林を呼んだ。K警察署から資料がきたらしい。慌てて若林がパソコンに駆け寄り、資料を人数分プリントアウトする。

資料によると、発見者の男性は現場は深夜だったため見通しが悪く、犯人を見ていなかった。被害者も意識が朦朧としていて、話すこともできなかったようだ。凶器は、血のついた包丁が近くに落ちていた。

K警察署が、近辺に聞き込みにまわると十二時頃、男女の争う声が聞こえたらしい。被害者には恋人がいたが、日頃からよく喧嘩をしていた。アリバイのない恋人を、任意で数回事情聴取したが物証が出なかったため、結局令状が取れなかったようだ。現在、K警察署では通り魔の犯行として捜査をしている。

「発見者の野中武彦は疑われなかったんだな。簡単な資料しかないや」

野中武彦、三十七歳、妻帯者。市立K中学校の数学教師。当日は野球部の練習試合の後、雑務を片付けて退社。その帰宅途中に被害者を発見。倒れている被害者を見つけ、慌てて抱き起こし呼び掛けたが出血で意識が朦朧としていたため、すぐに119番通報をしたらしい。その野中の声に、近所の人が何人か家から出てきている。

「被害者とは面識もないし、野中には、犯罪歴もない。日ごろの評判もよかったみたいだしな」

資料を見ながら若林はそう言うが、何か引っ掛かる。

「恋人以外に容疑者候補は出なかったんですよね。だったら普通はもう少し、第一発見者を調べるものだと思うんだけど」

「そうだな、担当刑事に聞いてみるか」

若林が電話をかけると、ちょうど担当刑事が応対したらしくすぐ理由がわかった。なんでも、野中は被害者の傷口をタオルで押さえ

ながら、救急車が来るまでずっと被害者に呼び掛けていたらしい。その誠意ある対応に、近所の人たちも口々に彼を擁護したようだ。それに、もし犯人なら現場に留まって救急車を呼ぶのもおかしい。そういう事からも彼は、容疑者候補には入らなかったらしい。

「へえ、すごいな」

そんな人が教師なら、安心して子供を預けられそうだな。

「被害者の恋人は？」

田村が無愛想に若林に聞いた。――まただ。さっきまでは普通だったのに――。

「今、K警察署が調べてくれてる。田村、どうかしたのか？」

「別に」

昨日と同じだ。この変わりようの早さは何なんだ、一体！？

「野中さんもまだ中学校で教鞭とってるのかしら」

「じゃないか？でも今の教師は大変そうだな――。風当たりキツいし、仕事量も半端じゃないし。しかも野球部の顧問だろ？帰宅が深夜になるのもわかるよな――」

若林の言葉を聞いて、さっきから引っ掛かかっていた事がまた頭をよぎる。田村を見ると田村も同じように何かを考えてるようだ。

「若さん、野中さんの所在も調べてもらって下さい」

若林は俺の顔を一瞥し、何も聞かずにK警察署に電話をかけてくれた。里見は首をかしげながら、何故彼のことを気になるのかを聞いてきた。

「いえ、確証はないんです。ただ、その時その場所に彼と被害者がいたのは事実ですから。それに、刺されて間もないはずなのに、犯人を見ていないのも――気になります」

彼が怪しい。俺の中で、その思いがどんどん強くなっている。でも凶器は？教師が何故包丁を持ち歩いていたんだ？見ず知らずの被害者と何があった？――やっぱり第三者の真犯人がいるのか？

「えらく悩んでるな」

若林が、向かいの席からこっちを見ていた。

「若さん・・・なんかすつきりしないんです」

「そんなに野中が気になるか」

「――なります。でも頭の中はグチャグチャで・・・」

「お前だけじゃないさ。早くK警察署から連絡ほしいな」

若林の言葉に、電話を見つめた。この電話で犯人がわかるかもしれない。そう考えたら落ち着いて座っていられなくなってきた。俺って――情けないな。ため息をつきながらコーヒ―を淹れに席を立った。四人分のコーヒ―を淹れていると、猪又が声を掛けてきた。

「猪又も飲むか？」

「ありがと、なんかソワソワしてるな」

「そうなんだよ、電話一本でもうドッキドキだ。なんつか、合格通知を待つ受験生の心境みたいな感じだ」

猪又と二人で笑っていると、若林も落ち着かないのかこっちにきて話に加わってきた。

「俺は好きな女の子からの電話を待ってる気分だね」

若林らしい例えだ。

少し落ち着きを取り戻し、コーヒ―を里見と田村に配っていると待っていた電話が鳴った。俺はコーヒ―を田村の頭に零しそうになりながら、素早く受話器をとって電話にでた若林を見つめた。みんなが若林を見つめる中、本人は電話の相手の話に、時々相槌をうちながら聞いていた。

「あ、悪い・・・これ置いとくぞ」

田村の机にコーヒ―を置くと、席に座り電話が終わるのを待った。

「――わかりました。ありがとうございました、篠原に伝えておきます」

受話器を置くと、神妙な顔つきで俺たちを見回した。

episode 13-7 パスタとパン

電話を終えた若林が、俺たち今聞いた内容を話し出した。

「被害者の恋人だった斉藤啓介は、今もK市に住んでいた。第一発見者の野中は、K中学校を退職していて——今は県内の市立中央中学校で教師をしているそうだと。修平、ビンゴだ」

K警察署から担当刑事が、こっちに来ることになったらしい。四時の捜査会議に出るために、俺たちは中央警察署に向かった。

「なんとかなりそうだな」

隣で運転する田村に向かって声を掛けたが、そうだな、と素っ気ない返事だけが返ってきた。なんでだ？昨日、元に戻ったのになんてまたおかしくなってるんだよ。機械の故障か？砂丘の砂がやばかったか？T県から帰って来るまでは普通だったのに——。帰ってきたからか？おかしくなったのは。なんだ？何かあったか？！

「あ！」

俺の声に思わず田村が反応した。

「何だよ」

「あ、いや何でも無い。悪い——」

猪又だ。でも——オンブラージュで飲んだ時は普通だったな。ん？その次の日からか？——思い出した！俺が猪又に捜査二課に誘われた後だ。で？何故おかしくなるんだ？猪又が嫌いなのか？わからん——やっぱり砂丘の砂が。そうこう考えているうちに、中央警察署に着いてしまった。今は事件に集中しよう——。

捜査本部に行くと、中央署の捜査員たちが全員揃っていた。若林が篠原に報告している間、俺たちは席につき会議が始まるのを待つ。会議では、K警察署と共同捜査本部が組まれることが報告され、野中を重要容疑者として身辺を捜査することが決まった。俺たちは、野中の顔写真をもとに、現場周辺の聞き込みにまわることになった。「飯食って署に戻ろうぜ」

若林が提案したが、田村一人先に県警に戻るようになった。俺も断って田村と一緒に帰ろうとしたが、若林に聞きたいことがあったので、結局、若林と里見と俺で食べに行くことになった。

「たくさん食べていいぞ、割勘だしな」

事件が進展したことで、若林も機嫌がいい。注文を終え、料理を待っている今がチャンスだ。

「若さん、田村と猪又がコンビだった時の話が聞きたいんですけど」俺がそう切り出すと、若林と里見が顔を合わせた。

「田村と猪又？」

「はい、最近、猪又がどんなヤツか気になってきたので、詳しく知りたいんです」

若林と里見の様子を伺っていると、若林が口を開いた。

「猪又が、強行犯捜査係に異動になって組んだのが田村なんだ」

最初からソリが合っていないのは、一目瞭然だった。田村の言うことを、いつも無視して勝手に無茶な行動をし、結局二ヵ月で機捜に異動していったそうだ。他の三人も、似たような感じだったらしい。料理が運ばれてきたので、食べながら話を聞くことにした。若林オススメの店だけあって、美味い。

「猪又さん、希望してやっとなれた刑事部だったから異動する時、すぐく悔しそうだった」

タラコパスタを、フォークでいじりながら里見が遠慮気味にいった。あまりにかわいい仕草なので、タラコパスタを頼めばよかったと後悔した。

「でもまあ、また戻ってこれたんだし良かったよな。またアイツ誘って飲みに行こうな」

そう言いながら、若林はカルボナーラをフォークで器用に使いながら食べた。何をやっても様になる人だ。やはり、猪又は田村の話を聞き入れなかったんだな。ぼんやりと初めて飲んだ日のことを思い出した。

「……修平」

「ん、はい？」

「さっきから話しかけてるのに！。無視されてるかと思って悲しかったぞ」

冗談っぽく言って笑い、若林は食後のエスプレッソを美味しそうに飲んだ。

「すみません。何ですか？」

「野中のこと。なんで前の事件では、逃げずに現場に留まったのになって話してたのに無視されたの」

恨めしそうにして若林が、俺に言ってきた。

「その手には、のりません。割勘でお願いします」

そんな俺とわざとらしく残念がる若林を見て、里見が笑っている。「二人仲いいよね——でも私も、なぜ逃げなかったのか不思議に思った」

「俺思うんですけど、K市の事件は理由はわかりませんが、野中が衝動的に被害者を刺したんだと思います」

我に返って自分がしたことに驚き、慌てて救急車を呼ぶ。保身の為にかどうかわからない。何も考えていなかったかもしれない。彼は、被害者に声を掛け続けなんとか助けようとした。その行為によって、疑われなかったんだと思う。

「でも怖くなってK市を離れた——か」

若林が神妙な顔つきで、俺を見た。

「はい。そして一年後——。今度は計画的に犯行を犯していった——四件も」

俺の言葉に、若林も里見も悔しそうに顔を歪めた。

「必ず逮捕しような！行こう」

若林が力強い声で言うのと、伝票を持ってレジへ向かった。結局、若林が食事代を支払った。こういうことをスマートにできるから、この人はモテるのだろう。

県警に戻ると、K警察署から新たな資料がきていた。

「今、連絡を入れようとしてたところだ。一年前の凶器についてだが、

野中の勤務していたK中学校に聞き込みに行ったところ、事件の一月前に野中は職場の同僚とバーベキューへ行っていたことがわかった。その時に、包丁と食材を持ってきたのが野中だった。しかもその包丁を忘れて帰り、後日同僚が、職場に持参して本人に渡したそうだ」

ただその同僚は、凶器が野中の持ってきた包丁かどうかは、断言できなかったらしい。一年も前のことだし、どこにでもある野菜切り包丁だ——残念だが仕方がない。彼が包丁を持って帰宅する機会があったことが、わかっただけでもよしとしよう。

「明日で終わらせるつもりで、頑張ってくれ」

篠原は深くため息をつき、俺たちの顔を交互に見ながらそう言った。

「今日行くか？」

隣の席に座った田村を、いつものように誘った。

「やめとく」

いつもの返事が返ってくると思っていたのに断られた。オンブラージュに誘って、断られたのは初めてだ。なんだか——違和感を感じる。もしかして・・・原因は俺か？

店に入りカウンターのいつもの席に座る。大きく息を吐き、ここ数日のことを考えてみる。もしかしたら、田村の様子が変なのは俺のせいかな？あの後、何か俺の言動が気に触ったのか。俺・・・何やっただけ？

「悩みごとですか？」

マスターの声に、我に返った。前に置かれたジントニックスのグラスの表面に、水滴が浮いていた。

「いや・・・ちよつと気になる事があって」

マスターが、新しいジントニックスを俺の前に置いた。

「すみません、折角作ってくれたのに」

マスターは、ニッコリほほ笑みながら頷いた。今日は謝ってばかりだ——俺が至らないからか。新しいジントニックスを飲み、頬杖を

ついた。

そうだよな——田村だっていくら無表情でも感情はあるもんな。俺調子にのりすぎたのかも。でも、昨日の夜は普通だったよな。やっぱ猪又か——？やっぱ猪又を嫌っているだけか？でも猪又も彼なりに真剣に事件に向き合ってたはずだ。それを評価もしないで嫌うヤツじゃないだろ、アイツは。猪又は——田村のこと理解しようとしてないけどな。

——それか？もしかして田村は・・・傷ついていたのか？今まで四人とも田村を理解せず、猪又のように彼を逆恨みして異動していった。アイツだって真剣に事件解決に取り組んでいるのに。周りの人間も、アイツがああいう性格だから気付かなかっただけで、実は傷ついていたのかもしれない。

ひとつ思い出した。最初の挨拶でアイツ『一応よろしく』って言った。長く続かないと思ってたんだ。でも続いた・・・半年。飯食って、酒飲んで、冗談言い合って——。ケンカもしたけど、それでも続いている。それが今回、猪又が来たことで——不安になったのかお前？——コレ俺の考え間違いだったら、めっちゃめっちゃ恥ずかしいぞ。自惚れすぎか？

「お帰りですか？」

「——また来るかも」

照れ笑いして外に出ると、歩き出した。どうせまだいるんだろ、アイツ。

刑事部の部屋に入ると、田村がちょうどコーヒーを淹れているところだった。ガランとした広い部屋に、昨日のように二人しかない。

「なんだ急に」

流石に驚いた様子の田村だったが、すぐにいつもの無表情になった。

「どうせ独りでいるんじゃないかと思ってな。食うか？」

途中で買ってきたパンを渡すと、田村は受け取った。

「野中は今頃何してるだろうな。新学期も始まって、生徒に保護者に気を使って――」

自分のコーヒーを淹れながら、田村に話しかけた。

「嫌なら辞めればいい」

田村は、突き放すように言い放った。

「ほんとだよな、相手に本気でぶつかって行って、お互いに信頼関係を築けていればストレスなんて溜まらないよな」

壁にもたれ掛かりながら、淹れたてのコーヒーを飲むいつものまして苦味が口の中に広がった。田村は、黙って買ってきたパンを口に運んだ。

「まあ、本気でぶつかっていても相手に伝わらないことの方が多いけどな――」。でも、全員が全員、伝わらないわけじゃないさ。いるんだよ、中には信頼関係を築くことができるヤツだって」

田村を見てニヤリと笑い、残りのコーヒーを飲み干した。

「――そうだな」

田村は、コーヒーカップを口元に運びながら呟いた。

「今の生徒は、生意気そうだしなー、お前教師できるか？」

「無理だな。お前を相手するので手一杯だ」

「お・ま・え・ね。俺は中学生以下かつ！それに、それは俺のセリフだったーの！」

episode 13-8 ジャンケン

いつもより早めの出勤をすると、若林がすでにいた。そういえば、昨日も早くに出勤したな――この人もやっぱり真面目なんだな。席に着くと、若林が話しかけてきた。

「修平、ジャンケンで何が好き？」

「え？ えーと、グー？」

訳も分らず答えると、若林はニツコリ笑いながら言った。

「俺パーが好きなんだよね。だから俺の勝ちね。コーヒー淹れて」

「何ですかそりゃ。普通に言ってくれば淹れますよ、コーヒーくらい」

おかしくなって笑いながら、コーヒーを淹れに立った。でも、今日にも野中を追いつめる物証を見つけないければと張り詰めていた緊張が、少し楽になった気がする。これが、この人のやり方なのかもしれない。コーヒーを淹れていると篠原と田村も部屋に入ってきた。四人分のコーヒーを用意して、配っていると篠原の電話が鳴った。

また新たな事件か！？ 全員に緊張が走る中、篠原が電話をとる。

俺たちは篠原の前に集まり電話が終わるのを待った。出勤してきた里見も、その様子を見てすぐに俺たちのところに寄ってきた。受話器を置くと、篠原がため息をつきながらイスにもたれかかった。

「学校に聞き込みに言った捜査班からだ。野中から朝、学校を休むと電話があったそうだ。もしかしたらK中学の誰かが、警察が来たことを報せたのかもしれない」

下手に動いて逃げられては困るので、至急、野中の家に張り込みがつくことになったそうだ。

「俺たちも行きます」

若林はそう言うのと、俺たちを促して部屋から出て行く。K警察署から送ってもらった、野中の顔写真を持って現場の聞き込みにまわったが、目撃者もなく収穫は得られなかった。人に見られないよう

に、細心の注意をしていたのだろう。

「くそっ」

「落ち着け。どうせ逃げられん」

田村はいつもの無表情で言った。

「でもこのままじゃ——」

「ヤツは凶器をまだ持っている。しかも警察が張り込んでいるんだ、捨てるにはできない。俺たちは、確実にヤツを追いつめていく」

——そうだ。凶器を持っているんだ、まだ。しかも手元に必ず置いてるはずだ。その時、俺の携帯が鳴った。電話は若林だった。

「ビデオ班が、野中を見つけたぞ」

第四現場付近のコンビニの防犯ビデオに、犯行時刻直前にタバコを買っている野中が写っていた。職場からも自宅からも離れているコンビニに、深夜行った理由は何か。野中を参考人として署に呼んで話ができる。今、野中邸で張り込んでいた捜査員が、野中を任意で中央署まで運んでいるらしい。今頃、家宅捜査令状も申請しているはずだ。家から凶器が見つければ逮捕できる。急いで中央署に戻ると、野中が自供していた。逃げられないと思ったのだろう。

その日のうちに、家宅捜査令状が発行され搜索すると、彼の仕事部屋のクローゼットから新聞紙に包まれた包丁が見つかった。押収したスニーカーからも、ルミノール反応が出た。事情聴取は連日行われ、S県の事件の全容も明らかになった。

深夜帰宅途中、前を歩いていていた被害者が後ろを歩いていた野中を、変質者呼ばわりしてきて言い合いになった。

「気持ち悪いんだよ」

吐き捨てるように言っただけで背中を向けた被害者に、カッとなって運悪く持っていた包丁で背中を刺してしまった。ロッカーに置きっ放しになっていた包丁を、忘れないように鞆に入れたのが運の尽きだった。すぐに自分のしたことに気付き、救急車を呼んだが被害者は亡くなってしまった。自首する勇気がなく、いつ捕まるかとビクビ

クしながら毎日を過ごしていた。だが、結局捕まることはなかった。それでも怖くてS県を離れた。

C市で教師をやりながら、問題のある生徒や横暴な保護者、ことなかれ主義の上司などにストレスが限界に達した時、K市の事件を思い出した。被害者を刺した後の爽快感を――。そして一人、二人と刺していった。もう罪悪感もない――どうせ警察には捕まらない。そんな気持ちで彼を犯行へと向かわせた。そして四人目の時は、コンビニでタバコを買う余裕すらあった。結局それが仇となったのだけれど。

だが、昨日のK中学の同僚からの電話で、野中は驚愕した。

「今日、警察がきてお前のことを聞いていったぞ」

そんな・・・警察が俺を怪しんでいる――。足許から這い上がってくる恐怖に怯えた。嫌だ――捕まりたくない！家族だっているんだ。嫌だ――捕まるのは・・・嫌だ！捕まるのは・・・怖い・・・。色々な事が頭を巡り結局学校を休んだ。凶器を捨てようにも、警察が見ているかもしれない――そう思うと捨てられなかった。

そして――家のチャイムが鳴った。

もう――おしまいだ。

episode 13-9 黙秘

「お疲れー」

ジョッキがぶつかる音が響いた。猪又行きつけの、あの居酒屋に若林と三人で来ている。田村は今頃オンブラージュで一人で飲んでいるだろう。

「はーうまい美味い！仕事終わりのビールは美味い！」
ビールがまたキンキンに冷えていて、火照った体によく染み込んだ。

「修平は美味そうに酒飲むよな」

前に座った若林が、頬杖をつきながら感心している。

「これが唯一の楽しみですから」

ニツカリ笑って、二杯目のビールを注文した。

「可哀相に――唯一の楽しみだなんて。若い男がいいの、それで？」
若さんが涙を拭く真似をしながら、からかってきた。

「ぐっ、いいんです。どうせ仕事が忙しくて、それどころじゃないんですから」

目の前の唐揚げを頬張りながら半分強がりと言う。忙しくてそれどころじゃないのは確かだが、やっぱり彼女は欲しいさ。

「えーもったいないな、若いうちは楽しまないと」

若林は大げさに残念がりながら、「二十代なんてあつという間だよ」としみじみと言った。

「好きで一人でいるわけじゃないですよ」

「望月って彼女いないんだ――以外だな」

隣に座った猪又が、驚いている様子で呟いた。

「え・・・お前はいるの？」

「いるよ」

あっさりそう言われた。

「そんな！こんな不規則な仕事してるのに、何故彼女がつかれるん

だ!？」

頭を抱えて壁にもたれかかる俺に、若林と猪又が顔を見合わせ、ニヤニヤしながら聞いてきた。

「最後のデートはいつですか？修平君」

「・・・一年・・・前です」

「一年!？それはそれは、残念ですねえ」

まったく気持ちが悪くもってませんよ。ていうか、えらく楽しそうじゃないか、二人とも。

「あなたたちは鬼ですか？」

そんな俺の言葉を見無視して、二人は楽しそうに聞いてきた。

「じゃあ、別れた理由は何ですかー？」

「・・・も、黙秘権を行使します、鬼ーっ!」

episode 13-9 黙秘（後書き）

なんとか、終わらせることができました。

無事？終わらせることができてほっとしてます。「犯罪論」あたりが危ういですが・・・。

良ければ、感想、評価をいただけると今後の励みになります。

よろしくお願いいたします。

読んでいただいて、ありがとうございました。

「望月も大分慣れたみたいだな」

煙草の煙を、ゆっくりとくゆらせながら篠原は言う。白い煙は、吸い込まれるように天井目指して昇っていく。そして、天井にたどり着く前に消えてしまった。

「田村とも、うまくやっているみたいだしね」

藤堂が、手前に置いてある刺身を箸でつまみながら話すと間宮が残念そうに唸った。

「あれだけ肝が据わってれば、うちに来てもやってけるのにな」

三人行きつけの小料理屋『菊光』、高校の同級生が切り盛りしている店で、もう二十年近く通っている。店内はカウンターと三つほどテール席があるくらいでこじんまりとしているが、店主は以前料亭の料理長をしていたこともあり、味は絶品だった。三人は、いつもカウンターの席に座り昔話に花を咲かせながら酒を飲んだ。

「まーさん、望月はやらんぞ」

篠原は冷酒を一口飲み、赤い顔でニヤニヤしながら間宮に言う。

「篠さんそこ若いヤツたくさんいるんだから、一人くらいいいだろ。ケチくせーな」

「何言ってる、猫の手も欲しいほど人手不足だっつーの」

「じゃあ、うちの猫やるから望月くれ」

「いらねーよ」

間宮と篠原のやり取りを、店主と藤堂が苦笑しながら見ている。これもいつもの風景だ。

「だいたいお前は昔から自分勝手だったよな。体育大会の応援団の時だって、お前が旗を破いたせいで、うちのクラスはビリになった」
「お前だって問題ばかり起こしてたじゃねーか。文化祭のとき、校長の焼きそばにタバスコ入れて楽しんだのは誰でしたっけ」

罵しり合う二人を横目に、ため息をつきながら見守る藤堂。二人

が起こす騒動の後始末は、いつも藤堂の役目だった。体育大会のときも文化祭のときも。

「藤さんも大変だな、二十年近くもコイツらの相手して」

店主が、茄子とえびそばろ煮を出しながら藤堂に苦笑した。

「もう慣れたさ。まあ、もう少し大人になってくれると助かるけどね」

藤堂が片肘つきながら店主に笑いかける。

「なんだよーこれが俺たちのいいところだろ？」

篠原と間宮が声を揃えてぼやいた。

「開き直るな」

藤堂は苦笑しながら二人の方に向き直る。

「お前ら、成長がないな――」

店主が、あきれ果てて篠原と間宮を交互に見た。

「成長がないとか言うな。少年のままなんだよ、俺たちは。なっ」

「いや、どうかな」

間宮が、一緒にするなとても言うように顔をしかめた。

「一緒だろ、ほらあの夏の日の校舎裏――」

篠原が意地悪そうに言うと、慌てて間宮が「一緒一緒！仲間仲間！」と叫んだ。

「お前ら――よく藤さんに見放されなかったよなあ」

店主が、二人を見ながらじみじみと言った。

なんだよなんだよと愚痴をこぼす二人を、藤堂は穏やかな顔で見つめながら静かに目を閉じ低い声で呟いた。

「救われてるのは、俺の方だ」

ハッとしたように店の中が静まりかえり、店主は哀れむような目で藤堂を見た。篠原は真顔に戻り藤堂の肩に腕をまわした。

「水臭えな、俺たち親友だろ！」

間宮も力強く頷く。篠原の力のこもった声に、藤堂は伏し目がちに力なくほほ笑んだ。

「まあ、これからも色々迷惑かけるからな、よろしく！」

篠原がニヤリと笑いながら、バンバンと藤堂の背中を叩いた。

「痛い痛い、程々にしてくれよ」

いつもの笑顔で、篠原と間宮を見ながら背中をさする。店主はそんな藤堂の笑顔を見て、ほっとした表情をした。

「おう！」

結局、いつも通り閉店まで、篠原の武勇伝や間宮の失恋の話で盛り上がった。帰り道の違う藤堂と別れ、篠原と間宮は深夜の人通りのまばらな道を歩いていった。街路灯の弱弱しい明かりが道路を微かに照らしている。無言のまま歩く二人。まるで、話すのを拒むかのような沈黙が続いた。重苦しく圧し掛かるその沈黙を、最初に破ったのは篠原だった。

「――あれからもう二十三年か」

煙草に火をつけながら篠原は呟いた。煙草の白い煙は、星ひとつない空に同化していく。間宮はその煙が同化していくのを見上げながら、小さな声で呟いた。

「そうだな」

「この道、真っ直ぐな」

田村は返事もせず、無表情でハンドルを握っている。篠原に頼まれて、〇市に住む遺族に遺留品を届けに行くことになった俺たち。天気もよくドライブ日よりだ。篠原に礼を言いたくなる。

「部屋で働くのが勿体ないくらい、いい天気だな」

フロントガラスから見える雲一つない青空に見入っていると、急に大きな音がしたかと思うと、車のスピードが落ちていった。何事かと田村を見ると、パンクだ、と落ち着いた声で言った。え！？ここ民家もガソリンスタンドもないんですけど……。みごとに人っ子一人いない田舎道に取り残された俺たちの乗った車。

「パンク修理剤があるから大丈夫だ」

田村が車から下り、修理に取り掛かった。俺も手伝うために車から降り、携帯を取り出す。

「じゃあ篠原警部に連絡入れておくよ」

携帯を見ると圏外だった――ぐはっ、ここ圏外なの？結局、田村に篠原へ連絡を入れてもらった。なぜ田村の携帯は繋がるんだ。同じ携帯会社なのに。軽くショックを受けている間に、田村が修理を終わらせていた。おお、すまん。車をまた走らせる。

きれいに舗装された道は、ひたすらまっすぐ続いている。周りには、金色の稲穂が風になびきいて、幻想的な世界が目の前に広がっている。こんなに稲穂が綺麗だとは思わなかった。もう少し来るのが遅ければ、この金色の稲穂はすべて刈り取られ、刈り取られた後が無残に残る田んぼを見ることになっていただろう。それを考えると、少し得をした気分になった。ふと気になって、後部座席に置いてある遺留品の木箱に目を止めた。

「そういえばこの遺留品の持ち主の件、結局事故で処理されたんだよな」

「みたいだな」

この木箱の持ち主だった佐藤タケル、〇市に住む会社員。

中央区の美術館前のタクシー乗り場で、タクシーを待っていたところ、突然、車が彼に突っ込んだ。それだけならただの事故として処理されるのだが、事故を目撃していた多数の人間が、中央の車線にいた車が彼目掛けて突っ込んできたと証言した。運転手が故意に彼に突っ込んだと思えない状況だったらしい。

殺人の疑いもあるということで俺たちも駆り出されそうになったが、運転手と被害者の接点を調べても出てこず、運転手も興奮した様子で、急にハンドルが左に切れたと言うだけで埒が明かない。結局、事故扱いとなった。

「よくわからない事故だったよな」

「ただのハンドル操作ミスだろ」

やっと広い道に出て、景色を楽しみながらのんびり走っていると、前から来た対向車が急に俺たちの前に飛び出してきた。

ギャ————ツ

すかさず田村が、ハンドルを左に切り衝突を切り抜け、すぐにハンドルを右に切り直して元の車線に戻った。

「……ナ、ナイスだ田村」

かすれた声で、田村の瞬間芸を褒め称えた。シートベルトにしがみつきながら後ろを振り返ると、車は猛スピードで逃げていった。心臓がバクバクいっている。叫んだときは、口から心臓が飛び出るかと思った。ホッとして、シートにもたれ掛かり、とりあえず命があることに感謝した。

さすがの田村も、大きく息をつきほっとした様子だった。

「何だったんだ、今の——」

「ハンドルの操作ミスだろ。すごい顔してたな」

田村の言葉で、運転席と助手席に座っていた二人の男が目を見開

き、口を大きくあけ驚愕している顔を思い出した。俺もあんな顔だったんだろう。怖かった――。

その後は何事もなく進むと、いくつか集落が見えてきた。突き当たりまで車を走らせると、目の前に荘厳な門構えの寺が現れた。ここだけがまるで別の空間であるかのような佇まいの寺。被害者の実家である。車のエンジン音に気付いたのか、中から住職らしき年配の男性が出てきた。

「警察の方ですか？」

「はい、I県警の望月と言います。隣は田村です」

俺がそう言うと、男性は頷いて中に入るように促した。二十畳ほどの客間に通され、向かいに座ると同時に、男性が慇懃に頭を下げた。

「わざわざ遠いところからお越しいただき、ありがとうございます。私は、タケルの父親の佐藤博嗣と申します」

遺族である彼に、こんな丁寧な対応をされてしまうと心苦しくなってしまう。毅然とはしているが、顔にはどことなく憂いを帯びた印象もある。遺留品の木箱を手渡すと、父親の手が少し震えていた。「もしかしたら――これが原因だったのかもしれないかもしれません」

父親が、木箱を見つめながら力ない声で呟いた。

「は？・・・と、申しますと？」

「先日、檀家の人間を通して御払いをして欲しいと連絡を受けまして。ちょうど家に遊びにきていたタケルに、取りに行ってもらおうように頼んだんです」

父親の言葉に背筋が寒くなった。

「まさか・・・それがコレデスカ？」

おそるおそる聞くと父親は頷いて、木箱の蓋を開けた。

中には、牡丹の花が描かれている真っ赤な着物を着た女の子の人影が入っていた。

――よりによって人形。

その時、ここに来る時に起こった奇妙な出来事が頭の中に鮮明に

蘇った。こんな時に能力を最大限に発揮しなくてもいいのに、俺の脳よ。

「あ、では・・・我々は、失礼します」

血の気が引く思いで、よろよろと立ち上がると、逃げるように車に乗り込み寺をあとにした。

「――なあ、さっきのつてさ、アレのせいじゃないか？」

「何が言いたいんだ？」

「だから、さっきのパンクと飛び出してきた車だよ！」

田村の落ち着いた態度に、苛立ちながら答えた。この恐怖を一人で抱えたくないんだよ！

「違うだろ」

無表情でハンドルを握りながら、平然と答える田村。頼もしいがお前の反応はおかしい。

「いやいや、どう考えたってそうとしか考えられないだろ――」

「ただの人為的な事故だろ」

コイツまだ言うか。

「お前、あれ程おかしな目に合ってるのに、何で落ち着いていられるんだよ！」

頭を抱えて叫ぶと隣りから、「おかしいか？」と返ってきた。

「ただのパンクにハンドル操作ミスだろ。お前だって、あの人形を見るまでは普通にそう受け止めていただろ」

それは・・・そうだが・・・

「偶然起こった出来事その場に、あの人形があっただけさ」

そ・・・うなのかな？ なんだか腑に落ちないでいると、窓の外に空がいつの間にか薄暗くなっていて不気味な感じがした。まるで、空から邪悪なものが降り立ってくる前触れのような静けさを漂わせている。すぐ横の林に目を移すと、光の届かない木々の隙間からは漆黒の闇が覗いていた。鳥の鳴き声さえも不気味に聞こえてくる。気持ち次第で、感じ方も随分変わるんだな――」

「そうだよな。今時、呪いなんて非科学的な事なんてないよな」

湧き上がる恐怖を振り払うかのように、明るい声を出して笑った。
その後は、何事もなく県警まで戻ることができた。やっぱりただの
偶然だったんだ。

翌日、田村が席に着くなり無表情で「車が壊れた」と言った。
ひ——っ、やっぱり呪い！？

episode 16-1 錯乱

(現在) (前書き)

今回、全20話（一応）を予定しているので、少し長めのお話になります。

できるだけ早めに更新していくつもりですので、よろしくお願いします。

episode 16 — 1 錯乱

(現在)

何で美咲が・・・こんな・・・どうして・・・？

俺はまた暴れたのか？

・・・俺が・・・美咲を・・・

殺したんだ・・・

半狂乱で、包丁を振り回す彼を取り押さえたのは藤堂だった。あんな藤堂の顔を見たのは初めてだ。

「十五時十分、現行犯逮捕だ」

落ち着いた声で、藤堂が言った。

「藤さんお疲れ。あとは所轄署に任せよう」

篠原がそう言うと、俺たちに彼を連れていくように合図をした。

一時、騒然となった商店街――。彼は、包丁を振り回しながら夕方の人通りの多いこの商店街に乱入したのだ。俺たちは所轄署からの帰り道、この騒ぎに巻き込まれた。

放心している彼を、連絡して呼んだ所轄である南署の警察車に乗せようとした時、彼が小さな声で呟いた。

「俺が殺したんだ・・・俺が」

「何!？」

慌てて彼に問い掛けても、ただ同じ言葉を繰り返すだけだった。田村も険しい顔をして、彼をじっと見ている。

「どうした望月」

車の前で固まっている俺たちに、篠原が声を掛けてきた。

「篠原警部! ちょっと来てください!」

彼の言葉を聞いて、篠原の顔が強張った。

「コイツ誰かを殺った後なのか、くそつ。身分証を持ってないか確認しろ」

彼のジャケットの内ポケットを探ると、財布があり、その中に学生証が入っていた。

「中部経済大学の2回生で、田崎学。大学に連絡取ります」

携帯を取り出し、学生証に明記されている電話番号に電話をする。学校から聞いた住所に行ってみると、部屋の中央で腹部を真っ赤に染めた若い女性が倒れていた。

「――！まだ、息があるぞ！救急車を呼べ、急げ！」

篠原は、腹部の止血をしながら叫んだ。

俺たちは、車の中で田崎の隣に座り待機していた。怯えている田崎は、唇を震わせ肩を抱いて座っている。

「望月、彼を連れて来て」

アパートの階段の踊り場から藤堂が叫んだ。顔を真っ青にして震えている田崎を車から降ろし、部屋の前まで連れて来ると田崎は急に暴れだした。

「――嫌だ、入りたくない！ココには入りたくない！」

暴れる田崎を、俺と田村で押さえているのを見ていた藤堂がドアを勢いよく開けた。部屋では、篠原が女性の傷口の止血をしているところだった。

「まだ、――息がある」

藤堂が静かにそう言った。

「あああああ！――み、美咲！」

女性の名前を叫び、部屋の中へ靴を履いたまま駆け込んでいった。……どうして……こんな！……ごめん……美咲」

捜査員を押しのけ、横たわる女性にしがみついて泣き崩れる田崎。耳を澄ませると、救急車のサイレンが遠くから聞こえてきた。サイレンの音が次第に大きくなっていく。藤堂が、田崎に近寄り彼の腕を掴んで立たせた。

「彼を車に」

静かな、しかしどこことなくいつもと違う声で藤堂は俺たちに言った。

「美咲を助けて！お願いだ・・・美咲を・・・誰か、助けて・・・」

田崎は、車の中で震える肩を抱きながら声を押し殺して泣いていた。

救急車は到着するとすぐに彼女を搬送し、病院へ向けサイレンを鳴らしながら走り去った。

ガタンッ

後ろで、イスの倒れる音が聞こえた。振り返ると同時に、担任の声が後頭部に聞こえてきた。

「どうした田崎、まだ授業中だぞ」

担任の佐々木がそう言うと、ドアのノブに手を掛けていた田崎と呼ばれた男子生徒が「つまらないから帰る」と言って教室から出ていった。教室中が騒然とする。

なんだ——アイツ。気になりながらも、前に向き直ると担任はため息をついて授業を続けた。ああ、追いかけないんだ——。

結局、そのまま何事もなかったかのように授業は続けられた。

「美山^{みやま}、さっきは、驚いたなあ」

一年で同じクラスだった真山^{まやま}が、授業が終わると同時に後ろを向いて話しかけてきた。まだ、席替えをしていないので出席番号順の席なのだ。だから去年同様、俺の前に真山が当たり前のようにいる。愛嬌のある顔で、気さくで誰とでもすぐ仲良くなることができる特技を持つ彼は、クラス一番のお調子者だ。

「ていうか、誰なの、彼？」

「中学に入ってからほとんど学校来てないからな、アイツ。俺、小学校一緒でさ。田崎って言うんだ。田崎学」

「へえ、そうなんだ。でも、追いかけない佐々木もどうよ」

クラス委員長になっていた（立候補はしていない）俺は、田崎のことが一応気にはなっていた。

「ほっとけよ。担任も相手するのが面倒なんだろう、アイツ暴れるとかなりヤバイよ」

余計気になるじゃないか——。

それよりさ——、と真山がクラスの女子について話している間も、

田崎のことがなんとなく頭から離れなかった。根っからの委員長体質なのかな、俺。

「で、誰がいい？」

真山の声で我に返り、少し考えてから「そう言うお前は誰がいいんだ？」と切り返した。真山は、照れくさそうに笑って校内でも人気の高い女子生徒の名前を挙げた。

「また無謀などこいくなあ」

「無謀とか言うな。だってめっちゃめっちゃ可愛いだろ？同じクラスなんだし、チャンスだと思わね？」

机に身を乗り出しながら興奮気味に真山が言った。

「チャンスねえ・・・ま、頑張って」

頬杖をつきながら片手をあげ、エールを送った。

「心こもってねえなあ、まあ見てろって」

そう言うとき真山は、彼女のいるグループのところに行ってしまった。

ため息をつき窓の外を見ると、校庭にはどこかのクラスの女子が次の授業で使うのだろう、ハードルの準備をしていた。

——俺は、あといくつのハードルを越えなくてはいけないんだろう。学校を卒業しても、企業に入りあくせく働き、人間関係に気を使い、出世争いもして。今とたいして変わらない生活をいつまで続ければいいんだろう。——別に今の生活が嫌だとは思っていない。友達だっているし、勉強もそれなりに楽しい。

でも・・・なんだか虚しいと思うのは、なぜだろう。

ハードルをぼんやりと見ながら、田崎の表情のない顔が浮かん

この事件は所轄署に引き継がれ、田崎は、その場で現行犯逮捕された。

被害者は、田崎の恋人の佐々木美咲、二十三歳、看護師。二人は、四年ほど前から付き合っていた。彼女は今、職場である大学病院の集中治療室に入っている。危険な状態で、意識は戻っていない。

調べでは、田崎には精神科への通院歴があった。学生時代にも突然暴れだしたり、刃物を振り回したりしていたそうだが、薬を服用するようになってからは症状は治まっていたらしい。

薬は現在も処方されている。

所轄では、当日、田崎が薬を服用していたか調べるため、採血をして科捜研（Ⅱ科学捜査研究所）に鑑定にだした。田崎は、被害者とその大学病院で知り合ったようだ。

イスにもたれかかり、時計を見るともう十九時だ。といっても今日は当番なので、朝まで田村と一緒にのだが――。

「じゃあ望月たち頑張れよー」

そう言うのと篠原たちが帰っていった。いいな、管理職は。当番がなくて――。まあ、俺たちの年齢の時、散々やっただろうけど。

「修平ー、デパ地下の弁当買ってきたぞ」

外出先から帰ってきた若林が、そう言って弁当を二つ渡してきた。

「若さーん！俺、若さんに一生ついてきますー」

祈るポーズをして若林に感謝した。この心遣いが嬉しいではないか。

「大袈裟だな、修平は」

若林と里見が笑った。二人はすぐに席に着き、仕事に取り掛かった。その後も時間が過ぎるにつれ、一人また一人と人がいなくなり、とうとう田村と二人だけになった。

「若さんからもらった弁当食おーぜ」

蓋を開けると、色とりどりのおかずの入った松花堂弁当だった。

「おお、美味そう！」

弁当を頬張りながら、田崎のことが頭をよぎる。田村を見ると、黙々と弁当を頬張っている。

「お前はと思う？ 田崎のこと」
気になって田村に聞いてみた。

『俺が殺してしまったんだ』

彼の哀しげな声が頭からこびりついて離れない。

食後のコーヒーを淹れながら田村が言った。

「事情聴取でも、錯乱状態で詳しい話ができていないらしい。犯行時のことは一切覚えてないようだ」

記憶がなくなるほど、彼らに何が起こったのか？

「あとは、彼女の意識が戻るのを待つしかないか」

「そうだな。危ないらしいけど――」

コーヒーを受け取り、口元まで持ってきたところで手が止まった。彼女が亡くなれば、傷害事件から殺人事件に切り替わる。今の田崎の状況では――。

「裁判で心神喪失状態が認められれば、下手すれば――不起訴か」

田村が俺の考えていたことを口にした。

「確か今日、検察に送致されたんだよな」

勾留請求が通ったとして、明日から十日、延長できたとして二十日しか勾留できない。それまでに、彼女が亡くなれば――事情聴取は今よりもっと厳しいものになるだろう。田崎の精神は持つだろうか？もうすでに、彼の脆弱な精神は限界にきている。いつ壊れてもおかしくない状態じゃないのか。

「傷害か、殺人か、所轄は大変だな――」

コーヒーを飲みながら田村が呟いた。

会話がそこで途切れ、部屋は静寂に包まれた。ふと窓の外から聞こえる音が気になって、覗いてみるといつの間にか雨が降っていた。

「雨だ——」

コーヒーを片手に窓に近寄る。窓の下の道路には、ワイパーを忙しなく動かしながら走る車が何台も行き交っている。家路に向かう車やこれからどこかに出かける車だろう。

「そういえば——お前車いつ来るんだ？」

「来週末だ」

結局、その後、新しい車を買ったようだ。しかも、コイツ御被いにも行っていないらしい。何かあっても知らねーからな。

「まさか助手席の一番乗りは俺か？ あはは、笑えねえ話だな」

想像するだけで笑いが込み上げてくる。俺より先に彼女は作らせん。

「笑ってるじゃねーか。これからは、お前の車出せよ」

田村がふて腐れながら言った。

「イヤだ」

キッパリと言ってやった。彼女を助手席に乘せるまでは——。じやなきや——笑えない。

あれから一週間、田崎は学校に一度も来なかった。

いつものように本を読んでいると、真山が小声で話しかけてきた。

「おい、美山。昨日、田崎が捕まったぞ」

「は?!」

驚いて、思わず読んでいた本を床に落としてしまった。真山が人差し指を唇にあてて、しー!と慌てて辺りを見回した。お前が変なこと言うからだろ。

「俺ん家、田崎の家の近所なんだ。昨日、田崎ん家にパトカー来てたんだよ。なんかさ、家に火つけようとしたらしくてさあ」

「迷惑だよなー」とぼやく真山の声が遠のいていく。

家に火を?

なんでそんなことを?――何を考えているのか想像ができない。そんなヤツが、クラスメイトなんて。考えただけで、背筋が寒くなつた。

「トル、ストイ? クロイツェル・ソナタ? なんだそりゃ?」

真山が落とした本を拾い上げ、本の著者名と題名を読み上げた。

「読みたかったら貸すぞ」

「うへえ、遠慮しとくよ」

だろうな。もし読んだとしても、また、うへえ、と言いきうだ。

始業のチャイムが鳴り、教師が教室に入ってきた。教師の流暢な英語も頭の上をすりと流れていって耳に届かない。ずっと田崎のことばかり考えていた。

下手をすれば、家族全員が死んでいたかもしれない。なぜ、そんなことができるんだ?

家族が死んでもいいと思ったのか?

家族を殺したいと思ったのか？

そう思ったとき、気分が悪くなり吐き気がした。

授業が終わり、真山と話していると担任の佐々木が教室に来て、俺を職員室まで呼びだした。職員室へ行くと、佐々木は申し訳なさそうに話を切り出した。

「美山、悪いが田崎の家にプリントを届けてくれないか？」

「え……」

顔を強張らせ言葉も出ない俺に佐々木は「今日どうしても外せない研修会があって行けないんだ」と言っけてプリントを差し出してきた。この人は、田崎が昨日何をしたか知らないのか？！

「でも、家も離れてますし——」

なんとか断ろうとするが、佐々木もなかなか折れない。

「田崎の母親に渡すだけでいい。頼む、委員長だろ」

最悪だ——。教頭や学年主任の先生に頼めばいいではないか。

「……わかりました」

ため息をついてプリントを受け取る。教室の前に戻ると、部屋からはクラスメイトたちの楽しそうな笑い声が聞こえてきた。なんで俺が——。席につき、プリントを鞆の中へ押し込んだ。すぐ渡して帰ればいいんだ。母親に渡せばいいんだし、たいしたことないさ——。

真山たちの中身の無い話に加わり、気を紛らわせたりした。クラス誰と誰が付き合っているだの、誰々が近所の本屋で万引きしただのつまらない話だったが、それでも家に火を放って家族を殺そうとしたヤツの話よりはまだマシだった。

だが下校時間が迫ってくると、急に胸が締め付けられるように苦しくなり、手が震えた。

やっと家に帰れる――。ソファで仮眠を取ったせいで体が痛い。今日は、家でゆっくり休もう。早くも田村が助手席に乗るという笑えない状態になったが、もういい。――いつ彼女ができるかわからんしな。投げやりになりながら、田村を乗せ地上に上がると気持ちいいほど真っ青な空が一面に広がっていた。

「おお。休日にぴったりの天気だな」

空を見上げながら声を上げると、隣から「お前どこかへ出かけるのか？」という容赦ない問いかけをされた。

「――いや」

家で寝るつもりだ。

「落ち込むようなこと聞くなよ。せつかく送ってやろうとしてるのによ」

ハンドルを握りながら抗議すると、気持ちのまったくこもっていない返事が返ってきた。

「そりゃどうも」

コイツ――乗車拒否してやるぞ。車を走らせていると、ちょうど田崎が暴れていた商店街が見えてきた。気になって、アパートの方へ車を走らせると、田崎のアパートの前に男が立っていた。おや？　と思い車を止めると、田村も気付いたらしく車から降りて男の元へ歩いて行った。

「すみません、田崎さんのお知り合いの方ですか？」

田村の声に振り向いた男は、凜とした涼しい目元が印象的で、年は田崎と同じくらいの若者だった。

「あ、警察の――」

田村を見て、青年は呟いた。

「はい、県警の田村といいます」

それを受けるように田村は答えた。非番で警察手帳持っていないの

に――。若者は、その言葉だけで安心したのか（そんなすぐ信じちゃダメだ！）自分の身分を明かした。

「俺、学の友人の美山といいます」

――ほんとダメだよ。今回は本物の警官だけどさ、きちんと確認しないと。ため息をつきながら、車を降りて二人のもとへ向かう。

美山は、俺を見ておずおずと会釈した。

「何をされていたんですか？」

田村が美山に聞いた。

「いえ・・・なんか、信じられなくて。家に来れば・・・二人が笑って迎えてくれるんじゃないかと思って・・・でも、やっぱり現実なんですネ・・・」

苦しい顔で美山は答えた。

「大学のご友人ですか？」

俺の質問に美山は、ゆっくりと顔を上げて「中学からの親友です」と答えた。田崎に親友がいたのか。

「学とは、中学から大学までずっと一緒でした。美咲と付き合うことになった時も一番に教えてくれたんです」

美山が寂しそうに話してくれた。

「今回の事件で、何か思い当たる事はありませんか？」

美山は首を横に振るだけだった。

「検討もつきません。本当に仲が良かったですから――あの、俺もう行かないと」

田村は、飽きたのか何も話さなくなっていた。おいコラっ！

「引き止めてしまってすみませんでした」

美山と別れ、車に戻る。エンジンをかけながら、美山の寂しいな後ろ姿を見ていた。

「可哀相に、相当ショックだったんだな」

隣から返事が返ってこない。まさか寝たのか！？隣を見ると、田村は、じっと美山の背中を見据えていた。

「なんだよ、返事くらいしろよな」

アクセルを踏み、車を発進させた。

「ああ、悪い」

そう言っていると、腕組みをして窓の外に目を向けた。

「何か気になることでもあるのか？さっきの彼に」

俺が運転しながら言うところ「――ああ、ちょっとな」と歯切れの悪い返事が返ってきた。

「なんだよ。気になる事があるなら言えよ」

田村の方に顔を向けると、田村が前を指差した。

「前見て運転しろ。まだ死にたくないからな」

くそー、お前が悪いんだろ！前に向き直り運転に集中する。

「腹減ったな」

俺の苛つきを無視するように、田村が呑気に言った。でも確かに腹は減った。周りをキョロキョロと見ると、ちょうど喫茶店が目に入った。

「あそこで、モーニングでも食うか」

車を喫茶店の駐車場に止め、店内に入るとコーヒーの香りが空きつ腹を刺激した。

机には、モーニングセットが並び俺たちは黙々とそれらを食べた。腹が一杯になったところで、さっきのことを田村に聞いてみる。

「で？気になることってなんだよ」

コーヒーを飲んでいた田村が、顔をしかめた。

「お前もしつこいね」

「刑事だからな」

田村はため息をついて、観念したように話し出した。

「あの美山って男さ――俺たちのこと知ってたよな」

「そうか？事件があった後なんだから話かけてくる人は皆、刑事だと思ったんじゃないの？」

コーヒーを飲みながら、さっきの美山のことを思い出す。

「マスコミ関係者かもしれないだろ？」

まあ、確かに。俺は、頷いた。

「でも彼は、手帳も見せてないのに俺たちのことを疑いもせず自分の身分を明かした」

田村は、コーヒーカップをテーブルに置いた。

「じゃあ、どこで俺たちが警官だと彼は知ったんだ？」

あっ！

「た、田崎をアパートまで連行した時——か？」

俺は、持っていたコーヒーカップを危うく落としそうになった。

「彼はいたんじゃないのか、アパートの近くに」

優雅に桜の花びらが舞い散る中、重い足取りで佐々木の描いた地図を見ながら田崎の家を目指す。いつそ家が見つからなければいいのに――。

思いとは裏腹に、地図どおりの場所にひっそりと佇む二階建ての白壁の家があった。表札には『田崎』とゴシック体で書かれていた。着いてしまった。

ドキドキしながら、インターホンを鳴らす。応答がない。いないのか。ホッとして、郵便ポストにプリントを入れようとしたとき、庭に誰かがうずくまっているのが見えた。

誰だ？ 目を凝らしてよく見ると田崎だった。

――捕まっただんじやなかったのか。

泣いて――いるのか？

気になって、玄関の門を開け田崎の方へ近づいていった。気配を感じたのか、田崎が振り向いた。鼻筋の通った整った顔立ちをしているが、目だけが強く闇い光を放っている。まるで、野生の獣のような目だった。その目が赤く腫れている。

「誰？」

乱暴に涙を手で拭った田崎は、身構えながら聞いてきた。

「あ、俺クラスメイトの美山です。担任の佐々木先生に頼まれてプリント持ってきたんだ」

目を細め、田崎は立ち上がった。何も言わずに、そのまま背を向けて家に入ろうとする。

「お、おい、・・・大丈夫か？」

声を掛けると、田崎が凄みのある獣の目で俺を睨み「失せろ」と吐き捨てて家に入っていった。

あまりの迫力に何も言えないまま立ち尽くし、結局プリントを郵便ポストに入れて家に帰ることにした。

あれが――田崎。

想像していた感じと少し違っていた。もっと、人間臭いヤツだと思っていた。自己中心的で自意識過剰、卑怯で狡猾な人間。世の中に溢れているそんな人間の中の一人だと。

でも、今日の彼の姿は――まるで傷ついた獣そのものだった。

震えながらうずくまり、必死に何かから自分を守ろうとしているように見えた。よくわからない。今日は、たまたまそうだったのかもしれない。まだ、よくわからない。遠くに見える田崎の家を振り返り、まだ泣いているのだろうか――と呟いた。

「——でも、それじゃあどうしてそのことを言わないんだ？」

俺の問いかけに、田村が冷めた目で思いがけないことを言った。

「もしかしたら、現場を目撃してたのかもな」

「はあ?!——それなら尚更、どうして警察に言わないんだよ?!」
勢いよくテーブル越しに身を乗り出したので、コーヒーがカップから零れそうになった。

「あ、悪い」

座り直してテーブルに頬杖をつき、苦しげな彼の顔を思い出す。

「なあ、もしかしたら——親友だから言えないでいるのかな」

「バカな。そんな理由で隠してどうする」

田村が呆れながらコーヒーを手に取った。

「ショックだったのかも、田崎が被害者を刺した現場を目撃して。

それに、止められなかった自分に悔やnderのかもしれない」

田村が俺を一瞥し、ため息をついた。

「お前は——やっぱり刑事にむいてないな」

また言うか、コイツは。

「あのな、同情してるわけじゃないぞ。それに——それが事実なら、そこで自首させるのが本当の親友だと俺は思うし」

田村が鼻を鳴らした。

「理想論だな」

「捻^{ひね}くれてるな、お前。だって、お前が何か悪いことしたら俺自首
すすめるよ?」

頬杖をつきながら俺が言うと、田村は一瞬驚いた顔をしたが、すぐいつもの無表情になった。

「するか!」

「何だよ、たどえ話だろ」

「縁起でもないたどえ話をするな。行くぞ」

田村は、伝票を掴むとレジまで早足で歩いて行った。車に乗り込むと「中部経済大学まで行ってくれ」と偉そうに言う。
俺はタクシーか?!

今日も、佐々木はプリントを届ける役を俺に押し付けた。これが、佐々木の手だったのかもしれない。佐々木に不信感を抱きつつ、教室に帰ると真山が「ハムテルって知ってるか?」といきなり聞いてきた。

「ハムテル? 知らん」

「本だよ、本」

本って……。俺は、図書館の司書でもないし、すべての本の把握をしてるわけがないだろ。不機嫌な俺の顔を見て、真山が慌てて補足した。

「なんかさ、片思いの果てに拳銃で自殺しちゃうんだよ」

「ああ、ハムテルってことは『若きウェルテルの悩み』だな。なんだよ、ハムテルって」

呆れていると「そう、ウェルテル。それぞれ。やっぱり知ってた」と真山は嬉しそうにまくし立て「貸して」と右手を差し出して言った。

「――お前が読むのか?」

「うん」

「ふーん、俺持っていないよ」

「何だよ! 先に言えよ」

真山が、がっくりと肩を落とした。そこまで、落ち込むことじゃないだろ。

「図書室で借りればいいだろ」

俺の言葉に、真山が勢いよく顔を上げた。

「そうじゃん! って図書室ってどこだっけ?」

「お前さ――。どこで、ゲーテなんて知ったんだ?」

「ゲーテ? 違うよ。ウェルテルだって」

「だから――『若きウェルテルの悩み』はゲーテが書いたんだよ」

頭が痛くなってきた。額を押さえたため息をつく俺に真山は「いやあ、畑山が読んでたんだよ」と、はにかみながら言った。まだ、諦めてなかったのか。

「あっそ。でも、お前向きじゃないぞ。アレ」

「いいんだよ。話ができれば」

「自分の好きな本の方が話は続くと思うけどな、いいけど。図書室は、別館の二階だ」

えー自分の好きな本って漫画しか読まねーし、とぼやく真山を無視してプリントを鞆の中に仕舞い込んだ。

「じゃあ、アレ貸して。この前読んでた、スットコドッコイの本」

「お前わざと言ってるだろ。それに――アレはもっとお前向きじゃない。明日なんか持ってきてやるよ」

「頼むー」

ほんと、コイツ憎めないヤツだな。おかしくなって笑っているとチャイムが鳴り授業が始まる。授業中、ロツテへの叶わぬ恋に絶望して拳銃自殺するウェルテルを思い出していた。俺は、あの話は好きではない。たかが恋に、唯一無二である命を絶つ主人公に怒りを通り越し呆れていた。彼は馬鹿だ、と。煩悶する主人公に結局最後まで感情移入することなく読み終わってしまった。だから、本は持っていない。

学校も終わり、田崎の家にプリントを届けに行く。また郵便ポストに入れておけばいいよな。

田崎の家の前まで来ると、母親らしきやつれた女性が家から出てきた。

「あの、すみません」

俺の呼び掛けに一瞬体がびくりと反応した。驚いた顔で俺を見た後、すぐに女性は笑顔で応対してくれた。彼女は、やはり田崎の母親だった。

「僕、田崎くんのクラスメイトの美山といいます。佐々木先生に頼

まれてプリントを持ってきました」

わざわざありがとう、と言って丁寧プリントを受け取った。

「失礼します」

会釈をして、二階のカーテンの引かれた窓をチラリと見てから田崎の家を離れた。あの母親大分やつれていた。

田崎は家でどんな風に過ごしているのだろうか――。

「彼に話を聞くのか？ 非番でしかも管轄外なのに？」

「休みたかったら、お前は帰れ」

田村は、窓の外を見ながら言い放った。俺の車だっつーの。

「じゃなくて！ 管轄外だって言っているの！ 俺は。手帳ないしどうすんだよ——」。彼が現場にいたっていう証拠だってないんだぞ」

運転に集中しながら田村を諭すが、ヤツは完全無視だ。お前な。お前がそういう態度を取るなら俺だって考えがあるぞ。

「——おい！」

田村が気付いたのか、俺の方を振り向いた。車は、県警へと向かっている。

「県警行つて、篠原警部に報告が先だ。手帳もないのに、うろつくわけにはいかないんだから」

横目で田村を睨みながら言うと、田村はため息をつき、また窓の外に顔を向けた。勝った。

車を駐車場に止め、刑事部へ向かった。その間も田村は無言だ。お前は子供か。篠原に、美山が現場にいた可能性があることを報告すると、所轄に連絡を取ってくれた。

「お前ら、仕事していくか？」

電話を終えると、篠原がニヤニヤ笑いながら言ってきた。若林たちも苦笑している。

「——帰ります」

車に戻りながら、田村が「余計な事を」と舌打ちした。何を言う。所轄の刑事に見つかったらそれこそ大目玉だ。これは、俺たちの仕事じゃないんだからな。

「行くぞ」

ふて腐れた田村を車に押し込み、アクセルを踏んだ。運転しながらも、やはり気になって美山のことが頭から離れない。田村を見る

と、こっちも同じらしく窓の外を見ながら何やら思索に耽っている。
危うく、大学まで車を走らせるところだった。

漫画好きの真山に『トム・ソーヤーの冒険』『ハックルベリー・フィンの冒険』『ドン・キホーテ』の本と『車輪の下』と、同じヘッセの作品で『春の嵐』も一緒に渡した。

ヘッセは俺の好きな作家の一人だ。

「人は自分だけのために生きるより、他人のために生きる場合のほうが、満足が大きい」

『春の嵐』のこの件くだりの部分にとっても感銘を受けた。やっぱり、俺は委員長体質なんだな、と改めて思ったりもした。

始め、五冊の本を机に置いたときの真山は口には出さなかったが、うへへ、という顔をした。でも、次の日、『トムソーヤーの冒険』を一気に読んだらしく興奮して話してきた。

「すっげー面白かった！ドッキドキで一気に読んじまった」

そんな真山を見て、本を持ってきた甲斐があったと俺も喜んだ。畑山とも、本の話をして少しずつ仲良くなっているようだ。よかったではないか。

俺はと言うと、その後も田崎の家へプリントを届け続けていた。最近では、母親が応対してくれるので、初めほど苦でもなくなっていた。あれ以来、田崎の姿は見えていない。アレは何だったのか。

「佐々木のヤツも最悪だよな——お前に面倒押し付けてさ」

真山が、お使い役の俺に同情する。

「いいさ、別に」

頬肘をつき、いつものように本を読みながら言った。

「気をつけろよ。言わなかったけどさ、アイツ包丁で母親に切り付けたりして暴れるらしいから」

声のトーンを落とし、真山が表情を曇らせながら言った。

「——本当か、それ？」

本から真山に視線を移し、言葉を失った。真山は、無言で頷く。

——家庭内暴力。

だから、あの母親あんなにやつれていたのか。

「今日も行くんだろ？」

真山を見ながら頷いた。

「俺が届けてやってもいいけど、部活と塾があるからな——悪い」
「ありがとな、大丈夫さ。渡してすぐ帰るだけだしさ」

すまなさそうにしている真山に、ありがたく思いながら笑顔で答えた。

学校が終わり、いつものように田崎の家へ向かう。そしていつものように、母親にプリントを渡せば終わりだ。そう思っていた。しかし、家へ行ってみると様子がいつもと違っていた。

二階の窓ガラスが割れていて、庭に物が散乱している。インターホンを押しても、応答がなかった。嫌な予感がして玄関のドアを開け中に入ると、廊下はガラスの破片や本、服が散乱していて足の踏み場もなかった。

何があっただんだ——。

二階から、呻き声が聞こえる。まさか——。真山に聞いた話が頭を過ぎった。家庭内暴力。慌てて階段を駆け上がると、田崎が床に突っ伏していた。母親と妹の姿は見えない。ほっとして田崎の背中を見つめた。

また——泣いているのか？

「た、田崎——」

声をかけると、田崎がすごい勢いで体を起こした。

「何で——お前がここにいる」

涙で濡れた顔で、俺を睨んだ。あの獣の目だ。闇く鋭い目。田崎はゆっくりと立ち上がり、俺に近付いてくる。

——まずい、逃げなきゃ。

そう思うが、恐怖で足が思うように動かない。

「帰れっ！」

思い切り突き飛ばされ、左肩を床に強く打ち付けた。

「ってえ」

田崎は俺の胸ぐらを掴み、壁に押し当てる。

「ぐっ」

壁に思い切り頭をぶつけ、激痛が走る。

「お前だって、お前らだってみんな————いらなと思うてるんだろ!？」

田崎は、涙を流しながら叫んだ。悲痛な叫び。哀しそうに顔を歪めながら、大粒の涙を流し続けている。

「俺に——関わるな! 出て行け!」

田崎は俺を放すと、そのまま奥の部屋へ入っていった。

田村を寮の前で降ろし、自分の家に帰って来てもなかなか眠る気になれなかった。どうしたものか――。溜まった洗濯物を洗濯機に放り込み、スタートボタンを押した。水が流れ出す音が聞こえる。冷蔵庫からビールを取り出し、ソファに腰掛ける。今ごろ、美山は所轄の刑事に話を聞かれているだろう。

もし現場を見たのなら、自分の見たことすべてを話すんだ。それは、親友への裏切りでも何でもない。田崎のためにも話してほしい。ゴウンゴウン、ゴウンゴウンと一定の速さで洗濯機が鳴り響く。その音を聞きながら、ビールを一口、二口と飲んでいく。誰かから洗濯機の回っている様子を見ると癒される、と聞いたことがある。俺は、この音を聞くと何だか落ち着く。メトロノームのように一定のリズムで鳴り響く洗濯機。その音を聞きながら、ぼおっと座り続ける。

ビールを一缶、二缶、飲んでいっているうちに意識がどんどん遠くなってきた。体が鉛のように重い。もう――いいや、ベッドへ移動するのも面倒だ。ここで寝てしまおう――。そして、だんだんと意識が遠のき、そのまま深い眠りに落ちていった。

目が覚めると、窓の外がうつすらと明るい。時計を見ると、六時を指していた。

これは――。午後の六時なのか、それとも朝の六時なのか――どっちだろう。また、ソファで寝たせいで体のあちこちが痛む。腰を擦りながら、テレビを点けると朝の顔でお馴染みのアナウンサーが、爽やかな笑顔でニュースを読んでいるところだった。

――ほんとに寝ただけで終わったな、休日。

着替えを持って洗面室にいくと、ひどい寝癖の自分が鏡に写っていた。髪を掻き上げ、ため息をつきながら服を脱いでいく。蛇口を

捻り、シャワーを浴びる。朦朧とした頭がやっと冴えてきた。

美山がどう証言したか篠原に聞いてみよう――。それが気になってしょうがない。でも、田崎の事件ばかり考えている暇はない。他にも事件を抱えているし、調書も書かなくてはいけない。ああ――考えただけで気が重くなってきた。

蛇口を捻り、シャワーを止めると洗面室にでた。タオルで体を拭き、洗濯機から下着を取り出し着替える。

今日もまたいつもの始まりだ――。

その場を動くことができない。床に座り込んだまま呆然としていた。

あんな声を聞いたら———。

あんな顔を見たら———。

アイツは———何に苦しんでいるんだ？

ゆっくり立ち上がると、田崎のいる部屋へ歩いて行く。部屋に入ると、部屋の真ん中で田崎がアルバムから写真を剥して破り捨てていた。

「——！来るなあ！帰って言っただろ！殺されたいのか？！」

俺に気付くと、アルバムを俺目掛けて投げてきた。アルバムは俺のすぐ横の壁に当り床に落ちた。足許に落ちたアルバムには、笑顔の少年と父親らしい男性が並んで写っている写真があった。アルバムを拾いあげ、田崎に手渡そうと近づくと彼の足許には無数の家族写真の残骸が積み上げられていた。

田崎はアルバムを手で払いのけ、奇声を発しながら飛びかかってきた。俺の首を絞めながら、顔を歪め泣いている。

く、苦しい———。

手をどけようと思ってもすごい力で、びくともしない。田崎の泣き顔を見上げながら、意識がどんどん遠のいていく。

も、もう———だめだ。

「——父さん！！どうしてえ」

遠のく意識の中、田崎の悲痛な叫び声に———涙がでた。

父親と一緒に写った笑顔の幼い田崎と、家族写真を破り捨てるほどの田崎の絶望に涙が溢れて止まらない。俺には——田崎の苦しみがどれほどのものか分からない。でも——それほどの苦しみを独りで背負っていた彼を想うと哀しかった。何も知らずに彼のことを怖がった自分が恥ずかしかった。

田崎の首にかけた手が緩んだ。

「つぐっ、ごっほ、ごほっがはっ」

急に呼吸ができるようになり、むせ返る。田崎は、俺が泣いていることに驚いて後退った。

「——帰れ。俺が暴れる前に、帰ってくれ！」

田崎はそのままその場にうずくまった。震える肩を両手で抱え、必死で自分を守っているかのように。

「田崎……」

フラフラになりながら立ち上がり、田崎の方へ歩み寄る。

「黙れ！来るな！」

うずくまりながら、震える声で田崎は叫んだ。

「どうせお前だって、俺を裏切るんだ！だったら！——俺に関わるなよ！」

「俺は……」

田崎の肩に手を置くが、振り払われた。

「嫌なんだ。もう、拒絶されるのは——嫌なんだ」

「おはようございます」

部屋に入ると、若林と猪又がコーヒーを飲んでいた。

「修平も飲むか？」

「飲みます」

田村は、まだ来ていないようだ。若林たちのところへ行き、コーヒーを受け取る。

「えらく田崎の事件、気になってるみたいだな」

若林が苦笑しながら聞いてきた。他にも仕事があるだろうに——と呆れている様子だ。ごもつともです。コーヒーを一口飲み、頷いた。

「中途半端に関わったせいかもしれない」

「お前、真面目だよな」

壁にもたれながらしみじみ言う猪又に、俺と若林が声を合わせて言った。

「お前が言うな」

確かに、と猪又が笑い出した。

「最近、忙しそうだな」

ここ数日、捜査二課は連日のように慌ただしく動き回っていて、猪又はほとんど部屋にいることがない状態だったので気にはなっていた。

「今、抱えてる事件が厄介なんだ。まだ少しかかりそうだなー」

頭を掻きながら猪又は言う。以前よりずいぶんと落ち着いたように見える。

「お前だって、抱えてる事件あるだろ」

若林に突っ込まれてしまった。

「そうでした。早く終わらせなきゃ」

コーヒーを飲み干し、カップを置いた。俺と若林が席に向かう

とすると「片付いたら、また飲みに行こうな」と猪俣がニヤリと笑った。

「ああ、行こう。コーヒーご馳走さん」

溜まった書類に取り掛かろうとしていると、篠原と田村が部屋に入ってきた。席についた田村に、美山のことを聞いてみた。

「篠原警部、何だって？」

田村が、イスにもたれ掛かりながら「認めた」と短く答えた。

あまりの出来事に混乱して逃げた。信じられなくて逃げた。と証言したそうだ。

「――そっか」

普通は――そうだな。人が、しかも親友が恋人を刺す現場を見たら動揺するよな。

「これで、事件も進展――するかな」

手元を見つめながら呟いた。

「そうだな」

田村は、頬杖をつきながら答えた。

嫌なんだ——

いららない人間だと思い知らされるのは——

俺は父さんが大好きだった

一緒に暮らしたかった

一緒にいられれば——それだけでよかった

それは難しいことなのだろうか

それは望んではいけないことなのだろうか

父さん——どうして俺と一緒にいてくれないの？

どうして家に帰れって言うの？

どうして笑いかけてくれないの？

せっかく会いに行ったのに

せっかく会えたのに

会いたかったのに

俺は必要じゃないの？

俺はいらないの？

もう家族じゃないの？

もう——愛してはいないの？

じゃあどうして俺を生んだの？

捨てるくらいならどうして俺を生んだの？

どうして——愛することをやめたしまったの？

俺は——生きていいのだろうか

必要のない人間なのに——生きていていいの

どうやって——生きていけばいいんだ

必要とされていないのに

捨てられた人間なのに

学校にいるのがツライ

幸せな奴等と一緒にいるのが苦痛だった
俺だけが違う空間にいるようで——
胸がよじれるほどの苦痛でしかなかった

学校に、教室に入るのが——コワイ

みんなの俺を見る目がコワイ
異端者を見るような目で見ないで
わかっているから

俺がココに必要なのはわかっているから

だから

もう

お願いだから

そんな目で

見ないでほしい

生きているのが赦されないというのなら

誰か——俺を殺してくれ

「お前、なんか納得してない顔だな」

ジントニツクの入ったグラスを片手に田村に言った。

「——まあな」

田村は、頬杖をつきながら烏龍ハイの入ったグラスを見つめていた。

「何が気になるんだ？」

「——田崎は、気が付いたら美咲が倒れていた、と繰り返すばかりらしい」

グラスを見つめながら田村は言った。

「理性が吹っ飛んで、覚えてないのはよくあることじゃないか。現に、学生時代から似たようなことあったんだろ？」

「田崎が暴れだす『キツカケ』は、父親だ」

田村がサラリと言った。

「お前——まさか調べたのか?!」

俺が咎めるのも無視して、田村は言葉を続ける。

「田崎は、暴れている時以外の記憶は覚えているらしい。もちろん、暴れるに至る『キツカケ』も。なのに、今回は覚えていない。気づいたら、被害者が倒れていた。商店街の狂乱劇だって、『美咲を刺したから』っていうよりは、『美咲が血だらけで倒れているのを見たから』——それが、『キツカケ』だったんじゃないのか？」

何が言いたいんだ？

「——でも、美山は見てたんだろ？ 犯行を」

「ああ、ハッキリとな。細かな証言をして、警察に貢献しているよ」

田村はグラスを口元に運んだ。

「なんかトゲのある言い方だな。美山に、まだ何か気になることでもあるのか？」

「——お前はまだ気づいてないのか？ 美山は、俺たちが警官だとい

うことを知っていたんだぞ」

「だからそれは現場に——」

「そうだ。現場にいたんだ、俺たちが田崎をアパートに連れて行ったとき。犯行を見て逃げたはずの美山が。じゃあ、何しに現場に戻ったんだ？なぜそれを言わない？」

あっ——。

何てことだ。どうしてそのことに気づかなかったんだ。——俺は、美山の証言で事件が進展することしか考えていなかった。

逃げたはずの彼は、俺たちのことを知っていた。何故戻ってきたんだ？田崎や美咲のことが心配になって戻ったのか？田崎を自首させようと現場に戻ったのか？

——だったら、どうしてそれを証言しない？

混乱している俺に、田村が言った。

「本当に、田崎が美咲を刺したのか？」

「おいつ、何言い出すんだ！」

これだけ状況証拠も揃っているのに——。田村は、俺を一瞥し、話を続ける。

「所轄も苦勞してるみたいだな」

どんなに調べても、田崎が美咲を殺そうとする動機が見つからない。田崎の友人も美咲の友人も口を揃えて言うのは、二人は羨ましいくらい幸せそうだった、ということだ。

「血液検査で、当日、田崎は薬を飲んでいたことがわかっている。それなのに、我を忘れて暴れるだろうか？しかも記憶も一切ない」
確かに動機はわかっていない。田村の言うこともわかる。

「だが、田崎は証言してるじゃないか——自分がやった、と」

「そう思い込んでいるだけじゃないのか？学生の頃、何度も暴れていたんだ。田崎は混乱し、また自分が暴れて刺してしまった、と思っ
い込んだんじゃないのか？」

田村は俺をじつと見据えた。

「そんな・・・こと、有り得るのか？じゃあ誰が彼女を――」

そこまで言って、やっと田村の言おうとしていることがわかった。

「お前、美山が美咲を刺したと思ってるのか？」

美山の寂しげなあの後ろ姿を思い出す。だって美山は田崎の親友なんだろう？！

「田崎がやっていないのに、なぜ詳細な証言ができる？」

田村は、腕を組んだままカウンター前に並べてあるグラスを見据えた。

「でも、それはお前の推測でしかないだろう？！いくら過去にそういう経験があったとしても、目の前に彼女が血まみれで倒れていたとしても、自分がやったと思いつく――なんて乱暴すぎないか？」

「現に思い込んでるじゃないか」

「いい加減にしろ！」

思わずカウンターを叩きつけた。

田村は、ため息をつき「お前は、美山に肩入れしすぎだ」と言っ
て店から出ていった。

取り残された俺は、カウンターに頭を抱えて唸った。

「畜生！」

肩を抱き、こみ上げてくる家族や自分への憎悪という醜い感情を必死になって押さえつける。溢れ出てくるドロドロとしたモノを、自分の中に押し戻す。このまま狂い死んでしまいたいと思おう。もう嫌なんだ。こんな感情に囚われ続けるのは。

誰でもいい——俺を殺してくれ。ナカタモノにしてくれ。

「独りで苦しむなよっ」

顔を上げると、美山が泣きながら怒っていた。

なんで——怒ってるんだ？

——首を絞めたからか？

「お前が、一人で苦しむことないじゃないかっ」

溢れ出る涙を拭うこともせず、美山は俺に向かって叫んだ。

何故怒っているのかも、彼が誰なのかもわからない。訳がわからず茫然としていると、美山はつかつかと近づいてきた。

「田崎は父親が好きなんだろ？それなら、それでいいじゃないか」
引き込まれそうなほどの力強い目。あまりの真剣な眼差しに視線を逸らすことができない。それでも、何とか視線を逸らせ声を絞り出した。

「いいわけないだろ——いいわけないだろーが！」

愛されていないのに……。

「家族のことを愛して何が悪いんだよ！お前は悪くなんかない！」
美山は、こぶしを震わしながらこれ以上ないくらいの声で叫んだ。

コイツは——俺のために泣いているのか？

「人と人の繋がりがなんて簡単に切れやしない。ましてや家族なんて

——どんなに離れていたって、お前の父親であることに変わりはないだろ?! いいんだよ、愛してたって!!」

「お前に何がわかる!・・・父親に・・・みんなに・・・必要とされない人間、の何がわかるっていうんだ!」

握り締めた写真の残骸を、美山に向かって投げ捨てた。それが美山の顔に当たり、赤い血が滲み出た。

「あ・・・」

「俺はお前が必要だよ。俺はお前と友達になりたいと思ってる」
顔の傷を気にすることなく、美山が手を差し延べてきた。

嘘だ——嘘だ 嘘だ 嘘だ 嘘だ 嘘だ

そんなことあるはずがない! 美山の手を振り払い、後退る。

「やめろ!——やめてくれ、もう嫌なんだ」

裏切られるのは。

「裏切らない、絶対に——。俺はお前を裏切らない」

まっすぐに俺の目を見ながら、美山はもう一度手を差し伸べてきた。
た。

優しい声——こんな言葉を言ってくれた人は今までいなかった。

嘘、じゃないのか?

信じて——いいのか?

——もう傷つくのは嫌だ。

——でも、信じたい。

俺は、生きたい——生きていきたい。

どれくらいの時間が経っただろう。もしかしたら、ほんの数分しか経っていなかったかもしれない。でも、俺には——とても長い時間に見える。

「田村さんも、貴方だから御自分の考えを打ち明けたんじゃないでしょうか？」

顔を上げると、マスターがほほ笑んでいた。どういうことだ？

「人間は勝手ですからね。辻褄を合わせ、都合のいい解釈をしてしまうものです。だから田村さんは貴方に打ち明けた」

「——どうしてですか？」

マスターは、俺の前に水の入ったグラスを置いた。

「人は色々な意見を聞くことで、新たな道が見つかったりするものです。人との繋がりは可能性を広げることに繋がるんですよ。でも、人は臆病ですからね——それは簡単そうで難しい。意見がぶつかり合うことだってある。拒絶されたり、受け入れられなかったりもする。——でも、ぶつかり合ってお互いを理解し、より繋がりが深まるものでしょう？人は——」

マスターは、優しくほほ笑んだ。

田村は独自に事件について調べ、考えていた。俺は事件について詳しく知らない。それなのに、田村の考えを頭ごなしに否定してしまった。田村の考えだって、可能性の一つかもしれないのに。俺は、確かに美山に肩入れしていたかもしれない。

「マスター、ありがとう」

水を飲み干し、店を出る。確か——南警察署の機捜に警察学校で一緒だった竹下がいる。内ポケットから携帯を取り出し、電話をかける。

「竹下か？夜遅くすまん、望月だ。頼みがあるんだ。今から、そっち行っているか？」

竹下から了解をとり、彼の住む寮に向かった。玄関のインターホンを押すと、竹下がにこやかに出迎えてくれた。

「久しぶりだな、望月。どうした？」

「悪い、夜遅くに」

竹下は部屋の奥へ案内しながら、別にいいさと笑った。

「頼みがある。お前の署で捜査している田崎の事件を、詳しく教えてくれ」

テーブルに両手をついて頭を下げた。竹下は一瞬キョトンとしたが、次にはお腹を抱えて笑い出した。

「お前どうしたんだー！そんな改まって！腹、腹いてー」

「――ここは、笑うところじゃないと思うが」

笑い転げる竹下を見て、自分でもおかしくなってきた。

「だって、お前のキャラじゃねーもん。あーおかしい、お前変なひとすんなよな。俺を殺す気か？あつ、ビール飲むか？」

竹下は涙を拭いながら（お前の中の俺の認識はどうなってるんだ？！）キッチンに向かい、冷蔵庫からビールを取り出した。

「看護師傷害事件のことだよな」

ビールを渡しながら竹下は言った。

「ああ」

「そっか、望月たちが田崎を取り押さえたんだっけ？」

「ああ」

俺の向かいに座り、ビールを飲みながら竹下が話し出した。

「俺たちとは別の機捜班が、初動捜査をしたんだ。被害者は、腹部を一カ所刺されていて、まだ血は乾いていない状態だったそうだ。

凶器は、田崎が持っていた包丁。彼はその日、十四時四十分まで大学の講義に出ていた。家から大学までは、自転車で十分程だ。田崎が、望月たちに取り押さえられたのが十五時十分。田崎は、薬の服用もしていた。学校も普通に登校していて暴れることもなかったし、変わった様子もなかったらしい。概要は以上」

竹下は、そう言うときいた咽喉をビールで潤した。

「友人たちの証言は？」

「被害者の友人も田崎の大学の友人も、皆口を揃えて「信じられない」とそればかりだ。よっぽど仲が良かったんだな。ただ、中学、高校の友人に聞くとほとんどが「やっぱり」「納得」って感じだったな」

竹下が、頭を掻きながらため息をついた。

「かなり荒れてたらしいな」

「ああ、家族でさえ——母親と妹がいるんだが、ひどく怯えているんだ」

「家族も？——父親は？」

「田崎が十二歳の時に両親は離婚している。父親っ子らしくてな、離婚が原因で暴れるようになったらしい。包丁振り回して母親に切り付けたり、妹の首を絞めたり、家に火をつけようとしたり——かなり危険な状態だったみたいだ」

『キツカケ』は父親——田村の言葉が頭に過ぎった。田崎にとって、父親の存在はかなり大きかったようだ。

「父親は今、何をしているんだ？」

「S県に住んでいるよ。結婚もしているらしい」

「そうか——美山は？」

「お前詳しいな。中学からの親友だ。田崎が落ち着いたのも、美山の存在が大きかったようだな。今回も、美山の証言のお陰で田崎も少し落ち着いたし、毎日のように病院にも通っているみたいだよ、彼」

「そうか」

美山——は田崎のことをどう思っているんだろう？

「そんなに荒れている田崎に、どうして美山は近付いたんだ？」

飲みかけていたビールをテーブルに置き、竹下は顎をなぞった。

「クラス委員長だったみたいだな。熱心に家に通ってたそうだ」

俺が考え込んでいると、竹下が声のトーンを落として言った。

「被害者さ、一時危篤状態に陥って心停止したんだ。なんとか、も

ち直したけどな。刑事課も気が気じゃないみたいだ」

「そうか——もち直したか。よかった」

本当に、よかった。ほっとして胸を撫で下ろす。

「なあ、望月。彼女とうまくいつてるか？」

竹下の唐突な質問に、飲んでいたビールを吹き出しそうになった。

「汚ねっ！お前部屋を汚すなよ」

「吹き出してねーよ！お前が変なこと言うからだろ！」

口元を拭っていると、竹下がニヤニヤしている。

「その様子だと別れたなー！愉快、愉快」

竹下は、楽しげにビールを飲み干した。

「人の不幸を笑うなっつーの。お前はどんなんだよ」

「痛いこと聞くなよ——だから愉快だって言ってるんだろ」

口をへの字にして肩をすくめた。

「なんだよ、お前もじゃねーか」

苦笑しながら、ビールを飲み干す。

「だって警察学校時代、お前付き合い悪かったもんな」

竹下は冷蔵庫から新たにビールを取り出し、口を尖らせながら言った。

「まあ、若かったし、彼女と付き合い出したばかりだったしな」
頭を掻きながら、照れ隠しに受け取ったビールを煽^{あお}った。

「今は、気になる女いないのか？」

竹下の言葉に、里見が頭に浮かんだ。

「いないよ、忙しくてそれどころじゃないしな。お前はどんなんだよ？」

真顔で、ナツシングだ！と言われて吹き出してしまった。

「機捜なんてガタイのいいオヤジしかいねーからな。そこで、恋が芽生えてもコワイよ」

顔をしかめながらビールを飲む竹下に、応援するぞ！と言ったらクッションが飛んできた。

「シャレになんねー」

二人で笑い合った。笑うしかないではないか。

「県警も大変そうだな」

「所轄ほどではないさ」

「まあな——でも、どこも一緒さ」

「そうだな——どこも一緒だ。」

「竹下、ありがとな。また、飲みに行こうな」

立ち上がり、玄関に向かいながら竹下に礼を言った。

「たいした事してないさ、飲みに行くの楽しみにしてるよ」

外に出ると、ビールでほてった頬に風が当たって気持ちが良かった。歩きながら、事件のことを考える。田崎が犯人なら、家に帰ってすぐ犯行に及んだことになるよな。何が原因で？ しかも、記憶に残らないくらいの『衝撃』って何だ？——『衝撃』か。

美咲と美山の逢引の現場——はどうだ？ 信賴していた恋人と親友の裏切り。これほど田崎にとって衝撃的なことはないだろう。俺、冴えてるぞ。ん？——ダメだ。田崎の部屋で二人が会う意味がない。

じゃあ、美咲が美山に乗り換える、と田崎に別れを告げるってのはどうだ？ これ、よくないか？——衝撃だが、それで包丁で刺すか？ しかも美咲だけ。自分にとって大切な二人。傷つきはするが——傷つけるだろうか？

「あーもう、さっぱりだ！ っていうか、一人で考えると延々ループだっつーの！」

ため息をつき、近くの公園の花壇の脇に腰掛ける。

田村も、ループしながら考えたんだろうか。

差し出した手に、田崎がおそろおそろ手を重ねた。

俺の手の平に、田崎の温もりが伝わってくる。俺は、何か神聖な儀式を行っているかのように思えて胸が熱くなった。目頭が熱くなるのを感じながら、俺は田崎の手を強く握り返した。

「俺、美山洋一。これから、よろしくな」

田崎は、困ったような顔をして頷いてから「ごめん」と小さな掠れた声で謝った。一瞬何を謝っているか解らなかったが、首を絞めたことだと気がついた。

「え？ ああ、いいよ。気にしてないから」

「でも・・・血が」

「え？ あ、そっちかよ。これも大丈夫だよ」

頬の傷を手で擦った。血は乾いているらしく、僅かの血も手についてはいなかった。

「あっ！ 首も・・・絞めてごめん」

田崎が、顔を歪めながら頭を下げた。

「だから、大丈夫だよ。こんなの平気。俺のほうこそ田崎に謝らなきゃいけないんだ。お前のこと勝手に思い込みで怖がってたんだ、俺。——ごめん」

「暴れて、恫喝して、怪我までさせて。怖がるのは当然だ。お前が謝ることなんてない」

俺が謝るのを制するように田崎は、強い口調で言った。違うよ、と俺は言う。

「分かり合おうともせずに、思い込みで人を決め付けるのは最低だよ。馬鹿だよ。俺は、馬鹿だったんだ。お前はずっと苦しんでいたの。でも——もう独りじゃない、俺がいるよ」

その言葉に田崎は目を見開いて驚いた。そして、急に顔をくしゃ

くしゃにして子供のように声を上げて泣き出した。まるで、今まで心の奥に溜めていたものをすべて吐き出すかのように。

突然、田崎が泣き出したのでびっくりした。けれどすぐに、何かから開放されたかのように、声を上げて泣く田崎を見てほっとした。そして、田崎に笑いかけた。

「一緒に行こう。これからどんな苦しいことがあっても、一緒に乗り越えていこう。二人だったら怖くないさ。もう独りで苦しまなくていいんだ」

そう言うと、一層激しく田崎は泣いた。

泣き疲れて眠ってしまうまで、ずっと――――。

episode 16—19 イツワリの関係 (現在)

俺の彼女と田村ができていたら、俺はどうする？

———ムカつくっ！

いやいや違う違う。もう一度、考え直そう。

田崎は、父親と一緒にいられなくて情緒不安定になったんだ。それを支えたのが美山だ。そして、美咲だ。友人の話でも、田崎と美咲は本当に仲がよかったという。そんな彼女が、美山と恋に落ちるだろうか。

———ナッスイングだ。

美山は、田崎が美咲を刺したところを見たと言言している。美咲と美山が、できていないとすれば田崎にどんな衝撃があったんだ？
数分の間に———。

部屋に美咲が血まみれで倒れていたとしたら。

———田崎の衝撃を想像するのは、難^{かた}くない。

美山の証言は——嘘だったのか。どうして、親友を裏切った。田崎にとって美山は支えだったが、美山にとって田崎は何だったんだ？なぜ美咲を刺した？足元を見つめながら、美山のことを考えた。打算だけで、荒れ狂う田崎と付き合い続けることができるだろうか。八年も——。美山にとって、田崎はどんな存在だったんだろう。

机に突っ伏している俺を見て、田村は驚いてドアの前で立ち止まった。

「おーそーいー！田村ー」

結局、昨日は県警に泊まった。田村がいるかと思ひ来てみたら、当番の強行犯捜査二係の山形たちしかいなかった。「仕事熱心だな」と苦笑され、三人で夜を明かしたのだ。コーヒーを死ぬほど堪能し

たさ。

若林も出勤してきて「お前ここ好きだなあ」と呆れている。違う、すべて田村のせいです。だが反論する気力もなく、田村を廊下に連れ出した。

「俺も行き着いた考えがある——被害者を刺したのは、美山だ」
田村はいつもの無表情で、壁にもたれかかりながら俺の話聞いていた。

「——てことだ。以上」

ネクタイを緩めながら、田村の隣の壁にもたれかかった。

「——で、どうするつもりだ？」

「どうするかねえ、証拠も何もない。推測にしても、強引すぎる。真実は、やっぱり田崎が刺したのかもしれない。美山本人に直接ぶつけるしかないんじゃないか？免職覚悟でな——」

俺たちがそこまでする必要があるのか。このまま田崎を逮捕しても、裁判で心神喪失状態が認められるのは確実だ。

でも——もし本当に田崎が無実なら？

あまりに残酷ではないか？親友に裏切られ、恋人を傷つけられ、その犯人に仕立て上げられた。もしかしたら、恋人はこのまま意識が戻らないかもしれない。亡くなってしまいかもしれない。そうすれば、恋人を殺したとして殺人者という烙印を押される。——彼はこれから先、その絶望の中で生きて行かなければならない。死ぬまで一生——。

俺はそれを赦せるのか？

「俺は、美山が赦せない。親友だと偽^{いつわ}って田崎のそばにいたことが一番赦せない。田崎にとって、美山は掛^{かけ}替えのない友人で支えだったはずだ。それを利用した美山は——赦せない。赦しちゃいけない。そんなことは絶対」

田村を真直ぐ見据えながら、怒りに震える声で俺は言った。

「なら行きなさい」

急に声をかけられ、驚いて声のした方を振り向くと、藤堂が立っていた。田村も驚いている様子だ。いつからいたんだ？

「あの・・・」

藤堂は、普段見せない真剣な眼差しで言った。

「少しでも疑問に思うことがあるなら行きなさい。後悔をしないように――冤罪は最も忌むべき大罪だ」

藤堂の言葉に決心がついた。俺たちは頷くと、地下駐車場へ向かった。このまま後悔を抱き続けるなら、今、動こう。俺たちは車を走らせる。

美山のもとへ。

「美山さん」

俺の呼び掛けに、ベンチに座った美山は振り向くときこちない笑顔を浮かべた。

「あ、刑事さん」

俺たちが美山の方へ歩み寄って行くと「どうかしたんですか？」と心配そうに聞いてきた。

「少しお聞きしたいことがあって来ました」

ここは、被害者のいる病院の中庭。美山は、その中庭にあるベンチに腰掛けて書店名の入ったカバーをかけた本を読んでいた。まだ、新しい本だ。

「聞きたいことって何ですか？」

「――貴方が現場に戻った理由です」

俺が美山に質問している間、田村はじつと美山の顔を見据えていた。

「え？」

美山の頬がぴくりと動いた。

「貴方、現場にもう一度戻りましたよね？」

美山は、頬を微かに上気させながら叫んだ。

「行ってません！お、俺は、学が美咲を刺すのを見て怖くなって逃げました。その後は刑事さんたちに会ったあの時しか、学の家には行ってません」

肩で息をしながら、俺たちを美山は睨んだ。

「落ち着いて下さい。別に、貴方が怪しいなんて言っていないですよ。それに貴方の証言のお陰で田崎の犯行が立証されたんですから、私たちは貴方に感謝しているくらいです」

その言葉に、美山の表情が見る見る曇っていった。

「す、すみません。急にそんなこと言われてびっくりしてしまっ——それに、俺は別に感謝されるようなことは、してませんから」
声のトーンを落としながら、美山は伏し目がちに言った。

「そんなことはないです。貴方のお陰で、犯罪者を捕まえることができましたんですから」

犯罪者という言葉のところで美山は一瞬肩をびくりとさせた。そのまま美山は顔を上げない。

「でも——学の精神状態じゃ、実刑は——無理ですよ」

「実刑は無理でも社会が彼を裁きます。そして、彼自身が自分で自分を裁くでしょう——一生かけて」

「——一生、かけて」

美山は、ゆっくり顔を上げて力ない目で俺を見た。始めてあったときの、あの凜とした涼やかな目とは違って闇い光を帯びた目だった。

「そうです、一生です。生きている限り、彼は愛した恋人を手にかけた贖罪の念に苦しむでしょう」

美山の口元が動いた——が、声にならなかったのも何を言ったかは分からない。額にはうっすらと脂汗が浮かんでいる。

「——貴方は、何故現場に戻ったんですか？」

「何を——さっきも言ったように俺は現場に戻ってません！」

「でも貴方はあの時、俺たちが警官であることを知っていた。俺た

ちは、この事件を担当していません——では、いつ知ったんですか？」

「それは……」

言葉を詰まらせた。

「俺たちが田崎をアパートに連れいて行った時——ですよ」

美山は何も答えない。ただ微かに唇が震えていた。

「どうして現場に戻ったんですか？」

もう一度質問をしても、美山は唇を噛みながら顔を歪めただけだった。『田崎を自首させるために戻った』と聞きたかった。

「——田崎はよっぽど衝撃を受けたんでしょうね。知ってますよね、犯行時の記憶がないんですよ。記憶をなくすほどの『衝撃』って何だったんでしょうね。そのせいで彼は、恋人を刺してしまったんですから。美山さん、何か思い当たることはありませんか？」

美山は、口を固く閉ざし何も答えない。

「——貴方は、美咲さんのことをどう思っていましたか？」

美山の眉がびくんと動く。

「どうって……別に、親友の恋人としか……」

かすれた声で、弱々しく答えた。

「私たちは、貴方と美咲さんが愛し合うようになり、田崎に別れを切り出したことが原因ではないか、と考えました。親友と恋人の裏切り、田崎には十分過ぎる程の『衝撃』ではないでしょうか？ 貴方は現場にいた。田崎が部屋から飛び出した後も。パトカーのサイレンで部屋から逃げた。だから私たちが警官だということもわかった」

「失礼なことを言うな！ そんなことは絶対ない！」

美山は、怒りを露^{あらわ}にして言った。それを無視するように言葉を続けた。

「ええ、違いました。美咲さんは、田崎を裏切るようなことはしない。だとすると、田崎の『衝撃』とはどんなものか——。それは、『部屋に美咲さんが刺されて倒れていた』ことです」

美山が、愕然とした顔で俺たちを見た。

episode 16—20 ともに生きる (八年前)

そこからが大変だった。

眠ってしまった田崎をベッドで寝かせ、ちょうど帰宅した母親と妹と一緒に、滅茶苦茶になった家の掃除をした。田崎の母親に送られて家に帰ったのは、九時を回っていた。

学校へも、最初は怖がってなかなか来たがらなかった。

佐々木に頼み俺の隣の席を田崎にしてもらい、少しずつ学校に慣れるようにしていった。真山も、小学校時代に田崎と仲が良かったらしく一緒に登校してくれたり、色々と協力してくれた。

真山は畑山と付き合うことにはならなかったが、本を読むのが好きになっていた。「お前のおかげで、現国の成績が上がったから手伝ってやる」と照れくさそうに言っていたが、真山も田崎のことが気になっていたのかもしれない。

その甲斐あって、三年になる頃には学校にも通えるようになっていた。

時々、嫌な記憶が甦って学校や家で暴れることもあった。

でも、もう独りになんてさせない。

独りで苦しませたりはしない。

田崎と出会って、俺はいつの間にか生きていることが虚しいと思わなくなった。心から信じあえる友達を見つけたからかもしれない。

———そうだいい、と思った。

「洋一、これ何て読むんだ？」

現国の教科書を手にも、学が頭を搔きながら聞いてきた。あと一ヶ月で、高校入試だ。学校を休みがちな学に、彼の家で泊まり込みの勉強会を開いている。

「これは、バラ。ちなみに読めるが書けん」

読めるだけすげえよ、と学は笑う。少しずつ学は、笑うようになった。それがうれしい。

今まで苦しんだ分、幸せになって欲しい。俺は、ヘッセの『春の嵐』の言葉を思い出す。

「人は自分だけのために生きるより、他人のために生きる場合のほうが、満足が大きい」

俺は、学が幸せになるように支えになりたい。それは、俺の幸せにも繋がっていると思うから。

「一緒の高校、行こうな」

「ああ」

教科書から顔を上げ、学は嬉しそうに笑った。

一緒に生きていこう。これからも——ずっと。

俺は、学の一番でいたかった

今までも、これから先も——ずっと

始めは、クラス委員長としての義務感から学の家に通った

でも——アイツは苦しんでたんだ

暴れたくて暴れていたわけじゃない

でも、居場所がなくて、自分が生きている意味が分からなくて、苦しんでいたんだ

少しずつ学が心を開いてくれて一緒に過ごすようになって、俺だって学に支えられていた

初めて親友と呼べる友人ができたことが嬉しかった

だから——美咲が現われて不安になった

美咲に出会って学は前よりも落ち着いていき、たくさんの友人ができた

学にとっていい事だし、俺も喜んだ

でも——俺は独り、取り残された感じがしていた
学には俺はもう必要ないのか？

寂しかったんだ

だから、学の信頼を一心に受ける美咲を妬み、憎んだ
お前さえいなければ、と

でも、いつからだろう

それが好意に変わったのは——

いつから、彼女を目で追うようになったんだろう

好きで堪らなくなった

自分のものにしたいと思った

一緒にいたいと思った

どれだけ眠れない日々を過ごしただろうか

学のことを思うと胸が痛み、美咲への想いを押さえ込もうとした
一緒にいるのが辛くて、美咲を避けるようになった

でも、避ければ避けるほど強く彼女のことを想ってしまう
会いたい、彼女に会いたい

だから――あの日、学の家に行ったんだ

気持ちを伝えるために

「好きなんだ」

そう言った時の、美咲の顔は今でも覚えている

「洋一くん、自分が何を言ってるかわかってるの？」

「わかってるさ、俺は美咲が好きなんだ」

美咲の目をじっと見据えた。彼女は、俺が本気で言っているとわ
かると目を逸らした。

「――ごめん、私には学がいる。だから、このことはなかった事に
しましょう。学が傷つく」

――なかった事にする？学が傷つく？

なら、俺は？

俺は傷ついてもいいのか？！

気が付いたら、美咲が倒れていた。手には、血の付いた包丁を握り
締めている。

足元から這い上がってくる恐怖に体が震えた。

そんな、どうして――！？

どうして――こんなことに

包丁を投げ捨て、頭を抱えた。

学だ――すべて学が悪いんだ

俺はただ――ただ、また前みないに――

「……何が……言いたいんですか？俺が……やったとでも言うんですか？」

美山は、震える声で言った。中庭には、俺たちしか今はいない。鳥のさえずりがあちこちで聞こえる病院の憩いの場で、なんて哀しい話をしているのか——。

俺たちは、美山を見つめた。彼にとって——田崎はどんな存在だったのか。

「……刑事さん。し、証拠は……あるんですか。俺が、美咲を刺したっていう、証拠は」

美山が、震えを止めるように固く手を握り、食い入るように俺たちを見つめた。

「ありません」

俺がそう言うと、美山の顔中の筋肉が緩んだ。

「……証拠もないのに、こんな事していいんですか？訴えますよ」

美山が、唇の端を歪め勝ち誇ったように言い放った。

「どうぞ、ご勝手に。俺たちはその覚悟でここに来ている。どうしても、君のしたことが赦せなくてね」

「だから違うと……」

「君にとって田崎学とはどんな存在だったんだ？」

初めて田村が口を開いた。

「え……」

美山が困惑した顔になった。

「一つ約束してほしい。もし君が、田崎さんのことを利用したのなら——二度と彼に近付かないで欲しい。親友だと偽って近付くのはやめてほしい。これ以上、彼を苦しめるのはやめてほしい」

俺の言葉に、美山の顔が見る見る醜く崩れていった。

「やめろ！——どいつもこいつも皆、学、学って。——俺だって、傷ついたんだ！俺だって、学のこと一番大切だったんだ！大切な親友なんだ！俺が傷つけたみたいと言うな！！俺は・・・ただ、前みたい・・・」

美山は、その場に両膝をついて拳を地面に何度も、何度も振り下ろした。

「君は今まで大切に築いてきたものを——自分の手で壊したんだ」
涙で濡らした顔を上げ、悔しそうに唇を噛んだ。

「俺は・・・どうして・・・どうして、こんなことに」
声を押し殺しながら、美山は何度も呟いた。

「君はもっと自分に自信を持ってよかったんだ。田崎さんにとって、美咲さんも君も掛替えのない大切な人間だったのだから」

美山は、頭を抱えながら震える声で呟いた。

「俺は、ただ、前みたい・・・学が一番で・・・いたかった、だけなんだ」

美山の落とした本を拾い上げると、カバーが外れて本の表紙が露あらわになった。表紙には『若きウエルテルの悩み』と書かれている。
美山に渡すと、恥ずかしそうに本を受け取った。

「昔は、ウエルテルのこと嫌いだったんです。馬鹿なヤツだと思ってました。思い込みは、ほんと最低ですね。俺が馬鹿だった。ウエルテルは、俺だったんです。でも——俺は、愛する人を刺してしまった。——最低です」

「——君にとってのロツテは、田崎君だったんだ」

田村の言葉に、美山は一瞬キョトンとした。それから「ああ、そういうことか」と言っておかしそうに笑った。目からは涙が幾筋も流れていた。

美山を南警察署に連行し、田崎が釈放されるのを俺たちは待った。

程なくして田崎が、廊下の向こうから出てきた。最初に彼を見たときより、ずいぶんとやつれていた。

田崎は、なぜ自分が釈放されたのかを理解できていなかった。美山が逮捕されたことを伝えたと、顔を強張らせ声を震わて美山の無実を訴えた。

「洋一がそんな事するはずがない！アイツはそんな人間じゃないんだ！優しいヤツなんだ！何かの間違いだ！アイツは……俺たちは親友なんだ……そんな……そんな事あるはずが……ない」俺たちが何も言えないでいると、田崎は肩を落としたような垂れた。

「……父さんが好きだった。父さんと一緒に暮らしたかった。でも、あの人はもう別の家族がいたんだ。……生きていくことが地獄だった。でも、洋一は……アイツだけは、俺を認めてくれたんだ。一緒にそばにいてくれたんだ。一緒に泣いてくれたんだ。俺は、洋一がいたから生きてこれたんだ。これから俺はどうやって……生きていけばいいんですか？」

涙に濡れた田崎の目は、救いを求めるように俺たちを見つめた。

「人間なんて皆、孤独だ。お前だけじゃないさ。でも、いろいろな人間なんていやしない。自分の存在理由は、自分で見つけるしかない——今までだって、自分で見つけたじゃないか」

田村が、相変わらずの無表情で田崎に言った。でもその声は、とても慈悲深く、愛情に溢れたものに聞こえた。

「でも……」

「君は、救いを求めている誰かを助けることができるんだ……美咲さんや美山さんが君を救ったように」

「……俺が」

「そう、側にいてあげるだけでもその人にとって救いになる……君だってそうだったろう？」

田崎は涙を拭い、頷いた。目には、今までにない強い光が宿っていた。

「待ちます、洋一を……。アイツを苦しめたのは、俺だから。ア

イツが俺を支えてくれたように、今度は俺がアイツの支えになります」

「望月——っ！」

竹下が息を切らしながら、階段から下りてきた。

「よかった、まだいた。彼女が、意識を取り戻したぞ！」と言って親指を立てた。

田崎の顔が見る見る崩れ、目からは大粒の涙が溢れ出てきた。

「・・・美咲・・・」

「病院まで送ろう」

竹下に礼を言って、田崎を連れて病院へ車を発進させた。

美咲が意識を取り戻したことは、美山にも伝えられた。涙を流しながら「よかった・・・」と呟いたそうだ。彼は、毎日不安な日々を送っていた。美咲が意識を取り戻せば、自分の犯行が知られてしまう。でも・・・意識を取り戻して欲しい。助かって欲しい。毎日、祈る気持ちで病院に通っていたそうだ。

病室に入ると、彼女は、田崎を見て幾筋もの涙を流して微笑んだ。「よかった・・・また学に会えて・・・よかった。また・・・学と、一緒にいられる」

田崎がベッドに駆け寄ると、美咲が「洋一くんを責めないで」と言った。自分が、彼が傷つくことを考えずにひどいことを言ってしまったから、彼女は申し訳なさそうにそう言った。

田崎は頷きながら、美咲を抱きしめた。

episode 16—23 オレンジの世界（現在）

県警に戻ると、篠原に手招きをされた。笑顔が怖いですよ。

「バカもん！管轄外の事件に首突っ込みやがって」

低く押さえた声で静かに怒られた。迫力ありすぎて怖い――。

「――今回は藤さんに免じてこれだけで済むが、次は始末書させるからな」

所轄の南署に、藤堂が根回しをしていていた。なんて素敵な先輩なんだ。

「藤堂さん、いつもと違いましたね」

田村が篠原に言うのと、篠原は曖昧に答えるだけだった。確かに――いつもと違っていた。でも、篠原もあまり言いたくないようだし聞かないほうがいいんだろう。

席に着くと若林が、スツキリしたか？と聞いてきた。

「はい、お陰様で」

若林が、そうかそうかそれはよかった、と言って大量の書類を渡してきた。

「君たちの仕事が、俺たちにゼーんぶ！回ってきたんだよね。これ、完成してるやつね。あ、気にしないで！全然、全く、気にしてるから」

爽やかな笑顔で、後輩に恩を着せないで下さい。

「あはは・・・若さん、ほんと篠原警部に似てきましたね」

小声で言ったのに、篠原が「何か言ったか」と離れた席から言うてきた。

地獄耳――。

「じゃあ、今度飲みに行きましょう。南署の友達にも、集^{たか}られてるので一緒に済ませます」

あの後、竹下から電話があり、手柄を持っていったんだから奢れと言われていたのだ。

「修平の友達？ほお、色々聞き出さなきゃな」

若林が嬉しそうに言った。

「まずい——」。

「やっぱり別で行きましょう！美味しいところ探しときますね」

「ううん、一緒がいい。一緒じゃなきゃいやだ」

しまったー！竹下に口止めをしなければ。どんな生き地獄が待っているかを想像し、身震いをする。脱力しながら部屋を出てトイレに向かった。

はあ——二人に酒飲ませて、早めに潰してしまおう。

ふと前を見ると、廊下の窓の前に藤堂が立っていた。

「藤堂さん、今日はありがとうございます」

はっとして振り向いた藤堂は、力なく笑った。

「気にしないでいいよ——冤罪だけは、何よりも赦されないことだからね」

そう言うのと、避けるようにして行ってしまった。あの人は——何かを抱えて生きているのだろうか。もしかしたら篠原や間宮が、支えになっているのかもしれない。だったら——俺は何も言わないほうがいい。そんな気がする。

人の気配がして、後ろを振り向くと田村が立っていた。

「おう、お疲れ。今日行くか？」

「行こう」

ふと気になって、田村に聞いてみた。

「ところで、ウェルテルって何？」

「本だ」

「馬鹿にしてるのか、本はわかるよ。どんな内容なんだ？」

「『若きウェルテルの悩み』主人公のウェルテルが、人妻ロッテに叶わぬ恋をして自殺する話」

「そっか……。だから、自分のことウェルテルって言ったのか。……でもお前は、ロッテは田崎だって……」

「美山にとって、一番大切だったのは田崎なんだよ。恋心を抱いた

彼女よりもな」

「……性別関係なく人として、ってことか」

「そう。掛替えのない大切な親友だったんだよ」

大切な親友か。もしかしたら、美山は田崎の恋人だったから美咲のことが好きになったのかもしれない。いや、解らない。それは美山本人すら、解らないことかもしれない。

急に廊下がオレンジ色に染まった。驚いて窓の外を見ると、巨大な夕日が世界を鮮やかなオレンジ色に染めていた。あまりにも、鮮やかなオレンジ色だったので目を見張ってしまった。

田村も、窓の外のオレンジの世界を見つめていた。

「お前が何か悪いことしたら——俺も自首をすすめてやるよ」

田村の言葉を聞いて、なんだかおかしくなった。

「しねーよ！縁起でもないこと言うな」

「お前が言ったんだろ」

「ところで、お前はなんで『若きウェルテルの悩み』を知ってるんだ？読んだのか？ひひ」

「さあな」

オレンジに染まった街を見下ろす。

せめて——この温かい色で世界が染まっている間は、犯罪は起こらないで欲しい。

誰もが幸せに暮らせるように——祈りたい。

episode 16—23 オレンジの世界 (現在) (後書き)

なんとか終わらせることができました。

全20話予定が23話になってしまいました。

この話は最初、違う終わり方をしていました。

書き終わった後、彼らのことが書きたくなり、番外編として彼らの出会いの話を書きました。そしたら、なんだか悲しくなってしまうて、色々悩んだ末このような形になりました。

でも、これでよかったと思っています。

思春期の、純粹で脆く壊れやすい部分がうまく書けたか解らないけれど、楽しんでいただければ幸いです。

読んでくれてありがとうございます。

感想、評価をいただけると嬉しいです。

せつかくの休みなのに、結局予定を入れることができなかった。一人きりの休みなんて久しぶりだ。まあ、一人っていうのもたまにはいいか――。

目的もなくブラブラとウィンドウショッピングをしながら歩いていると、数人の若者が一人の小柄な女の子を囲んでいた。

ショートヘアの似合う、目鼻立ちの整った目を見張るような美少女だった。小柄な体をより小さく縮めて、今にも泣きそうな顔をしている。

イヤだねー、そんなガツガツしてるから君たちモテないのよ？ 苦笑しつつ、スツとその場に向かい美少女に声を掛けた。

「こんなところにいたのか、探したじゃないか。ごめんねー、連れなんだこの子」

突然現れた若林に、戸惑っている美少女の手を引いて立ち去ろうとしたが、若者の一人に肩を掴まれた。

「おっさん、邪魔すんなよ！」

間髪を入れず、肩を掴んでいる手を捻り上げ仲間たちの方へ体を思い切り突き飛ばした。彼の体に当たって仲間たちが怯んだその隙に「逃げるぞ！」と美少女の手を引いて走った。後ろから彼らの怒声が聞こえるが、無視して走る。

警察手帳ないし、面倒も好きじゃないから逃げるが勝ちってね。

映画のワンシーンのような逃避行を頭に浮かべながら、彼女の手を引いて街中を走った。

「もう大丈夫」

かなり離れた場所まで来てからそう言うと、白い頬を上気させ、息を切らしながら美少女は礼を言った。

「あ、ありがとうございます！」

頭を下げて礼を言うその子の声は——紛れもなく男のものだった。

「え？」

固まって動けないでいる若林に、少年は照れくさそうに笑った。

「——君、男の子？」

「はい。僕、ミズシマトオルっています。本当にありがとうございます。いました」

そんなバカな！俺が、男と女を間違えるなんて——。三十二年生きてきて、こんなに衝撃を受けたのは始めてだ。

「い、いいんだよ……気にしないで。俺、人助けが趣味なんだ……あはは、じゃあ気をつけてね」

頭の中が混乱して、彼を残してフラフラと歩き出した。早くこの場を立ち去りたい。ありえない……。視力が落ちたのかもしれない。忙しかったから、仕事で疲れてるのかもしれない。きっとそうだ。俺は、疲れているんだ。

おそろおそろ振り返ると、既に少年の姿はなかった。

しかし、まあ——可愛らしい顔してる子だったな。あれじゃあ、絡まれるのもしようがないよな。

——ん？ いやいや、違う違う！ 男の子にしては可愛らしい顔ってことだ。

いきなり立ち止まり、頭を抱えて勢いよく振ったので隣を歩いていた女性が一瞬体をビクリとさせジロリと睨んできた。

自分の新しい発見なんて絶対違うぞ。ないない、絶対ない。俺は女の子が大好きなんだから。

はあ——。今日は、もう帰ろ。

仕事してりゃよかった——。

なぜ俺は、こんなところにいるんだ。

右も左も鬱蒼とした森の中、こんな死にそうになりながら。

それは、今週に入ってすぐのことだった。

「秘境の温泉に行ってみたいな」

という篠原の呟きから始まった。

そこにちようどいた猪又が、止せばいいのに大学時代ワンデル部だったと言ったものだから大変だ。

「よし、じゃあ、行くか！」

篠原は、すぐさま秘湯行きを決め、猪又と話し合い始めた。

勝手に行ってきたください、と報告書を書きながら他人の振りをしていた。俺には関係のないことだ。静かになるし、いいことじゃないか、そう思っていた。

「行くぞー、望月！」

篠原が、当たり前のように声をかけてくる。何故、名指しで俺なんだ。

「なんで俺もなんですか?! イヤですよ、遠慮します!」

全身全霊を込めて拒否した。俺の行きたくないオーラが伝わったのか、篠原はニツコリと笑って頷いた。

「上司命令です」

まったく伝わってないーっ。誰だーっ! この人を管理職なんかにしたのはー! 出てきて謝れー!

しかも今日は、藤堂がいないので誰も篠原を止めることができない。暴走する暴君は、俺の方を見て意地悪そうにニヤリと笑った。ちくしょう、こんな上司嫌だー。

「田村、お前も来いよ」

額に手を当て、田村に向かって言うと言澄まし顔で「イヤだ」と言

われた。

「なんでだよ！俺たちコンビだろー」

「関係ないね」

コイツ！目すら合わせねえ。くそう、なんてヤツだ！

「若さーん！」

向かいの若林のほうを振り向くと、若林はペンを持ったまま寝たフリをしている。

ヒドイーッ！

篠原と猪又が、いつの間にか俺の後ろに立ち、肩を掴んで「行こうな」と有無を言わせず決定してしまった。誰だよ、この人に『秘湯100選』なんて本渡したの！

——俺だ。しかも大分前に、渡したのではなく、奪われたのだ。「じゃあ、週末行こうな。望月喜べー。土曜日休みにしてやるぞ」

これっぽっちも嬉しくないです。貴方たちのお守りをするぐらいなら、仕事していたほうがいいです——。言っても無駄だから、言わないけど。ため息をつき、土曜日が雨になることを心から願った。

当日は、俺の思いとは裏腹に清々しいくらい晴れやかな天気になった。

まあ、この天気は想定内だった——。

でも、このメンバーは想定外だったよ——。

「うおーっ！」

溜まったストレスを吐き出すように、山に向かって叫んだ。かなりの声量を出して叫んだのに、ちっともスッキリしない。むしろ、重苦しい気分で一杯だ。

「望月、気合い入ってるな」

間宮が、俺の背中をバンバン叩いて豪快に笑った。何故、彼がここににいるのか誰か教えて。

「おーい、登山道はこっちだぞー」

篠原と猪又が、手招きをして俺たちに呼び掛けた。この先起こる

ことが、だいたい頭に浮かぶ。きつと——過酷な山登りになる。

案の定、一番に根を上げたのは——俺だった。

三人はそんな俺を気にせず、すたすたと前を歩いていく。なんてフットワークの軽い人たちなんだ。猪又はともかく篠原たちは四十代なのに——。ヘタレな自分に悲しくなりつつ、歩く足を止めた。「すみません、少し休憩しましょう」

荒い呼吸で三人に声をかけ、近くにあった石に腰かけた。

「大丈夫か？ お前若いのに、足腰弱いなあ」

間宮がそう言いながら、俺のほうに寄ってきた。篠原と猪又も近くの石に腰かけ、水を飲みだした。道が狭く、デコボコしているので足にかなり負担がかかる。しかも、片側が崖になっているので、気をつけないと足を滑らせ転落してしまう恐れがあった。体力のみならず、集中力もかなり必要な登山道だった。

「あと、どれくらいですか？」

水を飲み、少し呼吸が整ってきたところで篠原に聞いた。

「あと、一キロも歩けば山小屋につくぞ」

あと一キロか。それなら、頑張れそうだ。大きく深呼吸をし、立ち上がる。今度は、猪又が最後尾になり、再び俺たちは歩き出した。「大丈夫か？」

猪又が心配になったのか声をかけてきた。俺を誘ったことに、責任を感じているようだ。すべて篠原の責任なのだから、気にしないでいいのに——。

「大丈夫。休憩もしたし、あと一キロなら問題ないさ」

後ろを振り返り、親指を立てた。

「こんにちは」

篠原の声で前を向くと、男性の登山客が一人降りてきた。俺たちは、崖側に寄り男性とすれ違う。

「こんにちは」

にこやかに男性も挨拶をした。

「こんにちは」

山では、知らない人でも挨拶をするのが普通だ。山で何かあったとき、見ず知らずの人でも協力し合い、助け合うという一体感から始まったものらしい。それ以外でも、山頂付近の天候などを教え合ったり、情報交換の場にもなる。その後も、何人かの登山客と挨拶を交わした。

「上はすごく天気がいいよ」

そんなことを言ってくれる人もいた。普通に挨拶をする、それだけのことなのに気持ち晴れ晴れして、歩く足取りも軽くなる感じだ。

「望月、もう少ししたら感動するぞ」

後ろを歩いている猪又が、意味深なことを言った。

感動——今してるさ。

そして森が終わり、目の前に広がった草原に——俺は再び感動した。

雲が近い。白い煙のような雲が、すごい速さで流れていく。ごつごつとした岩がところどころ転がっている草原。足許では、高原植物の小さな花々が転々と咲いていた。

ここは天国か——？

初めて山に登ったが——これは、いい。心が洗われるようだ。

「あと少しだ、頑張れよー」

篠原の声ではっと我に返り、山小屋に向けて再び歩きだした。なんだか秘湯に入るのが楽しみになってきた。

「山もいいだろ」

隣を歩く猪又が、流れていく雲を見上げながら言った。

「そうだな。こんなに感動するとは——登る前は思ってもみなかったよ」

「だろ？」

山は侮ると怖いけどさ——やっぱりまた登りたくなるんだよな。

そう言う猪又は、満足そうに笑った。

「なるほどね、確かにこれは癖になるかも」

先を歩いていた篠原が、嬉しそうに手招きしながら俺たちの名前を叫んだ。

——あそこにも、はしゃいでいる大人がいる。

「写真撮ろうぜ、写真！居残り組の奴等に見せてやろう」

えー、別にいいです。という俺の意見は却下され、まず篠原と間宮がポーズをとった。

・・・ああ、それ見たことあります。北の大地に銅像ありますよね。でも、山となんの関係があるんですか？俺を指ささないでください。みんな見てるから。

満足そうな篠原が、お前らも一緒に写るんだ、と俺の手からデジカメを奪うと近くにいた中年の登山客にお願いします！とデジカメを渡した。

どんなポーズにするか迷っている二人に「普通に撮りましょう、普通に！」と言ったが無視され、敬礼のポーズをとることになった。

誰かこの人たちを止めて——。

写真を撮ってくれた礼を言って画像を見てみると、すごいヤル気のない自分が写っていた。

俺——顔に出るタイプなんだな。さっきまでの感動も、一気に吹き飛ばような篠原と間宮の強烈っぷりに、藤堂の苦労を身をもって感じ、心底同情した。

山小屋でガイドに頼み、秘湯へむかう。

そう、今までは山小屋に向かうために山に登っていたのだ。また、山深い道に入り、ここまでする必要があるのか？！と真剣に後悔をするようになった頃、ガイドが鈴を渡してきた。

えっ——なんですか、これ。

ガイドは「熊が出るから鈴を鳴らして歩け」とあっさりと言った。「あははは、熊ですかー。そりゃー大変だ・・・」

もうイヤ——。フラフラになりながら、それでも鈴はしつかり鳴らして歩いていると白いモヤが進行方向から流れてきた。温泉の湯けむりか？！

「もうすぐですよ」

ガイドの声に安堵するが、それから三十分ほど歩いてもまだ目的地に着かない。もうすぐって——あとどれくらいですか？

流石に、篠原や間宮にも疲れの表情が見て取れた。後ろを歩いている猪又も、体力を温存するためか、さっきまでのように話さなくなった。

「着きましたよ！ここが、深山温泉みやまです」

さっきのこともあり、ガイドの言うことがいまいち信じられない。早足で、ガイドの横に立つと目の前に白い湯気がユラユラと立ち上る水溜まりがあった。

ここが——秘湯、深山温泉。やっと着いたんだー。あまりの過酷な道のりに、目に涙が滲んだ。

男五人で湯船に入ると、茶褐色の少しぬるめのお湯だったが、じんわりと体が温かくなっていく。頭がぼうつとして、疲れがとれていくようで気持ちがよかった。

篠原と間宮が気持ちよさそうに鼻歌を唄い、猪又と俺は湯船に肩まで浸かりうつとりしながら秘湯を楽しんでいた。極楽、極楽。

「さあ、では帰りましょう」

ガイドの声に男四人の顔が凍り付いた。

———そういえば、これから帰らなくてはいけないのだ、地上へと。

温まった体から熱が一気に引いていくを感じながら、誓った。もう二度と、山には登らない——と。

それでも、またいつか——山に登りたいと思う時があるだろうか。

あの天国のような景色を見るために。

episode 19 — 1 父と娘

呆然とした様子で歩いている男は、まるで死神にでも会ったかのように青白い顔をして生気を失っている。一点をただ見つめ、よろよろと力なく歩く姿は異様でもあった。

彼は、ふとショーケースに飾られたソレに目をとめた。

生気のなかった瞳に異様な光が宿る。込み上げてくる怒りに身を震わし、理不尽な運命に牙を剥くように男は憎しみに満ちた瞳で睨んだ。

「こんな——こんなこと、絶対許さねえ!!」

またいつものが始まった。面倒には巻き込まれないように、視線を逸らす。仕事をたくさん抱えてるのだ。相手になんてしてられない。

若林や田村、他の課の捜査員たちも、何事もなかったかのように机に向かって仕事をしている。藤堂にすべてをまかせているのだらう——。

ごめんなさい、藤堂さん。

お願いします、藤堂さん。

「うおおおお、こばさんー!」

間宮が、小林に泣きついていて。きっと相も変わらず、娘さんのことに違いない。

「どうした、まーさん。由美ちゃんと何かあったのか?」

小林がなだめるように言うと、間宮は涙目で頷いた。

「由美に男から電話があったんだ。週末に会う約束をしていたんだ! 今日と一緒に泣こう」と言って涙ぐんだ。——きっと、自分にも似たような経験があるのだろう。

俺の隣に座っている藤堂が「まーさん、まさか電話を盗み聞きし

たんじゃないだろうね？」と咎めるように言った。

「当然だ！得体の知らない男から電話がかかってきたんだぞ！」

「藤さん、わかってやってくれ。子供を守るのは親の義務なんだ。子供を守るためには、それぐらいやらなきゃいけないこともあるんだ。何かがあった後じゃだめなんだ」

小林が、間宮の両肩をがっしりと掴みながら藤堂に諭すように言った。藤堂は、口元に人差し指を当て考え込む。

わぁ、もっともらしいこと言って、藤堂さんを言いくるめようとしてる。しかも、藤堂さんも納得しかけてる。藤堂さん独身だし、さすがに小林にはかなわないのか。篠原がいないうちに何とか二人を止めて欲しいんだが――。

突然、刑事部のドアが勢いよく開いた。

「ただいまー、あれ？またまーさん泣きついてるの？今度は何？何？」

楽しそうに篠原が小林たちのもとに近寄っていく。隣で藤堂がため息をついた。

帰ってきたー、もうだめだ。ごめん、娘さんたち。デートは諦めてー。若い恋人たちの週末デートの危機に胸を痛めていると、間宮が正論を言うかのように胸を張って言い放った。

「だから、俺も一緒について行くことにした」

何を言い出すんだ！？このバカ親父。

危うく叫びそうになったのを、口元を両手で押さえなんとか堪えた。そんな俺の様子を見て、若林が肩を震わせて笑いをこらえている。

藤堂は呆れ、小林は「そうしろ！」と背中を押し、篠原がお腹を抱えて笑い転げる。誰かこの大人を止めて。

「駄目だぞ、間宮」

低い高圧的な声が、間宮を諷めた。その声に反応して、間宮の体が一瞬ビクリとする。声のした方を見ると、小林に負けなくらい厳つい体の男がゆっくりと近づいて来た。

迫力がありすぎて怖い——組織犯罪対策課の警視、高遠勇だ。

他の課の捜査員たちも遠巻きに様子を伺っている。高遠が小林をひと睨みした。

「小林、間宮を煽るな。^{あお}こっちは忙しいんだからな」

そう言って、大人しくなった間宮の腕を掴んで席まで連れて行ってしまった。間宮は借りてきた猫のように、大人しく従っている。

バツが悪そうに小林は鼻を鳴らし、「ふん、生意気な」と高遠の後姿を睨んだ。二人は大学は違うが、学生時代からのライバルだったらしい。藤堂がホッと胸を撫で下ろし、篠原がつまらなさそうに口を尖らせた。

よかった。若者の青春がぶち壊されなくて——。俺のホッと緩んだ顔を見て、また若林が笑った。若さん笑いすぎ。隣の田村は、我関せずと黙々と調書を書いている。相変わらず協調性のない男だな——コイツは。ため息をつき、机の書類に目を移す。

「さて、やるか」

やっと仕事に集中できる。溜まった調書に取り掛かった。

その日の深夜、事件は起こった。

暴力団の準構成員が、民間人を発砲、射殺したのだ。すぐに、所轄署に捜査本部が設置された。

容疑者が、暴力団組員ということもあり捜査一課と組織犯罪対策課で捜査本部が組織された。捜査本部に入ると、一角だけやたらガタイのいい強面の男たちが固まっている。組織犯罪対策課の捜査員たちだ。間宮に負けず劣らずの強面ぶりに目を逸らしてしまう。

横目で、彼らを盗み見ていたら間宮の姿を見つけた。部下に何か言っているようだ。何を言っているんだ？ 気になって、聞き耳を立ててみると「くそっ六道組め！ よりによってこんな時に、潰してやる」と怒り心頭の様子だった。

ああ、やっぱり間宮さんてば、そんなことだろうと思いました。肩をすくめつつ、捜査会議が始まるのを待った。

容疑者の谷原耕介は、拳銃を所持したまま逃走。谷原は、清和会系暴力団六道組の準構成員だった。最初、組同士の抗争かと捜査本部は色めき立ったがどうも違うらしい。今回の銃撃事件で、六道組は谷原の単独による犯行だと主張している。その証拠に、六道組は谷原の情報を率先して警察に流してきた。拳銃の入手も、二週間前にインターネットの闇サイトで購入していたことが谷原のパソコンの履歴から分かった。

会議終了後、部屋から出て行く怪しい集団、ではなく、組織犯罪対策課の面々を見送り席を立つ。

俺たちは谷原の家の周辺の聞き込みをするため、田村の車に乗り込む。新車独特の匂いが、鼻につく。納品されたばかりの車で、ドライブやデートに使うことなく、しかも一番に助手席に乗るのが俺なんて。あはは、愉快だ。――って、俺も人のこと言えなかった。

谷原の部屋に入ると、部屋の中央に布団が敷いてあり、その上にノートパソコンが一台あるだけだった。テレビもテーブルもタンスもない。洋服が何枚か、床に散らばっているくらいだった。

「これまたシンプルな生活してたんだな」
寝るくらいしかできないんじゃないか？ここでどんな生活してたんだ。

「パソコンがあるだろ。電腦構成員だったのかもな」
そう言うと、田村はパソコンを立ち上げた。パソコンのデータは、既に科捜研が調べている。何を調べる気だ？

インターネットに繋げ履歴を調べるが、特にたいしたサイトは見えていなかった。というか、アダルトサイトばかりだった。

「電腦ね。聞き込みに行くか」
ため息をつき、田村は立ち上がった。

近所の人間は谷原について、あまり多くを語らなかった。暴力団準構成員ということもあって、あまり近付かないようにしていたようだ。しかも、拳銃を持って今も逃走している。下手に何か言っ

撃たれてもしたらたまったものではない。よけいに、皆、口を硬く閉ざしてしまったようだ。

結局、何の収穫も得ることはできずに署に戻ることにした。

episode 19—2 命

捜査本部に戻ると、藤堂と間宮がすでに戻っていた。陣内は、前で篠原と話し込んでいる。俺たちが近付いていくと、間宮は部屋から出てしまった。

「お疲れ、望月たちは何か収穫あった？」

俺たちは首を振りながら、藤堂の後ろの席に座った。

「残念ながら。間宮さん、何かあったんですか？」

藤堂は苦笑しながら、「由美ちゃんのことではちょっとね」と言っていた。

捜査中なのにまだ週末デートのことが気になるのか？ 藤堂が俺が顔をしかめたのを見て再び苦笑した。

「あの遊園地は、間宮にとって特別な場所だからね」

遊園地——とは、週末、娘さんがデートする緑が丘遊園地のことか？

「信じられないかもしれないけど、七年前まではまーさん、由美ちゃんが幾つなのかも知らないほど仕事人間だったんだよ」

肩をすくめながら藤堂が言った。

まさか、あの間宮が？！

七年前？——確か奥さんが亡くなったのも。

「八千代さんが病気で亡くなって、自分を責めて落ち込む間宮を連れて由美ちゃんが、緑が丘遊園地に行って励ましたんだ。9歳の女の子が、どうしたら父親が元気になってくれるか、一生懸命考えて自分だって悲しいはずなのにね」

藤堂は穏やかな声で「まーさんはね、由美ちゃんに救われたんだよ」と言って伏し目がちにほほ笑んだ。

そうか。だからあんなに——殺気だったのか。大切な場所だったんだ、間宮にとって。

気をつけるよ、誰だか知らないが相手の男の子。なんで娘さんも

そんな場所選ぶかなあ。間宮が少し可哀相になった。

他の捜査員たちも続々帰ってきたところで、本日二回目の捜査会議が始まった。間宮は、険しい顔のままだった。

谷原の部屋から押収した診察券をもとに、病院に聞き込みに言った捜査員から谷原が末期の胃ガンだったことが報告された。本人にも、一ヶ月前に告知していたようで、余命半年だということだった。ガン――。

余命半年。

呆然としていると、被害者と容疑者の繋がりを調べていた捜査員から思いがけないことが報告された。

谷原と被害者が同級生だったということだ。しかも、谷原は被害者に学生時代イジメられていたそうだった。

さすがに、捜査本部は騒然とした。

逆恨み――？

「拳銃には、弾が残り七発」

篠原が険しい顔で呟いた。

イジメた人間を、まさか――殺していくつもりか？！

当時の同級生たちから聞いた話では、イジメが原因で谷原は学校を退学したようだ。そのままグレて、暴力団の準構成員になり、拳げ句、余命半年と診断された。

逆恨み、と簡単に済ませてしまっているのだろうか。

もしイジメがなければ、谷原の人生は違ったものになっていたかもしれない。最期も幸せなものになっていたかもしれない。

でも、僅かな命で谷原が選んだのは、イジメていた人間を殺すこと。

十年前前のことを――と、イジメた側の人間は言うかもしれない。遊びだったと言うかもしれない。

でも、イジメられた人間は――十年たった今でも忘れていなかった。傷ついたままだった。だからといって……殺人は許させることではないが。

「あと何人イジメに加わっていたんだ？」

篠原が、苦虫を噛みつぶしたような顔で捜査員に聞いた。

「あと、二人です。もう一人は、バイクの事故で一昨年亡くなっていました」

篠原は頷き、残りの二人に数人の捜査員を警護につけることを決めた。他の捜査員たちは、引き続き谷原の捜索にあたることとなった。

episode 19-3 最後の一人

深夜の住宅街で三発の銃声が鳴り響いた。被害者は、浅野高明、腹部を撃たれ出血多量で搬送先の病院で亡くなった。彼は、谷原をイジメていた二人のうちの一人だった。浅野を警備していた二人の捜査員も、撃たれて重傷を負い今病院の集中治療室にいる。谷原は、その場を逃走。緊急配備が引かれ、区内全域に検問を敷いたが谷原は捕まらなかった。

「残り一人——弾はあと4発、か」

田村はハンドルを握ったまま黙っている。

「やり切れないな。イジメが原因で、谷原の人生は狂ったわけだろ？ しかも残りの命はあと半年……」

「本人の責任だろ」

田村は、前を見ながら冷たく言い放った。

「……お前ね。それじゃあ、イジメられる人間が悪いとでも言いたいのか？」

それは、あんまりじゃないか？

「違うさ。イジメは、イジメる人間と止めずに見ている周りの人間が悪い。でも、その後の人生は違うだろ？ 学校を辞めたって、別の学校に入り直すことだってできた。定時制だって、通信制だって、フリースクールだってある。でも、谷原はそれを選ばず、グレて、極道に入った。自分で選んだ道だ。それを、イジメた人間の責任にするのはお門違いもいいところだろ」

田村の言っていることは、確かに正論かもしれない。でも——みんながみんな田村みたいに割り切って生きられるわけじゃない。強い人間ばかりじゃない。冷めた目でハンドルを握っている田村をじつと見つめ、視線を前方に戻した。

「俺はさ、イジメられたこともイジメたこともないから分からないけどさ、でも、もし自分がイジメられていたらと想像すると——コ

ワイと思ったんだ。一人に対して、集団の人間が言葉や力でねじ伏せて、毎日毎日、徹底的に自分を否定されてさ。――そしたら、やっぱりすぐには立ち直れない、時間がかかると思うんだよ。学校に入り直すとか、そんな簡単にできないと思うんだ……」

だから谷原だって、自分を受け入れてくれた不良たちの仲間になったんじゃないのか？居心地良く感じたんじゃないのか？そんなことを考えていると、「……お前みたいなヤツばかりだったら、世の中もう少し住み安かっただろうな」ぽつりと田村が呟いた。

白い外壁で洋風の可愛らしい家。玄関には、色とりどりの小さな花が、バランス良く植えてあった。インターホンを押し、カメラ越しに警察手帳を開き身分を明かした。

「I 県警の望月と田村です」

困惑気味の住谷一樹が出てきた。イジメをしていた最後の一人だ。朝一番で開かれた捜査会議で、彼の警護に付くことが決まった。

「中へどうぞ」

住谷に促され、家の中へ入った。広々としたリビングに案内されると、四人の捜査員が窓の近くに立って外を伺っていた。昨日から、警護に当たっていた所轄の刑事たちだ。

「まったく迷惑な話ですよ。十年も前のことを今さら！」

住谷は苛立ちを隠そうともせず、ソファに乱暴に腰掛けた。仕事も休みを取らされ、家にも何人もの人間がずかずかと入ってきたのに対して辟易している感じだ。自分が命を狙われている、ということもあまり本気にしていないのかもしれない。二人も殺されているのに……。

俺たちは、そんな住谷に対して何も答えず窓の外の様子を確認する。ふと、ピアノの上に並べてある家族写真が目にとまった。どこかの写真館で撮ったのだろう、親子三人でにこやかに写っている幸せそうな写真。

「娘さんと奥さんは？」

所轄の刑事に聞くと、「事情を説明して、今は奥さんの実家に。ここにいと危険だから、朝早い内に移動してもらったんだ」と返事が返ってきた。

その方がいいだろう。それに、三人より一人のほうが守りやすい。住谷は、かなり苛ついているらしく四本目のタバコに火をつけた。テーブルの上に置いてある灰皿には、タバコの吸殻が山積みになっていた。

「俺たち、外の見回りしてきます。もしかしたら死角に隠れているかもしれないし」

家に四人も捜査員がいるなら安心だ。俺と田村は、外へ出た。

金曜日の午前中ということもあって、あまり外を歩いている人はいない。新興住宅街ということもあり、住谷の家の周りには十数戸の住宅があるだけで周りはほとんど分譲地だった。隠れるような場所も建物もない。狙うなら人通りの少ない夜、か。それでも、これだけ周りに何もなければこっちも警戒しやすい。

『十年も前のことを今さら!』

住谷の言葉が頭をよぎった。

十年の間、忘れてなかったってことだろ。それだけ苦しんだってことだろ。・・・なぜ苛立つ前に、そのことに気付かないのか。谷原は、今どこにいるのだろう。何を考えているのだろう。目の前に立ちはだかる死に怯えているのだろうか。イジメた人間への憎悪に燃えているのだろうか。

「どうして治療を拒んだんだ?」

余命半年——治療をすれば、の話だ。

治療を拒んだ谷原の命は、実際はもっと短い。それに、治療をきちんとすればもっと長く生きられる可能性だってある。それをなぜ拒んだ?なぜ、殺すことを選んだ?自分の命を投げ打ってまで——

―。いつの間にか立ち止まって考え込んでいた。

「余命を宣告されたのが、一ヵ月前。拳銃を購入したのが、二週間前。その間に、谷原に何かがあったんだろう」

そう言う田村は、「一旦家の方に戻ろう」と言って今来た道を引き返した。田村の後に続きながら考える。何か・・・それは一体なんだ？絶望の中にいた彼に何があったというんだ？

外にいと目立つので、車の中で待機し辺りを警戒するが結局谷原は姿を見せなかった。捜査本部からの連絡でも、谷原に関する情報は得られなかった。前の二つの事件でも谷原は深夜に襲撃している。俺たちは、そのまま田村の車の中で待機することにした。

「相手は、警官二人撃っている。気をつけろよ」

所轄の刑事から言われて、顔の表情が引き締まった。外に出ると、街灯の明かりと十数戸の家の明かりがあるだけで、あとは冥府へ続いているかのような暗闇があるだけだった。闇に引き込まれそうな感じで怖くなり、慌てて車に乗り込んだ。

そうだ――谷原はもう四人も人を撃っている。限られた命のことを思えば、もはや怖いものなどないのかもしれない。そう考えると、背筋が冷たくなった。

今回の事件では俺たち捜査員全員、拳銃の携帯を許可されている。でも――いくら凶悪犯だからって人なんて撃てねーよ。窓の外
の暗闇を見つめながら撃たれた警官のことを考えた。

「なあ、お前、拳銃で人を撃ったことあるか？」

「ない」

田村は、辺りに気を配りながら、缶コーヒーを片手に言った。

「だよなあ、谷原が現れたら――お前は どうする？」

住谷の前に谷原が現れたら――俺はどうする？

「さあな、そのときになってみないとわからないさ」

田村は、俺を横目で見ながら「お前、無茶するなよ」と釘をさしてきた。

「しないさ」

拳銃なんて使いたくないからな。ため息をつき、住谷邸を見るとリビングの明かりが暖かいオレンジ色を放っていた。普段ならあの部屋で、家族三人団欒しているところだろう。時計を確認すると十二時を過ぎている。いや、子供は夢の中か。

周りの家は、ほとんど明かりが消え、辺りはより一層静まり返っていた。寝静まる街に、街灯の明かりだけが規則的な間隔で道路を照らしていた。

「今のところ、谷原が現れる様子はないな」

買い溜めしておいた缶コーヒーを、一缶手に取りプルタブを開けた。

「警戒してるのかもな、警察が動いているのは二件目の発砲事件でバレてるからな」

田村も缶コーヒーを手を取った。

「警戒して、考え直してくれるといいんだけどな」

谷原には、最期を共に過ごす人間がいなかったのか。それとも――それだけ憎しみが強かったのか。

唯一、明かりの灯っている住谷邸を見つめた。光と影――正反対の生き方をしてきたんだな、二人は。ピアノの上に飾られた家族写真と何もない谷原の部屋が頭に浮かんた。やっぱり――遣り切れない。

車中では、田村と何かを語ることもなく、ただ目の前に広がる暗闇の先から現れるかもしれない谷原に警戒し、住谷邸をじっと見つめながら過ごした。辺りが、太陽の日の光を浴びて明るくなってきた。朝だ、長かった。ずっと、座りっぱなしだったので体が痛い。座ったまま背伸びをしながら、ネクタイをさらに緩めた。

今日は住谷も仕事は休みだから、このまま家に籠ってもらおう。そう思っていると所轄の刑事が、袋を持って家から出て来た。おにぎりの差し入れだった。一晩中、缶コーヒーで空腹を凌いでいたので有り難かった。

おにぎりを頬張りながら、いつまで車中での待機が続くのか心配

になった。十月ともなると、深夜の車中はかなり冷えた。これをあと何日続けるのだろうか。夏も辛かったが、冬も辛いよ。早く谷原が捕まってほしい。

episode 19-4 家族写真

その時、携帯が鳴った。篠原からだ。

「谷原は現れたか？」

電話の向こうでは、捜査員たちが慌ただしく動いている様子が伝わってきた。

「まだです」

「奥さんと娘さんも無事なんだな」

「いえ、二人は奥さんの実家に今行っています」

俺の言葉に篠原は息を飲んだ。

「実家の電話番号は？」

番号？ わからん。

篠原に急ぎ立てられ、車を降り慌てて住谷の家に向かった。住谷に奥さんの実家の番号を聞き、篠原に伝えた。

「何かあったんですか？」

隣で、住谷が心配そうに俺の様子を伺っている。

「病院付近にある写真館で、住谷家族の写真がショーケースに飾つてあるのを藤さんたちが見つけたんだ」

篠原が電話口で、捜査員に指示を出しながら言った。

「家族写真？」

ピアノの上に飾られている写真に目を向けた。俺の視線をたどるように、みんながピアノの上の写真を見つめた。

「もしかして・・・谷原はコレを見たんですか?!」

俺の言葉に、住谷の顔が見る見る青くなっていった。

「一カ月前、そのショーケースのガラスが何者かに割られたことがあったらしい」

篠原の話を、所轄の刑事や田村に伝えた。篠原から次の連絡があるまで、俺たちはこのまま住谷の警護にあたる。住谷は顔面蒼白になって、その場に座り込んだまま動かない。

「大丈夫ですか？」

近寄って声をかけると、「か、家族は関係ないじゃないか！」と俺の腕を震える手で掴みながら、住谷は上ずった声で叫んだ。

「落ち着いて下さい。まだ、ご家族が狙われていると決まったわけではありませんから」

住谷の肩に手を置き、なだめるように言いながら彼をソファに座らせた。

「連絡を待ちましょう」

頭を抱え呻く住谷にそう言うと、手元の携帯に視線を移した。今、捜査本部にいる捜査員が奥さんの実家に連絡を取っているとところだ。何もなければいい。張り詰めた空気の中、篠原からの電話を待つ。

五分経っても電話はかかってこない。確認の電話くらいすぐできそうなものののに。まさか・・・何かあったのか？不安な思いが頭を過ぎった時、やっと電話がかかってきた。慌てて電話に出ると、「娘さんが――いなくなったそうだ」と篠原が、苦しそうな声で呻いた。

「そんな！？いつ？」

住谷が、体を震わせながら俺の横へ駆け寄ってきた。所轄の刑事や田村も、こつちをじっと見つめている。

「娘さんが、いなくなったそうです」

そう言うと、住谷が口元を両手で覆った。

「彩花！どうして彩花が！！」

「ついさっきまで庭で遊んでいたようなんだが、目を離れた隙に姿が見えなくなったらしい。今、捜査員たちが全力で探している。必ず見つけ出すから、お前たちは住谷の警護に集中するんだ！」

そう言うと篠原は電話を切った。篠原の電話の内容を所轄の刑事や田村に伝え、実家へ向かおうとする住谷を数人がかりで取り押さえ、落ち着かせた。

「彩花に何かあったら！彩花に――」

口元を両手で押さえながら、震える声で住谷が呻いた。

その時、家の電話が鳴り住谷の肩がびくりと反応した。

「実家からかも！彩花が見つかったのかもしれない！」

表情を緩ませながら、電話に走り寄り受話器を乱暴に取り上げた。
「もしもし!？」

だが、受話器の向こうから聞こえたのは奥さんでも実家の両親でもなかった。

「住谷、久し振りだな。俺のこと覚えてるか？」

押し殺したような低い男の声。

「あ、お前——た、谷原か？」

見る見る表情を曇らせ、住谷は俺たちにすぎるような目を向けた。
俺たちは住谷のもとへ駆け寄ると、スピーカーのボタンを押した。

「お前の娘、かわいいなあ」

スピーカーからは、粘着質な男の声が聞こえてきた。住谷は額に
脂汗を浮かべながら、受話器を両手で握り締めた。

「娘を——娘に手を出すな！」

受話器の向こうの谷原は「警察いるんだろ？お前に手が出せない
から娘を殺してやるよ」と楽しげに嗤った。

「やめろ！やめてくれ！娘は関係ないだろ！頼む、やめてくれ！」

住谷は、必死で受話器の向こうにいる谷原に頼み込む。

「頼む、やめて！やめてくれ！ひやはははは」

ふざけた口調で谷原は、住谷の言葉を何度か繰り返して嗤った。

「住谷、娘を殺されなくなったら、緑が丘遊園地にお前一人で来
い」

そう言うのと電話が切れた。

すぐに谷原から電話があったことを篠原に伝えると、篠原が舌打
ちをした。

「住谷を遊園地前の駐車場まで連れて来い。絶対一人にするな！」

篠原からの指示を伝えると住谷は、冗談じゃない、と叫んだ。

「一人で行かせてくれ。じゃないと彩花が殺されてしまう！」

住谷は、目を真っ赤に充血させ俺たちに懇願した。

「住谷さん。今の谷原は、何をしてもおかしくない状態なんです。貴方を撃った後、娘さんも撃つかも知れない。そうさせないためにも、我々と一緒に行動して下さい。大丈夫、貴方も娘さんも我々が守ります」

俺の言葉に失望の色をあらわにしてうなだれる住谷を促し、田村の車に乗せた。警察と一緒に行動することが、家族にとってどれほどの恐怖か。それでも、一人で行動させるわけには行かない。

所轄の刑事たちは、別の車で後ろからついて来ている。ところが、土曜日ということもあり道が渋滞していてなかなか前に進まない。こんな時に！隣に座っている住谷の焦りと苛立ちは、ピークに達していた。

「どうして俺たちがこんな目に……どうしてこんな理不尽な目に合わなきゃいけないんだ！」

怒りに震える拳を固く握り締めた。

「谷原もそう思っただろうな、あんたたちにイジメを受けた時」
運転手の田村が、前を向いたまま冷たく言い放った。

「な、それは十年前の――」

「十年前だろうが、二十年前だろうが理不尽だと思ったんだよ、谷原は」

田村の容赦ない言葉に、住谷は動揺した。

「あんた、谷原に悪いことをしたとすら思っただろう？谷原のことも忘れてただろ」

「いい加減にしてくれ！そんな昔のこと！ただの子どもの遊びじゃないか！それを今さら――それに家族は関係ないじゃないか！」

住谷が、顔を真っ赤にして怒りをあらわにした。

田村……気持ちにはわかるが家族を刺激するな。

「谷原のしている行為は、卑劣で許されないことです。娘さんには一切関係のない逆恨みなのだから。私も許せません。だから、谷原を必ず逮捕します。娘さんも無事助け出します」

俺の言葉に、住谷が安堵した様子でこつちを振り向いた。

「でも、住谷さん。想像してみてください。貴方の娘さんが、貴方がたが谷原にしたことをされたとしたら——貴方はどうしますか？ 子どもの遊びだからと笑って許すことができますか？」

隣に座っている住谷の目をまっすぐ見据えた。住谷が顔を強張らせる。

「それは……」

「あんたは忘れちゃいけないんだよ、自分がしたことを。父親なら、なおさらだ」

言い淀む住谷に、田村が容赦なく言い放った。

episode 19-4 家族写真（後書き）

遅くなりました。

楽しんでいただければ幸いです。

episode 19－5 再会

渋滞を抜け、やつのことで遊園地前の駐車場に着くと、多くの捜査員が既に待機していた。遊園地サイドには連絡済みで、新たな来場者は入場できないようになっていた。中にいる客も少しずつ避難している。

今のところ、遊園地内で谷原と彩花らしき人物は見つかっていない。といっても、週末の遊園地には、家族連れが押しかけているので本人かどうか見極めるのは不可能に近い。

「遊園地内の場所の指定はなかったんだな？」

篠原が、俺たちに確認してきた。俺たちが頷くと篠原は「じゃあどこに行けばいいんだ」と舌打ちした。外の遊園地の異変に、隣接されている大型ショッピングモールの客も少しずつ集まってきた。遊園地から避難させても、客がここに流れていれば意味がないではないか。

「流れ弾に当たる可能性もあるから、隣の客もすべて避難させるんだ」

篠原が何人かの捜査員に指示を出した。指示を受けた捜査員たちが、走り出そうとした時、女の子の声がした。

「パパー！」

その声に捜査員たちが一斉に振り向くと、遊園地の入口に子どもを抱きかかえた谷原が立っていた。

「彩花！」

前に飛び出そうとする住谷を制止し、庇うように住谷の前に立った。

「やっぱり警察を引き連れて来たな、卑怯者のお前らしいな」

谷原が顔を歪めて笑った。数人の捜査員が、谷原の周りを取り囲む。訳が分からない買い物客たちは、その様子を固唾を飲んで見ていた。

「谷原、子どもを放すんだ」

篠原が叫ぶが、谷原は住谷を睨んだまま動かない。

「みんな、動いたらこの子殺しちゃうよ。展望台から見てたんだ。警察がたくさん来たから、俺から出迎えに来てやったよ。何で分かるか？」

谷原は、おかしそうに嗤い、買い物客の方を見た。

「だってさ、たくさんのお客の前で住谷がどんな奴なのか披露したくて遊園地選んだのに、客がどんどん避難しちゃったからさ、こっちに来たわけ」

目を細め住谷を見つめる谷原に、住谷は震えながら子どもの名前を呼ぶだけだった。

「お前、ヒドい奴だったよなー、俺の前にも何人もイジメてたよな。忘れてるだろ？イジメた奴らのことなんて」

谷原は、大声で周りの人間に聞こえるように話し出した。

「ムカついたんだろ？イジメを俺に注意されて。だから俺をイジメの標的にしたんだよな。イジメてた人間を仲間に引き込んでさ」

抱きかかえていた彩花に谷原は笑顔で「ヒドい奴だよなー」と言った。彩花も、笑顔に答えるように笑った。

拳銃はどこだ？

子どもの体で右手が見えない。今も、拳銃を握っているのか？谷原をじっと見据えながら、動くことができないこの状態に苛立ちを覚える。後ろにいる住谷は「彩花には手を出さないでくれ」と泣きながら谷原に訴えた。彼が前に飛び出さないように、こっちにも神経を集中させないといけない。

「やめてくれ！って叫んでもお前は嗤ってたよな」

谷原は、話しながら顔を悔しそうに歪ませた。

「お前もろくな人間になってないと思ってたのに……何だよ、あの写真。——こんなの、おかしいじゃねーか！」

谷原は吐き捨てた。

やっぱり……。谷原はあの家族写真を見たんだ。死を宣告され

た絶望の中で、見てしまったんだ。

「お前がどんなに住谷の非道をここに人間に訴えたところで、今、お前がしていることは許されることではないんだぞ！ 子供に罪はない！ その子を放すんだ！」

篠原が諭すように谷原に訴えるが、その言葉は彼には届いていない。

「いいんだよ、どうせみんな見てるだけなんだから」

谷原は憎悪を込めた目で、遠巻きにこちらを見ている買い物客たちを睨んだ。

在りし日のクラスメイトたちのように、ただ見ているだけの観客たち。谷原にとっては、見ているだけの彼らも憎しみの対象なのかもしれない。この騒ぎで、ほとんど買い物客が集まってきている。今ここで拳銃を撃ったら・・・パニックになるのは間違いない。

谷原はそれを狙っているのか？ 谷原が抱きかかえている彩花は、今の状況がわかってないのだろう、笑いながら住谷に手を振っていた。

くそ、どうする？

横目で田村を見ると、田村の横にいる間宮がこっちを見ていた。俺ではなく、泣きながら娘を放すように懇願している住谷を哀れむように見ている。

「もう、終わりにしよう住谷。隠れてないで、前に出て来いよ」

子どもを抱え直し、拳銃を持った右手を住谷の前に立っている俺に向けて構えた。

見物していた買い物客からいくつもの悲鳴が上がり、辺りは騒然とする。

「やめるんだ。そんなことしたって何の解決にもならないだろう！ 前に出て行こうとする住谷を押さえながら、谷原に向かって叫んだ。

「望月！」

田村が叫ぶが、それよりも先に拳銃が火を噴いた。

episode 19 - 6 エール

「パパア！」

女の子の叫び声と、一発の銃声が鳴り響いた。

あれ・・・痛くない。

閉じている目をおそろおそろ開くと、間宮が真っ赤に染まった左肩を右手で押さえて俺の前に立っていた。

「ま、みやさん！」

なんで・・・俺を庇って撃たれたのか?! ふらつく間宮の体を、後ろから慌てて支える。

「まーさん！」

田村と篠原と藤堂が、駆け寄ってきた。谷原を睨んだまま、岩のように動かない間宮に谷原も俺も圧倒されていた。

「おい、まだ倒れないぞ。あと二発、俺に撃ち込むか? 谷原、もういいだろう。お前がやってることは、住谷がお前にやったことよりも、もっと卑劣なことだ。お前まで腐った奴になってどうする。その子には何の罪もない! 子どもを放すんだ!」

脂汗を浮かべながら間宮が、谷原に向かって叫んだ。谷原は、目を見開いたまま動かない。やがて、谷原の右手から拳銃が落ちた。

「・・・くそっ! どうして、俺だけがこんな目に・・・」

谷原が悔しそうに呻き、その場に膝を折る。抱きかかえられた彩花は、泣いている谷原を見てしゃがみ込んだ。

「どうして泣いてるの? パパにイジワルされたの? 大丈夫? あとで彩花がパパにめってしてあげるね」

谷原の頭を撫でながら彩花がそう言うと、谷原は顔をあげて大粒の涙を流した。

「・・・優しい子だね、ありがとう」

そう言って、優しく彩花を抱き締めた。

「お父さんがあそこで待ってるから、行っているよ」

谷原がそう言うと、彩花はニツコリ笑い「ばいばい、またね」と言って住谷のもとへ走り出した。

「パー！」

座り込んでうなだれていた住谷は、顔を上げ彩花を強く引き寄せ抱き締めた。

「彩花！・・・よかった。無事で・・・よかった」

「うん、楽しかったよ。おじちゃんと観覧車に乗ったんだよ」

彩花が嬉しそうに言った。

「・・・そうか、楽しかったか・・・よかった」

住谷は、彩花をもう一度、優しく抱き締めた。

谷原は取り囲まれた捜査員に現行犯逮捕され、警察車まで連れて行かれた。住谷が駆け寄っていくと、谷原は目を逸らせ車に乗り込んだ。

「谷原、すまなかった」

住谷の謝罪の言葉にも、谷原は顔を歪め何も言わなかった。車に乗り込んでも谷原は一度も住谷を見ようとはしなかった。やがて車は発進し、谷原の乗った車が見えなくなるまで住谷は頭を下げ続けた。結局二人は和解することはできなかった。

十年という歳月の間、苦しみ続けた過去の記憶と心の傷。それは、すぐに消えるものではない。すべてをなかったことになって、できはしない。そんな簡単に、割り切れるものではない。時間が解決してくれる、というけれど・・・。彼に残された時間は、あまりにも短く儚い。

「あれほど、無茶するなって言っただろーが！」

田村が、鬼のような形相で怒鳴った。

あわわ、すまん。拳銃をむやみに使うってことかと思ってた。

田村に説教されている俺の横で、篠原と藤堂が間宮の傷口の応急処置をした。無愛想のまま、住谷親子を見つめている間宮はどこかホ

ッとした様子にも見える。

彼は、たぶん我慢できなかったのだ。父親と娘が、目の前で引き裂かれそうになっているのを、見ていられなかったんだろう。俺がそんなことを考えていると、白いワンピースを着た女の子が駆け寄ってきた。

「パパ！・・・のばっ！！」

息を切らして涙ぐみながら、処置を受けている間宮を睨んだ。

あれ、この子・・・娘さんか？

間宮を見ると、その言葉にショックを受けたのかがつくりと肩を落としている。ああ・・・可哀相になってきた。

「パパに何かあったら、私どうすればいいの？私を一人にしないで・・・もう危ないことなんてしないで」

震える声で由美はそう言うのと、声を上げて泣き出した。怖かったのだろう、硬く握っている手が震えている。間宮は頭を下げ「由美、すまん」と娘を抱きしめ、一緒になって泣きだした。篠原と藤堂は、そんな二人を見守っている。

「さあ、まーさん病院行くぞ」

篠原が立ち上がり、間宮の右肩に手を置いた。

「そういえば由美、遊園地に行ってたんじゃないかったのか？」

立ち上がりながら、間宮が言うとな彼女は「違うよ」と首を振った。

「パパの誕生日プレゼント買いに、ここの中に入ってるお店に買い物に来たの」

そう言っ、持っていた紙袋をひょいと持ち上げた。

「でも、ライオンの前で待ち合わせて・・・」

しまった、というように間宮は口元を手で押さえた。その様子を見て、由美が間宮を睨んだ。

「パパ！また電話、盗み聞きしたの？」

怒る彼女に「いつものことじゃないか」と篠原が、笑いながら言った。

「ライオンって言ってもアレだよ」

口を尖らしながら由美は、ショッピングモールの入口にあるライオンの銅像を指差した。なんだ・・・間宮の早とちりじゃないか。そう思って呆れていると「なーーっ!」と、間宮が叫びながらライオンに向かって指を差した。震える指の先を目で追うと、茶色い髪をした男の子がこっちに向かって会釈した。

「またアイツかーっ!!」

間宮が彼のもとへ向かって行こうとするのを、篠原と藤堂が制止し無理矢理車に押し込んだ。

「藤さん頼むなー」

暴れる間宮となだめる藤堂を乗せた車は、そのまま病院に向かって走り出した。

藤堂さん・・・こんな時にも。同情しながら、車を見送った。やれやれと篠原は頭を掻いていた。

「由美ちゃん、もう家に帰る?」

篠原が由美に向き直りそう言うのと、彼女は頷いた。

「パパ、今日、家に帰れますか?」

由美が、心配そうに聞くと篠原は「たいした傷じゃないから、すぐ戻るよ」と言って笑った。

いやいや、撃たれてますよ? 弾まだ体に残ってるし。篠原さん・・・こんな時にも、そのキャラは健在ですか。

「すぐ戻るから、待ってなさい」

篠原が、穏やかに笑って由美の頭に手を置いた。

由美は安心したのか顔をほころばせ、元氣よく頷いた。走り去ろうとする由美に「彼氏によろしく」と篠原が言うのと、くるりと振り返り、顔をしかめて否定した。

「違います! ただ買い物について来てもらったただだよ! アイツ、私より弱いし!」

それを聞いて、篠原は苦笑した。

無自覚の日本一少女か。プラス娘命の鬼父。大変だな・・・あの男の子も。

田村と、二人の楽しそうな後姿を見送りながら、茶髪の男の子に
エールを送りたくなった。

episode 19-6 エール（後書き）

仕事が忙しくなり、なかなか更新できませんでした。
なんとかこのお話を終えることができよかったです。
今回も、展開が速くてすみません。

episode 20-1 小林の受難

間宮が撃たれて、二週間が経った。

篠原の席には、左肩を固定した間宮が机に腰掛け篠原と談笑している。胸元には、由美からの誕生日プレゼントのネクタイピンが光っていた。

朝、出勤した時に間宮がいるのに驚いた。慌てて間宮のもとに行くと、ネクタイピンの自慢を二十分ほど聞かされた。全治二カ月の怪我なのに、なんで安静にしないかな。怪我をさせた負い目もあり、落ち着かないではないか。早く治ってほしいのに……。ため息をつき、書きかけの書類に目を落とすと、休みのはずの小林が部屋に入ってきた。

「あれ、こばさんどうしたの？」

篠原が尋ねると、小林は落ち着かない様子で「ちよつとな」と曖昧に返事をした。間宮の姿を見つけると「まーさん、もう大丈夫なのか？」と、席に着きながら小林が心配そうに尋ねた。

「大丈夫です。それに、由美を残して死ねませんしね」

豪快に笑うと、ネクタイピンを自慢げに小林に見せた。

「ネクタイピンなら、毎日つけられるからって選んでくれたんですよー」

デレデレになりながら話す間宮に、小林は羨ましそうに「よかったな」と言った。

何だか様子がおかしい小林に、藤堂は首をかしげ「こばさん、何かあったんですか？」と尋ねる。小林は、面倒臭そうに手をヒラヒラとさせて「何もないさ」と言うと、机に溜まっていた書類を手にとった。

「ところで、あの男の子なんて名前なんだ？ ホレ、由美ちゃんの彼氏」

篠原が、間宮のほうに向き直り、からかうように言うと「彼氏じ

やない！」と間宮が篠原を睨んだ。

「あー、そうだった、そうだった。まだ、彼氏じゃなかったな」

笑いながら意地悪く言う篠原に、間宮はこの野郎！と襲い掛かり、関節技をかけた。

「痛い、痛い。悪かったって」

篠原の体を張ったスキんシップに呆れていると「望月に婿入りしてもらうんだもんな」と関節技をかけられたままの篠原が言った。

なっ！この人は・・・！

言い返そうと口を開きかけた時、小林がギロリと篠原を睨んだ。

「何言ってる！刑事が婿なんて！絶対反対だ！！」

あまりの剣幕に、篠原も藤堂も呆気にと取られていた。俺も、驚いて口を開けたまま固まっていた。

確かに、刑事の妻なんて並大抵の覚悟がないとできないよな。ん？てことは、俺結婚できないかもしれない？衝撃的な現実にショックを受けていると、追い討ちをかけるように間宮が言った。

「そうか、そうだな。由美に苦労かけさせるわけにはいかん！望月、この話悪いが無かったことにしてくれ」

篠原から離れ、一人考え込んでいた間宮が俺に向かってキッパリと言い放った。

ひどっ！

ていうか、まったくその気はありませんでしたけど。勝手に話進めて、勝手に終わらせないで……。ガックリと頭を垂れて落ち込んでいたら「残念だったな」と田村がニヤリと意地悪く笑った。

episode 20-1 小林の受難（後書き）

更新がかなり遅くなってすみません。

episode 20-2 小林の受難2

「娘の相手が刑事なんて絶対反対だ。俺は認めん。まして、結婚なんてまだ早すぎる」

小林は、鼻息を荒くしてまくし立てた。間宮も大きく頷いた。

「こぼさんの言うとおりだ。結婚なんてさせるか」

篠原が軽い調子の口調で、「じゃあ、できちゃった結婚なんて・・・」と言いかけると、二人は篠原を睨み付け「論外だ!」と怒鳴った。

肩を竦めて篠原は苦笑した。

「篠さん、煽るなよ」

藤堂が額に手を当てため息をついた。

「悪い、悪い。面白くてさ、つい」

篠原が楽しそうに小声で言うのと、藤堂は顔をしかめて篠原を睨み、再び大きなため息をついた。

藤堂さんもお大変だ、と田村を見ると、黙々と報告書を作成している。そうだよな、関わらない方がいいよな。俺たち忙しいんだから。田村を見習い、小林たちの熱い父親論をBGMにしながら——というか、聞きたくなくても入ってくる——いくつかの報告書を完成させた。有能な自分に惚れ惚れする。

「まーさん、行こう」

「行きましょう」

小林と間宮は、連れ立って食堂へ向かって部屋から出ていった。

「やれやれ、先が思いやられるな」

「でも篠さん。こぼさんの様子おかしかったね」

藤堂が心配そうに言うのと、「咲希ちゃんに、彼氏でもできたんじゃないか?」頭の上でてを組み、椅子に深く体を沈めた篠原が面倒臭そうに言った。

「そうかな」

「そうさ」

小林の娘は、中警察署の会計課に勤務している。確かまだ二三歳だったはずだ。小林警視の娘と知ってて、手を出す警官なんていないよ。愛娘家としても有名だしな。よっぽど惚れてなきや無理だな。手が空いたので、ぼんやりと考えていると、ドアが開き、髪を肩まで伸ばしたきれいな顔立ちの女性が部屋に入ってきた。

「あれ、咲希ちゃん。どうした？」

篠原が驚いた様子で女性に話しかけた。今ちょうど話題にしていた彼女が急に現れたので驚いたのだろう。それにしても・・・娘は父親に似ないのか？間宮といい、小林といい。

「父、来てませんか？」

「来てるよ。今、まーさんと食堂に行ってるよ」

「やっぱり！」

咲希は頬を膨らませながら呟いた。

「咲希ちゃん、なにか合ったの？」

心配そうな藤堂に、咲希は恥ずかしそうに照れ笑いをした。

「会わせたい人がいるから家にいてね、って言っておいたのに逃げたんですよ」

篠原と藤堂は、顔を見合わせた。

episode 20-3 小林の受難3

「おめでとう」

最初に言葉をかけたのは、藤堂だった。

「相手は？」

「今、廊下にいるんですよ。篠原さんたちも知ってると思うけど、中警察署の捜査一課の坂下登さんです」

凍りつく空気。他の課の刑事たちも一斉に廊下へ目を向けた。篠原が、さすがに困った顔をして藤堂を見た。藤堂も、なんて言ったらいいかわからない様子だ。そりゃそうだ。さっきまで、あれほど刑事はダメだ、と小林が言っていたのに、娘が選んだ相手が刑事だったのだから。

「さて、田村。仕事も一段落したし・・・食堂行くか」

この場にいるのは危険だ、と感じ田村に声をかけると、「そうだな」とすぐ返事が返ってきた。二人で席を立った時、咲希が新たな爆弾を刑事部に投下した。

「実は、子供ができたんです」

極寒の世界に放り出された俺たち。そろそろと他の課の刑事たちが、逃げるように部屋から出て行った。俺たちが絶句していると、咲希が頭を掻きながら「えへへ」と笑った。篠原も藤堂も顔を見合わせ、首を振った。

「咲希ちゃんさあ、もう少し、こばさんのこと考えようよ」

額に手を当て篠原がため息をつくとき、咲希は「面目ありません」と申し訳なさそうに謝った。

「しょうがない、めでたい事だしな。一肌脱ぐか！」

咲希の頭をぽんぽんと叩きながら言う篠原に、彼女は嬉しそうに拝むポーズをした。遠慮はいらないよ、と言わんばかりに胸を反らせ、「じゃ、藤さんお願いね」と藤堂に丸投げする篠原。ほんとこの人、質が悪いよ。

藤堂はいつものことなのか、そんな篠原に何かを言うわけでもなく、咲希の肩を大事そうに抱えて、ソファに座らせた。

「赤ちゃんのためにも、安静にしてないいけないよ」

咲希は声を詰まらせながら「ごめんなさい」と謝った。

「私に謝ることはないんだよ」

「お父さん、怒るかな」

「こばさんは、咲希ちゃんのこと本当に大切に思っているからね。」

咲希ちゃんだって分かっているよね」

咲希は頷き、目を伏せながら呟いた。

「悲しむ、かな・・・」

「どうして？結婚も出産も喜ばしいことじゃないか。ただ、順番が少し変わったただけだよ。こばさんだって、喜ぶさ」

藤堂は穏やかな口調で言う、咲希の頭を優しく撫でた。

「娘を奪われた！って悲しむけどな。父親なんてそんなもんさ」

急に割り込んできた篠原の言葉に「うん」と咲希は頷き、ハンカチで涙を拭った。

三人の様子を見ながら、廊下で一人緊張しているであろう坂下を思うと居た堪れなくなってくる。坂下は、若林の同期で俺も何回か一緒に飲みに行ったことがある。若林ほど整ってはいないが、それでもモテる部類に入る顔立ちをしている。性格も穏やかで、藤堂に似ているな、と何度か思ったことがある。遊びで女性と付き合うような男ではない。それは、篠原も藤堂も分かっているだろう。藤堂さん、お願いします。すべてを藤堂に託し、俺たちは部屋を出た。

廊下に出ると、ガチガチに緊張している坂下と目が合った。坂下は、照れくさそうに笑って「やあ」と手をあげた。

「思い切ったことでしたね、坂下さん」

彼は肩を竦めて「好きになった人の父親がたまたま小林警視だったってだけさ」と言った。いやいや、すごいことしましたよ？

「今、小林警視は間宮警部と食堂に・・・」

廊下の向うから歩いてくる小林と間宮が目に入り息を呑んだ。

「おう、坂下じゃないか。久しぶりだな。望月たちに何か用か？」
にこやかに坂下の肩を叩き、間宮と部屋に入っていた。

「あ、じゃあ」

坂下は、二人の後を追って部屋に入っていた。健闘を祈りながら、早足で食堂へ向かうと、「ふざけるなあああ」と小林の泣き叫ぶ声が廊下に響き渡った。

俺と田村は顔を見合わせ、大きなため息をついた。

episode 20-3 小林の受難3（後書き）

このCOMBINATIONの長編小説を書いているので、しばらくお休みさせていただきます。

もうひとつの話は、更新していくつもりなので読んでもらえるとうれしいです。

パラリラパラリラ、パラレル（前書き）

小説ではなく・・・口語文中心の文章です。
読みづらかったらごめんなさい。

パラリラパラリラ、パラレル

ある学校の日常を書いてみました――――。

質問編

「篠原先生、質問いいですか？」

「おう、望月。質問の受付は終了しましたー。じゃ」
「あ・・・そ、うですか」

「若林先生、質問いいですか？」

「ん、望月。先生は、女子の質問しか答えないが、特別にTOP
Sのチョコレートケーキで答えてあげようじゃないか」
「やめときます」

「里見先生、質問いいですか？」

「え、あ、はい、望月君。あの、えっと、何かしら？」
「あ、いえ。やっぱりいいです」↑意気地なし

「田村先生、質問いいですか？」

「質問するほどの難問あったか？」
スタスタスタ↑立ち去る音
ドストドスト↑壁を殴る音

保健室編

ガラッ。

「藤堂先生、気分が急に悪くなりました」
「大丈夫かい？」

「満室だ」

腰にサロンプラスをはってベツトで呻く篠原先生。

「失礼しました」

ガラッ。

「藤堂先生、気分が急に悪くなりました」

「大丈夫かい？」

「おやおや、大変だねえ」

藤堂先生とまったりとコーヒーを飲んでいる若林先生。

「あれ、先生、授業は？」

「んー、自習」

「・・・先生」

ガラッ。

「藤堂先生、気分が急に悪くなりました」

「大丈夫かい？」

「も、望月君大丈夫？」

フラフラとベツトから起き上がる里見先生。

「里見先生こそ、大丈夫ですか？」

「ええ、怪我した生徒の地を見たら気分が悪くなったの。今、どくわね」

「いえいえ、先生の使った後・・・じゃなくて先生のほうが大変そうだからいいです！」↑意気地なし

ガラッ。

「藤堂先生、気分が急に悪くなりました」

「大丈夫かい？」

「zzzzzzzz」

ベツトで爆睡する田村先生。

「田村先生・・・の授業だったのに。今。しかも、自習だった」

修学旅行編

「修学旅行だが、夜中に部屋から出た奴は・・・わかるよな」
ニヤリと笑いボキリボキリと指を鳴らす篠原先生に、みんなゴクリと息を飲む。

「修学旅行だが、寂しくて眠れない女子は先生のところへ来なさい。
男子は羊でも数えてなさい」
若林先生の言葉に、クラス全員の女子が盛り上がる。
若林先生がいる限り、俺たちに青春はない。

「修学旅行だけど、何かあったら先生のところに来なさいね」
里見先生の言葉に、クラスの男子が盛り上がる。
「篠原先生がいらっしゃるから、大丈夫よ」
みんなゴクリと息を飲む。

「修学旅行だが、俺は9時に寝る」
「え、田村先生。あの・・・」
「寝る」
「あ、はい。わかりました」

真夏日編

「暑いー」
「望月、なつとらんな」
「篠原先生、その小型扇風機は・・・」
「俺はいいんだ」
「・・・」

「暑いー」

「ん、望月。若いくせに軟弱だな。よし、女子は先生とプールへ行くか。あ、男子は教室で自習でもしてて」

「先生・・・」

「暑いー」

「あら、望月君。大丈夫？もしかして、熱射病？日射病？新種のウイルスかも。どどどうしましょ。救急車呼びましょ」

「あ、いえ、大丈夫。ほんとに。落ち着いてください」

「暑いー」

「うるさいぞ」

「田村先生は、暑くないんですか？」

「暑い」

「暑そうに見えません」

「ふっ」

小馬鹿にしたような笑みを浮かべる田村先生。

スタスタスタ↑立ち去る音

ドストドスト↑壁を殴る音

悩み相談編

「篠原先生、俺、悩み事があるんですけど」

「ほー。そういう時はな、誰かに相談するといいぞ。じゃな」

「・・・相談、する相手間違えたな」

「若林先生、俺、悩み事があるんですけど」

「お、望月。どんな悩みだ？恋の悩みか？全校女子生徒の事ならすべて把握してるから何でも聞いてくれ」

「恋の悩みができて、先生には絶対に相談しません」

「里見先生、俺、悩み事があるんですけど」

「まあ、望月君。大丈夫よ、悩みは誰でもあるものよ。先生に話してみて」

「先生もあるんですか？」

「勿論よ。私、教師をこのまま続けてもいいのだろうか、と毎日悶々と悩んでいるわ。望月君、私、教師としてどう？正直に言って。」

「え、あ、素晴らしいと思いますよ。大丈夫ですよ。じゃあ、その、失礼します」

「田村先生、俺、悩み事があるんですけど」

「それで？」

「え、あの、聞いてもらえますか？」

「聞くだけなら」

「・・・はあ、やっぱりいいです」

「人に話すだけでも楽になるぞ。言ってみろ」

「そうですか？」

田村先生は頷く。

「先生、俺、初めて先生が教師らしく見えました」

「やっぱり聞くのやめた」

テスト編

「テストで赤点取った奴は・・・わかるよな。先生は暑い教室も居残りも追試の問題作成も好きじゃないぞ」

ボキリボキリと指を鳴らす篠原先生に、ゴクリと息を飲み、必死に問題を解く生徒たち。

「よし、赤点取らなかったら、先生が頭をなでなでしてあげるか

らな」

「若林先生」

「ん、なんだ、望月」

「男子もですか？」

「え、男子？」

「・・・はなから、女子だけの話なんですネ」

「赤点を取るってことは、先生の教え方が悪いってことよね。ごめんね、先生、教え方が悪くて。だめね、私。こんな私が・・・（続いています）」

ずっしりと重い空気の中、みんな必死に問題を解く。なんか、先生が今にも飛び降りそうな勢いだから。

「授業聞いてさえいれば、誰でも解ける問題ばかりだ」

「あはは、それでも赤点取ったらどうします？」

おどけながら言うと、田村先生がニコリともせずに行った。

「・・・馬鹿でも解ける問題だと言ったよな」

「あ、でも」

「追試なんて必要ないよな。俺の中に、追試というものはない」

本気の田村先生に、生徒は死ぬ気で問題を解いた。留年は避けたい。

episode 21—1 ある夜の二人

「えっ！若さん、初恋って大学の時だったんですか？」

華やかな雰囲気のレストラン。

周りを見れば女性たちがカクテルを飲みながら楽しそうに談笑し、恋人達は自分たちの世界の中で幸せそうに語り合っていた。

「うん。そう」

若林は美味しそうにカクテルを飲みながら頷いた。

啞然としながら美味しそうにカクテルを飲む若林につられて、ジントニックを一口飲む。

「意外です。若さんってもっと早熟な学生生活を送ってると思ってました」

「え、早熟だったよ」

「はい？」

意味が分からない。首をかしげる俺に若林が苦笑した。

「初めて人を好きになったのが、彼女だったんだ」若林は懐かしそうに眼を細め、「彼女のことを考えて悶々と夜を過ごしたこともあったなあ」

じゃあ、それまでの彼女たちは？とは聞かないことにした。意外でもなんでもない。やはり若林は若林だった。

それにしても、そんな若林が恋に落ちる女性ってどんな人なんだろう。一度見てみたい、と興味がわいた。

「どんな女性なんですか？」

「なんだろうなあ。じゃじゃ馬？暴れ馬？闘牛、うーん。暴走特急？そんな感じかなあ」

カクテルのグラスを傾けながら若林が呟いた。

「……。手に負えないって感じですかね」

「そうそう、そんな感じ」若林が可笑しそうに笑い、「規格外って

いうか、梓に嵌ってないっていうか。もうめちゃくちや。よく彼女に振り回されてたよ」

「なるほど。今までにないタイプなのが逆に良かったんですね」

「そうそう。そうなんだよ。——気づいたら、好きになってた」
頬杖をつきながら、若林がポツリと呟いた。

「じゃあ、結婚が決まってシヨックですね」

今月末、その女性が結婚をするらしい。

今日俺を飲みに誘ったのも、寂しさを紛らわすためだったのかもしれない。胸が締め付けられるような思いでいると、若林がきょとんとした顔つきで俺の方に顔を向けた。

「全然」

あっけらかんと若林が言う。

「なんでですか?! 初恋の女性なんですよね?」

「そうだよ」

聞けば、新郎と新婦が付き合うきっかけをつくったのが若林だと言う。意味が分からない。どうして好きな女性を友達に譲ることができるんだ?

頭を抱えている俺の肩に、ぽんぽんと若林が手を置いた。

「彼女に幸せになって欲しかったから。アイツの方が一〇〇倍、俺より彼女を幸せにできると思ったからさ」

そう言って若林が笑った。幸せそうな笑顔で。

「理解できません」

呆れながらそう言うと、「そうか?」と若林は不思議そうな顔をした。

「俺なら、それ以上に彼女を幸せにしてやる、と思いますけど」
なんだか悔しくなり、勢いよくジントニクを飲み干した。

若林なら、その新郎に負けなくらいその女性を幸せにできるはずだ、と思うから。

「……そうか。そういう考えもあるんだな。——でも、やっぱり俺よりアイツと一緒にいた方が彼女は幸せなんだよ。ありがとな、

修平」

不満そうな俺に若林がにっこりとほほ笑んだ。

「若さんは、その人の事も好きなんですね」

俺がそう言っていると、若林は目を細めた。

「大切な親友だ。だから、二人には幸せになって欲しいと思ってる」

episode 21-1 ある夜の二人（後書き）

久しぶりの更新。

つわりも無事終わり、安定期に入りました。

やっと続きが書けた喜びでいっぱいです。

楽しんでいただけるとありがたいです。

episode 1-2 怒る男

「あの男！毎晩！毎晩！べったりくっつきやがって！」

苛立ちのあまり、机を足で蹴ると、隣の席の後輩が目を見開いてこっちを振り向いた。

「先輩……何かあったんですか？」

「ああ?!」

「あ、いえ。何でもないです」

後輩は愛想笑いを浮かべた。

五日前、久し振りに修と飲みに行こうと、県警前で待っていたら、同僚らしいヤツと県警から出てきた。仕事の打ち合わせでもするのかと遠慮して声をかけるのをやめた。

翌日も、その次の日も……毎日かよ!!

「なんなんだよ、あの仏頂面の男！」

腹ただしくなり舌打ちすると、隣の後輩がビクリと体を震わせた。それにムカついて、また舌打ちをする。

「まさか!？」

ゲイか？あの男。

「いやいや、まさかそんな。はは」

頭を振りながら、「けど……」と机の引き出しから数枚の紙を取り出す。

「田村恭一、か」

県警記者クラブにいる同僚から仕入れた資料だ。コロコロ相棒が変わっているのに、修とは一年続いている。

一年続いたのは、修の性格のせいだと思っていた。昔から、あいつはお人よしだった。面倒見がいいもんだから、毎回、貧乏くじを引かされるのだ。

「まさか、な」

大きな溜め息を漏らした時、「本木ー！ちょっと来い！」とデス

クが手招きをした。

「へいへい」

のっそりと立ち上がり、デスクのもとへ行くと、「進捗は？」と
急ぎ立てるように聞かれた。

「あとは、彼次第ってところでしょうか」

「大丈夫なのか？」

「はい」

「よし、一面開けとくからしくじるなよ」

「はい。ところで、榊さん」

「なんだ？」

榊は本木を見ることなく、大刷りに目を通してながら返事をした。

「例の件どうになりました？」

「なんだっけ？」

「異動の件です」

「お前なあ。今、それどころじゃないだろーが！」

「半年前から言い続けてんですけど」

榊は渋面をしながら、「まあ、そうだが。本木よ、お前折角社会
部のエースはってんのになんでまた県警記者クラブなんだ」

「興味があるからです。この件が終わったら、お願いしますよ」

きっぱりと言い捨て、自分の席に踵を返す。うしろから榊の溜め
息が聞こえたが、聞こえないふりをして無視をした。

囁くもの

COMBINATION長編小説（前書き）

初めて書いた長編小説です。

文学賞には落選してしまいましたが、皆様のご意見やご感想がいただければと思い、掲載いたします。

楽しんでいただければ、幸いです。

縦書きで書いたものなので、横読みは少し読みづらいかもしれませんが、

ご了承ください。

I 1章 一

「私の邪魔をする人間は――いらないわ」

女は憂いた。

女と男が佇むすぐ横の巨大な竹林が、まるで女の心の内を表すように騒ついた。

「それは、誰もが望むことですよ」

男は言った。

「そんな言葉が欲しい訳ではありません」

「困りましたね」

まるで困った様子もなく男は言った。そんな男の態度に女は淋しげな表情を見せる。

「望むだけでは嫌なんです」

「と、言いますと？」

女は男を黙って見つめた。黒く大きな瞳が男を捉える。男は動じることもなく、ただ静かに女の視線を受け止めていた。

「迷う必要はないでしょう。貴女が望む世界をその手で築けばいいではないですか」

男は無表情のまま女に答えた。

女は男の感情を読み取ることができない。しかし、男の言葉に満足そうに微笑した。

「ふふ、貴方にお話してよかったわ」

女は竹林に視線を移した。その横顔からは、もう憂いの影は消えていた。

囁くもの

COMBINATION長編小説（後書き）

ブログでもランキングに参加しているので、よければ覗いてみてください。
ださい。

囁くもの (2)

二〇〇八年二月十二日。

愛知県警刑事部刑事総務課の犯罪情報分析係の結城は、奇妙な感覚に囚われていた。

先日、発生した殺人事件。その容疑者である少年のパソコン記録から、Q&Aサイトと呼ばれる掲示板を閲覧していたことが判明した。

最近では犯罪者による掲示板への書き込みが増えており、案の定、少年の書き込みがそのサイトからいくつか見つかった。犯行の動機を知る上での重要な手がかりとして、捜査本部はすべての拾い出し作業を行った。

今後とも掲示板への犯行予告や犯行の動機に繋がる書き込みなどが増えることを想定し、それらをデータベース化する作業に結城はここ数日追われていた。

その時だった。

既視感――。

パソコン画面を見つめながら結城は首を傾げる。なんだ、この感じは。何かが引っかかる。唸っていると、「何か悩みでもあるのか？」と隣の席の佐竹が声をかけてきた。

「悩み？ いや、特にないけど」

「だって、食い入るように見てただろ？」佐竹は俺のパソコン画面を顎で指す。「悩みでもあるのかと思ったのに。残念」

何が残念だ。

結城は佐竹をひと睨みし、「南区の事件の、例の容疑者の書き込みを見てたんだ」とここ連日のオーバークのせいで岩のように硬くなっていた肩を解しながら言った。

「なんだ、つまんねえな」

佐竹は笑って椅子の背にもたれ掛かった。

メタボリック気味の佐竹の体を支える椅子はギイッと軋む音を立て、まるで悲鳴を上げているようだ。佐竹、人のことは言えないが少し痩せた方がいいぞ。椅子が憐れだ。

「こんなところに書き込むくらいなら誰かに相談するさ。こう見えて友人は多いんだ、俺」

「はっ」佐竹は鼻で笑った。「よく言うよ。いつも俺としか飲んでないじゃねーか。それに、知り合いには言い難い悩みとかだってあるだろ？言っとくが女の相談なら受けてやってもいいが、借金の相談はお断りだ」

「安心しろ。そんな相談、誰もお前にしないさ」

結城が呆れて言うと、佐竹は大げさに首を振ってみせた。

「俺の魅力を解ってねえなあ」

「お前こそ、自分のこと解ってねえなあ」

「ほっとけ。お前よりかは、ましだったの」

メタボリックの奴に言われたくないな。

結城は佐竹の真似をするように大げさに首を振り、「俺は既婚者、お前は独身。ご愁傷様」と胸の前で手を合わせた。

「腹立つ奴だな。心配してやってるのによ」

さっき残念とか言ってなかったか。

「そりゃ悪かったな。でも顔も名前も判らない人間に相談して、まともな返答がくるとは思えないんだよな、俺」

佐竹の椅子は相変わらずギイギイッと悲鳴を上げて耐えている。いつ壊れてもおかしくない椅子に、子供が小さい頃に一緒によく遊んだ《黒ひげ危機一髪》のスリルに似ているな、と結城はつまらないことを思った。

「馬鹿だな。顔が見えないからこそ、遠慮も建前もなしに気兼ねなく会話ができるんじゃないか」

結城の心配をよそに佐竹は一層椅子の背にもたれ掛かり、気持ちよさそうに伸びをした。

「そういうものかね」

「そういうものなんだよ、今の世の中。お気軽、お手軽。それが一番」

「確かに情報を得るには手軽で便利だけどな。でも俺は、こういう顔の見えない繋がりにはあまり好きになれないな」

佐竹は、「古いな、お前」と苦笑した。

「古くて結構。お前みたいに新しいもの好きじゃないんだよ」

「こんな仕事選んでおいて苦手ってのはどういうことかね」すぐに佐竹は首を傾げた。「でもお前、普通にネット利用してるじゃん。さっきだって調べものしてただろ？それを載せてるのも顔の見えない赤の他人だぞ」

「あー、説明が難しいんだよな」結城は少し考え込み、「えーとな、俺の中では辞書で調べるのとウェブ上の情報を検索するのは土俵は違えど行為は同じなんだよ。もちろん辞書と違ってウェブ上にある情報は、素人が俄知識で載せてるものも多いから選別しなくちゃいけないけどな。俺にとっては大容量の電子辞書を引いている感覚なんだ。だから、ソレは大丈夫なんだよ。俺が苦手なのはインターネットコミュニティ。掲示板だのSNSだのっていうアレだ」

佐竹は腕を組んで唸り声を上げた。

「さっぱり解らん。そのQ&Aサイトだってお前の言う辞書にならないか？これだってインターネットコミュニティだぞ？」

「だから俺もうまく説明できないんだよ。すべてを否定している訳じゃないし。漠然とした不安みたいなのがあるんだ。――この仕事してるとき、他人よりネット世界の〈陰〉の部分がよく見えるだろ？人の悪意とか邪な欲望とかさ。だからかもしれない。怖いんだ。……なんかさ、底なしの闇に引きずり込まれそうな得体の知れない不安に襲われるんだ。お前は感じないか？」

佐竹は顎を摩りながら、しばらく黙考する。結城は佐竹の答えを静かに待った。

「まあ、この仕事してりゃ人間の腐った部分や誘惑に負けて堕ちた

人間を嫌でも目の当たりにするからな。個人を特定されかねない情報垂れ流してる奴とか見つけると、怖いもの知らずだな、とは思ったりするけど俺自身はあんまり感じたことはないなあ」

「……そうか」

オプティミストの佐竹らしい。

「神経質になり過ぎなんだよ」

「危機回避能力が優れていると言ってくれ」

「はいはい」

おざなりに返事をしながら、佐竹がパソコン画面を覗き込んでいた。内容が気になっていたのである。しかし、すぐになんともいえない顔になり大きな溜め息を漏らした。

「なんだこれ。そんなことまで自分で決められないのか？」

「みたいだな」

「あほらし。仕事しよ」

佐竹はそう言って自分のパソコン画面に向き直った。

彼が呆れるのも無理はない。書き込みの内容は、自分はこの大学に入学したらいいか、というものだった。そしてどの大学が人気が高いか、単位が取りやすいか、そんな薄っぺらな内容がダラダラと書き込まれていた。

こんなところに書き込むよりも、学校の進路指導室に行った方が手っ取り早いだろうに。まあ、この少年の場合は、大学に何をしに行くつもりなのか、まずはそこから考えるべきだろうけれど。

少年の書き込みに対し、ほとんどのコメントが少年の考え方の甘さを諷め、結城と同じように進学することの意味を考えた方がいい、と助言していた。それらのコメントに少年は返信をしていない。自分の欲しい返事がなかったからか、返信すること自体が面倒だったからかは判らないが、コメントに返信するのは最低限のマナーだ。それすらできていない彼に、結城は顔を顰める。

少年はその後何度か書き込みをしていたが、相変わらずコメントに返信することはなかった。そんな彼の書き込み内容が一変した

のは、一月の中旬頃だった。

センター試験を終えたその夜、今まで進学を賛成していた両親が急に経済的な理由から進学を諦めるように少年に言ってきたそうだ。「青天の霹靂とはまさにこのことだ」と彼は書き込んでいる。

それに対し「お金を出すのは両親なのだから諦めるべきだ」「進学はいつでもできる」「そこまで勉強がしたいのなら独学すればいい」といったものから、少年に対して同情を寄せるコメントがいくつか寄せられていた。

その中で、少年からの返信がついているコメントがひとつだけあった。

その青年——実際、本当に青年かどうかは判らないが——は奨学金制度について解り易く説明し、両親を説得することを勧めていた。最後は「頑張れ」と励ましの言葉で締め括られており、奨学事業を行っているいくつかの団体のURLも添付してあった。

その青年に対してのみ、少年は返信をしていた。「ありがとう」と。

その後も、少年と青年とのやり取りが毎日のように続いていた。青年のコメントは的確で、他のコメントのようにブレがない。日を追う毎に、少年が青年に信頼を寄せていくのが彼の書き込みからも見て取れた。

囁くもの (2-1)

結城自身も、この青年に好感を抱き始めていた。さっきまでそれほど怖いだの言葉だけでは信用できないだのと言っていたのに、と自分でも不思議に思うのだがやはり上手く説明できない。

考えれば考えるほど絡まった糸のように頭の中が混乱し、訳が判らなくなる。だから、いつも考えることを放棄していた。こんなことを言ったらまた佐竹に飽きられるな、と結城は肩を竦めてみせる。彼らの最後のやり取りは、両親はどうして進学をさせてくれないのか、という少年の嘆きに变化していた。こんなに自分は進学を望んでいるのに、と少年は悲嘆に暮れている。

青年はそんな少年に、諦めてはいけない、と励ました。望みを捨ててはいけない、と。両親だってきつと解ってくれる。だから夢を諦めてはいけない、と励まし続けた。

そのやり取りの翌日、少年は両親を刺殺して逮捕された。

なんとも後味の悪い事件だ。少年は逮捕後「俺は両親に愛されていなかった」と答えている。自分の望みを否定した両親。自分のことを愛していないから進学を反対したのだ、というあまりに短絡的な考えで彼は両親を殺したのだ。

青年のことを結城は考える。

すべてが無駄に終わった。きっと青年は、少年からの書き込みがなくなったことにあまり深く疑問には思っていないだろう。結果がどうなったのかが気になるくらいで、よもや両親を殺して逮捕されたとは考えもししていないはずだ。当然だ。知らなくていい。知らない方がいい。

ふと、その青年のハンドルネームを見て、結城はまた既視感に襲われた。

——Michael

前にも見た覚えがある。

まさか――。

結城は、これまでに集めたデータに急いで目を通した。まさか、そんなことがあるわけない、と心の中で自分に言い聞かせ、カーソルを動かしていく。

「そ、んな……」

結城は絶句し、パソコン画面から視線を逸らすことができなかった。ゾクリと背筋に悪寒が走る。

数人の容疑者の書き込みに、Michaelからコメントがついていたのだ。

しばらくパソコン画面を呆然と見つめていた結城は、書き込まれているのがすべて同じQ&Aサイトだということに気づき、安堵の表情を浮かべる。

なんだ、驚かせるなよ。同じサイトなんだから、Michaelのコメントがあっても別におかしくもないじゃないか。ホッと胸を撫で下ろしつつ、結城はMichaelのコメントにもう一度目を通す。別段、不審な点は見当たらない。親殺しの少年の時と同様、Michaelは彼らの書き込みに真摯にコメントしていた。

画面に表示されたMichaelのコメントを見つめながら、結城は目を細める。

もしMichaelが真実を知ったとしたらどう思うだろう。驚愕。苦悩。絶望。もうこの掲示板に、このネットの世界に、足を踏み入れなくなるだろうか。

「どうした、難しい顔して」

佐竹が体を結城の方に向けたと同時に、ギューッと椅子がおかしな音を立てた。もう限界が近いのかもしれない。

「あのさ」

「なんだ？」

「椅子、壊れそうだぞ」

「ん、そうか？」

佐竹はあまり気にならない様子で椅子を左右に動かした。そのたびに椅子はギイギイツ悲鳴を上げる。

「そうかって……すごい音出してるだろ」

「まだ大丈夫だろ？壊れてないし」

俺は物持ちがいいんだ、と佐竹は笑った。椅子が嫌がってるんだよ、と結城は思ったが口に出すのを止めた。何を言っても無駄な気がする。

「なんだよ、そんなことで難しい顔してたのか？暇だな、お前」

「んな訳ないだろ。――実はさ」

佐竹に、Michaelについて意見を求めることにした。俺よりもコイツの方がこういうことには詳しい。

少し考えてから佐竹は、「偶然だろ。ただの世話好きな奴なんだよ。まあ、結果がコレってのは可哀想だけどな」と顎でパソコン画面を差した。

「だよな」

結城はホッと胸を撫で下ろす。

「それにしても、真面目な奴だな。天使を名乗るだけあるな」

「……何って？」

彼の口から不釣り合いな言葉が飛び出した。

「だから、天使。エンジェルだよ」

聞き間違いではなかった。結城は口を開けたまま佐竹を見つめる。

「あれ、知らないのか？大天使ミカエル。天使の中で一番偉いんだ、確か」

「……なんでお前がそんなの知ってるんだ？気持ち悪い」

「失礼な。これくらい常識だよ、常識」

「女か？」

「違うって」

その話はやめやめ、とでも言うように手をひらひらと振り、彼は自分の仕事を再開させた。やっぱり女か、とニヤリと笑い、結城はMichaelのコメントに視線を戻した。

確かに、悩める者に救いの手を差し伸べる Michael は天使そのものだ。現実の世界で聖職者でもやっているのか。それとも神学校の学生か。坊さんってことはないよな。

結城は、この奇特的な青年に興味を持ち始めていた。混沌としたこのネット世界を、Michael がどんな風に見ているのか知りたかった。もしかしたら、自分の中にあるこの得体の知れない不安も消えてなくなるかもしれない。そんな思いが自分の中に生まれていた。

「書き込んでみようかな」

パソコン画面を見つめながらボソリと呟く結城に、佐竹が訝しげな顔をした。

「嫌いなんじゃなかったか？」

「好きじゃないだけだ」

「同じだろ」

「うるさい。そうじゃなくて、この Michael に興味があるんだ」

佐竹は少し考え、「コメントさせるのか？」と訊いてきた。

「そう。Michael と少し言葉を交わしてみたい」

「へえ、面白そうだな」佐竹が楽しそうに笑いながら身を乗り出してきた。「俺も手伝ってやるよ。――で、どんなことを書き込む？」

「そうだな……コメントしやすい内容の方がいいよな。よくある話。色恋の話とか」

「お前に縁のない話だな。書けるのか？」

佐竹が失笑する。

「お前に言われたくないよ」

「うるせっ。お前よりは数をこなしてるさ」

「ああ、天使の彼女か」

「えーと、何にしようか？嫁さんが小遣いをケチる――とかどうだ？よくないか？」

佐竹が慌てて話題を変えた。凶星か。これは面白いな、と結城は

含み笑いする。ところで――

「それ、うちの話じゃないか」

「お前んとこ、恐妻家で有名だもんな」

ひひ、と佐竹が笑う。さっきの仕返しらしい。

「ほっとけ」

「いいじゃねえか、本当に相談してみれば。これを機に見方が変わるかもしれないぞ。小遣いアップの情報も手に入るし一石二鳥だろう？それにQ&Aサイトなら、他の掲示板よりソフトなコメントが多いからお前でも大丈夫だって。じゃあ、小遣いの話で決まりだな」
そう早口で捲し立てた佐竹は両手を胸に当てて体をくねらせた。「青年に解るかなあ、この切ない気持ち」

「気持ち悪い動きをするな。お前だって解らないだろ」

「ふふん、楽しみだな」

ニヤリと笑う佐竹に、結城もつられて笑みを浮かべた。

囁くもの (3)

家に帰ると結城は早速書斎に向かった。机の上のパソコンを立ち上げ、鞆からメモを取り出す。

掲示板を利用するのは初めてだった。少し緊張しながらMichaelが利用しているQ&Aサイトに登録をする。

ハンドルネームは、佐竹が考えた〈杞憂の人〉。結城のフルネーム〈結城仁〉をもじって作ったものだが、自分の性格ずばりそのもので驚いた。何か宿命的なものを感じ、余計に落ち込みそうになる。気が重くなる中、結城は掲示板に佐竹と二人で考えた文章を打ち込んだ。

小遣いのやり繰りについて

はじめまして。

毎月三万円の小遣いで過ごしている杞憂の人と申します。

みなさんの小遣いのやり繰り方法を教えていただけませんか？

ちなみに私の小遣いの内訳は、

コーヒー代

昼飯代

交際費

雑費

煙草は結婚を機に止めました。頑張ってやり繰りしているのですが毎月厳しい日々を送っています。

妻は専業主婦で、昔は弁当を作ってくれましたが今はほとんど食堂やコンビニ弁当の日々です。今年、中学生になる息子が一人おり、色々と物入りになるので今の小遣いの範囲内でやり繰りをしたいと考えています。

よろしく願います。

改めて読むと、あまりの中身の無い文章に気恥ずかしくなった。家の内情を曝け出すようで書き込むのを躊躇する。

あの少年のものよりひどいではないか。よくこんなのを考えついたな、と結城は自分に呆れた。

こんなふざけた書き込みはMichaelはコメントしてくるだろうか。逡巡しながらも結局、結城は書き込みをする。

どうせ誰からのコメントもつかないだろう。結城はアホらしくなって立ち上がり、隣のリビングでテレビを観ている妻の許へ向かった。

「遅かったわね、ご飯は？」

「食ってきた」結城はソファに腰を下ろし、ひと息つく。「隆也は？」

「塾」

壁の時計に目をやると午後十時半を回っていた。

「遅くないか？」

「いつもこれくらいの時間よ」

妻は気にする様子もなくテレビ画面を観ている。

「そう、か。――迎えに行こうか？」

「友達も一緒だから大丈夫よ」

「でも今は物騒だし」

先月、隣の区で女子高生が通り魔に襲われた事件があったばかりだ。

「大丈夫よ」

妻の返事に被さるように「ただいまあ」と玄関から息子の声が聞こえた。

「ね、大丈夫だったでしょ？」妻はちらりと結城を見てから、「隆也！部屋に行く前にお風呂に入りなさい」

「はい」

元気な声が返ってくると、妻は再びテレビ画面に視線を移した。

画面の中ではイケメンと呼ばれている若手俳優が殺人事件を颯爽と解決しているところだった。新聞を見ると「警備員の事件簿5」施錠されたビルの屋上で殺人事件発生！――とあった。

くだらない……実際に民間人が事件捜査なんてできやしないのに、しかもシリーズ化しているのか、コレ。

結城はご都合主義のドラマに辟易し、新聞をテーブルの上に投げ置いた。ひと息つき、隣の妻に話しかける。

「なあ」

「何？」

「小遣い上げてくれて言ったら上げてくれるか？」

「五百円くらいなら」

あまりの少額に冗談かと思ったが、彼女は何事もなかったようにテレビ画面を観ている。

――本気なのか。

「お前な……俺は小学生か」

「だって今年は隆也だって中学に上がるし、出費が多いからお父さんに回せないのよ」

不満そうな顔で結城を睨み、家計の苦しさを訴えてきた。いつもこれだ。

「それにしても五百円は少な過ぎるだろ」

「五百円でも上がるだけ感謝してよ。あなた、隆也のことが大事じゃないの？」

「――わかったよ」

結城は撫然としてソファから立ち上がる。まだ何か言いたげな妻の前を通り過ぎ、キッチンの冷蔵庫から缶ビールを一本取り出した。いつも子供のことを出されて話は有耶無耶になって終わるのだ。そんなに生活が苦しいのならお前だって働けばいいのに――そう思うが言わない。自分の収入の少なさについてグダグダ言われるのがオチだからだ。

リビングに戻る気もしなかったので、もやもやした気持ちを抱え

たまま結城は再び書斎に向かった。

囁くもの (3) (後書き)

ブログでもランキングに参加しているので、よろしければそちらの方も投票していただけると嬉しいですよ。
よろしく願いいたします。

囁くもの (3-1)

パソコンの前に乱暴に腰を下ろし、ビールを一気に呷る。そして目の前の壁を見つめながら結城は佐竹の言葉を思い出す。

「切ない、か」

解ったようなことを言っていたが、アイツにこの気持ちは解りはしない。結城は自嘲気味に笑った。

家族の為——その一心で、朝から晩まで働いてきた。結婚してからは家族との時間を確保する為に趣味の釣りを止めた。煙草も止めさせられた。毎日遅くまで残業し、休日は疲れた体に鞭を打って家族サービスに専念する。少ない小遣いで毎日やり繰りしながら、時々、佐竹と飲みに行くのが唯一の楽しみだった。

漫然と日々を過ごし、平穏ながらも安定した生活を送ってきた。けれど、時折思うのだ。

家族にとって自分は何なのだろう——。

そう思うたび、結城は呼吸するのが苦しくなるほど胸が締めつけられた。ブリザードのような淋しさが心に吹き荒び、訳もなく泣き叫びそうになることもあった。

昔のように息子と会話をすることもなくなった。最近では顔を合わさない日もある。妻とも会話をすれば喧嘩ばかり。それでも一緒に暮らし、毎日が過ぎていく。

いったい家族とはなんだ。自分はなんの為に——

「くそっ！」

結城は苦しげに顔を歪め、乱暴に髪を掻き毟った。

小遣いが少ないから切ないんじゃない。恐妻家だから切ないのでない。なんの為に自分が今ここに存在しているのか、判らなくなる——切ないのだ。

「独身のお前が羨ましいよ、佐竹」

結城は手許の缶ビールに視線を落とした。ぼんやりと空っぽにな

った缶を見つめ、気怠そうに顔を上げると諦めたように首を振った。考えることを放棄する。これ以上、虚しい気持ちになるのは嫌だった。それに、何より考えるのが怖かった。

「……怖い？」

一瞬考えるが、すぐに首を振る。そして気を取り直す為にさつき書き込んだ画面を開いた。

「あっ」

思わず声が出る。自分の書き込みにいくつかのコメントがついていたのだ。

まだ書き込んで三十分も経っていないのに。不安になりながら、おそろおそろ書き込まれたコメントに目を通す。

そこに書き込まれていたのは、同じように少ない小遣いで苦しんでいる人たちからのやり繰りの方法や励ましの言葉だった。その中には自分よりも少ない小遣いでやり繰りをしている人からの励ましもあった。

何より驚いたのは、妻の立場である女性からの意見がいくつもあったことだ。しかも批判的なものではなく、主婦としての節約方法、自分の亭主のやり繰りの方法などを紹介してくれていた。

結城はしばらくの間、黙ってそれらのコメントに見入っていた。そして、おもむろに目頭を押さえ、「情けない」と呟いた。

彼らの言葉が有難かった。救われたと言ってもいい。たとえ気休めだと解っていても、彼らの言葉を素直に受け入れることで折れかけていた心が楽になることができたのだから。

結城は気合いを入れるように頬を数回叩き、再び画面に目を向ける。すると新しいコメントがついていた。

——Michaelだ。

結城は画面に顔を突き出し、Michaelのコメントに目を通す。

はじめまして。

小遣いのやり繰りですが、月三万と括るのではなく、一日に使う金額を決めておくといいと思います。

そうすれば残りを交際費や雑費に充てることができ、急な出費にも対応できるので。

参考になればいいですが。

では、失礼します。

「なるほど」

結城は思わず呟く。これならば実行できそうだ。他の人もそうだが、皆色々と工夫をしていることに感嘆する。何もしないで文句を言っていただけの自分が恥ずかしく思えた。

「みんな、頑張ってたんだな」

ポツリと呟き、結城は天を仰いだ。何を考える訳でもなく、ただぼんやりと黄ばみがかった天井を見つめた。そして深く息を吐き出すとパソコン画面に視線を戻した。すると、Michaelからコメントがついていることに気付いた。

#9です。再度失礼します。

小遣いを増やしたい、ではなく家族の為に今の小遣いで上手くやり繰りしようとしている杞憂の人さんは優しいお父さんなのでしょうね。

弁当のこと、奥さんにもう一度頼んでみてはいかがですか？

Michaelのコメントに目を通した結城は目を伏せ、口許を歪ませる。

——やはり、彼にも無理だったようだ。自分のこの苦しみは、誰にも分かつてはもらえないのか。

突如、襲ってきた孤独感に押し潰されそうになった結城は、乱暴に髪を掻き毟ると机に思い切り拳を叩きつけた。

自分ばかりがどうしてこんな思いをしなきゃいけないんだ。アイ

ツは主婦連中とランチやなんやで好き勝手しているのに。
結城は苦々しげに舌打ちをする。

今度、頼んでみます。でも無理だと思います。うちは恐妻家なので私の意見はなかなか聞き入れてもらえません。なので、私は優しい訳ではありません。

ありがとう。

また、もやもやとしたものが腹の底に溜まり始めていた。自虐的な文章をMichaelに返信し、結城は椅子の背に深くもたれ掛かる。

もう何も考えたくない。今日はここまでにしよう。画面を閉じようとした時、再びMichaelからコメントがついた。

#9です。何度も失礼します。

夫は家庭を支える為に外で働き、妻は家を守る為に強くなると言いますよね。

けれど夫婦が対等の関係でなくなれば、その強さは〈暴力〉になると思いませんか？

〈鬼嫁〉〈恐妻（家）〉は普通に世間に定着しているけれど、夫が同じ行為をすれば〈DV〉という犯罪として扱われかねない。

それがどうも納得できないのです。男であれ、女であれ、傷つかない人はいないはず。家族といえど〈思いやり〉を忘れてしまえば関係は破綻してしまいます。

奥さんと話し合ってみてはいかがですか？逃げ腰になるのは得策とは思えません。

生意気なことを言って、すみません。

結城はパソコン画面をじっと見つめ、噛みしめるように何度もMichaelのコメントに目を通す。腹の底に溜まっていたもやも

やとしたものが、雪が解けるようにじんわりと消えていくのを感じた。

結城はキーを叩いた。M i c h a e l に返信する為に――。

囁くもの (3-1) (後書き)

ブログの方でもランキングに参加しているので、よければ投票していただけると嬉しいです。

囁くもの (4)

辺りは静寂に包まれ、空にはヴェールを纏ったようにぼんやりとした月が浮かんでいた。

名古屋市緑区の東側に位置する新興住宅街、桜花台。

名前の通り、春には住宅街の中央にある公園の桜が満開になり、辺りは桜色に染まる。地元でも有名な花見の名所になっており、春になると多くの人で賑わいをみせる。

その住宅街を少し東に進むと、隣接する東郷町との境界にもなっている巨大な竹林が姿を現す。その竹林の脇にある細い県道に等間隔に置かれた古びた街灯は、その役割を半分も果たしてはいなかった。

薄暗い明かりは道を仄かに照らすのみで今にも夜の闇に取り込まれそうになっている。ぼんやりとした明かりが浮かんでいるその先は、まるで冥府にでも繋がっているのではないかと思わせるような不気味さがあった。

「最高」

うつとりしながら呟くと、道路脇にある一軒の家をライトが照らし出したのが目に入った。竹林に囲まれ、ぼつんと一軒だけ建っている家。

山口は「こんな場所に？」と一瞬訝しんだがすぐに意識は車に戻った。

やっと手に入れた車、BMW 3シリーズのカブリオレ。

狂おしいほど完璧で繊細なボディ。初めて見た時から絶対に手に入れてやると心に決めていた。その願いが今日叶ったのだ。征服感に酔いしれながら、手に入れたばかりの愛車の乗り心地を堪能していると急に目の前に人が飛び出してきた。

「おいっ！」

慌ててブレーキを踏み、素早くステアリングを左に切る。衝撃と

共に、ガリガリッという今この世で最も聞きたくない鈍い音が耳に届いた。

「嘘だろっ?!」

山口は慌てて車から飛び出し、辺りを見回すが人影はなかった。祈る気持ちで車体を覗き込むと、頭を抱えてその場にへたり込んだ。車体側面は見る影もない状態で擦れた痕にガードレールの白い塗料がこびりついている。バンパーは無残にひしゃげ、ヘッドライトやフォグライトのプラスチック片が粉々になって辺りに散らばっていた。

「くそつたれっ!」

数時間前に納車されたばかりの愛車。酔いしれた至福の時は、一瞬にして悪夢へと変わった。

「逃げやがったのか?! ふざけんな、出てこいよ! ばかやろう! ていうか、こんなところにガードレールなんか付けてんじゃねえよ!」山口は悔しさのあまり大声で叫び、ガードレールを思い切り蹴飛ばした。「畜生! なんなんだよ!」

乱暴にジャケットのポケットから山口は携帯を取り出すと、さっき登録したばかりのBMWのエマージェンシー・サービスに電話を入れる。

こんなことってないよ、神様。嘘だと言ってくれ。

山口は白い息を吐きながら天を仰ぐ。すぐにオペレーターと電話が繋がった。

「えーとですね、事故りました。今日、納車だったんですけど保険って適用されますよね?」

オペレーターの質問に答えながら、山口はライトに一瞬浮かび上がった女の顔を思い出す。

あれは——本当に人間だったのだろうか。

一瞬ライトに浮かび上がったのは、血の気のない、まるで人形のように整った顔立ちをした女だった。

囁くもの (5)

「平和だね」

「平和ですね」

「ほんとだな」

まるで縁側で日向ぼっこしている老人のような会話だが、ここは愛知県警本部の刑事部の一角に設けられたコーヒー飲み場で、俺たちは刑事だ。

「なんか、じじ臭いな。俺ら」

「ほんとだな」

さっきと同じ言葉で返すのは、二課の猪又。

実はこの男、俺が異動してくる少し前まで捜査一課強行犯捜査係の篠原班で田村とコンビを組んでいた。田村と反りが合わず結局二カ月で他部署に異動していったのだが、半年前、再び捜査二課の刑事として戻ってきた。だから未だに田村とは仲が悪い。というか、一方的に田村を毛嫌いしている。

「いいんじゃない、刑事が暇なのは喜ばしいことだよ」

班の先輩である若林は、そう言ってコーヒーを美味そうに飲んだ。目鼻立ちが濃く、男性的な顔立ちの猪又とは対照的な甘いマスクの持ち主の若林。忙殺される日々の中でも人一倍身なりに気を使う、女の子が大好きな人間で県警一のタラシでもあった。

「でも、書類は山のように溜まってますけどね」

書類が山積みされた自分の机をげんなりと見つめる俺、望月修平。四月に篠原班に配属されたばかりの新米刑事だ。

そして俺の隣の席で机にうつ伏せになって寝ている奴が、俺がコンビを組んでいる田村恭一。端正な顔立ちをしているが、いつも無表情で何を考えているのか解らない男。それにしても毎回思うのだが、寝ているアイツに誰も何も言わないのは何故だ。今、仕事のはずなのに。

「お前、溜め込んだなあ」

呆れる若林の隣で猪又が、「田村の机に黙って置いちゃえよ」と田村の背中を顎で差した。

「それ、前にやった。しかも無視されてあとで痛い目にあった」

「経験済みか」若林が苦笑した。「まあ、溜め込むお前が悪い」

「警部が俺の机に自分の書類を紛れ込ませるんすよ。って俺も人のこと言えないけど」

俺は肩を竦めてみせる。

「あ、それ俺も昔やられたなあ。まだそんなことやってたんだ、あの人の人」

「そうなんすか？ どう回避しました？ 無視したら駄目ですか？」

俺も必死だ。

「新人が来るまでは続くな。あの人も無視し続けるから質悪いんだよな」

「そんな。……新人っていつ来ますかね？」

「お前来たばかりだし当分ないだろうな。頑張れ」

若林が親指を立てた。満面の笑みでいかにも楽しんでいる様子だ。他人事だと思ってひどいな、と唇を尖らせた時、あることに思い至る。若林も被害に遭ったということは――

「じゃあ、田村も同じ目に？」

「ああ、いや」若林は、くっくっと思いついたように笑い出した。

「アイツはお前の時みたいに無視し続けたのさ。あれは笑えたなあ。さすがに業を煮やした警部が慌てて書類片づけてたよ」

「……田村、すごいな」

あの篠原に勝ったのか。

「ふん、そのまま異動させればよかったのに」

実直そうな太い眉毛を歪めながら、猪又は面白くなさそうにコーヒークップを口に運ぶ。

無茶を言うな。どう考えても田村は悪くないだろ。

「猪又も執念深いなあ、面白いけど」

若林が肩を揺らして笑っていると、「おーい、その暇そうな御三家」と声がした。振り向くと、今話していた俺たちの上司である篠原が、ニヤニヤしながらこっちを見ている。俺たちのことか。けど御三家って。いつの時代だ。

「なんですか、警部」

「おう、望月。特に用はない」

「用はないって、そんな。じゃあ、なんで声をかけたんですか」
思わず情けない声が出た。

「暇だから」

「……そうですか」

「ところで、お前ら仲いいな」

「普通ですよ」

「お前ら見ていると昔の俺らを思い出すな」

間宮が篠原の机に腰かけながら、あの頃は楽しかったなあと懐かしむように目を細めた。

坊主頭で眼光の鋭い間宮は、さすが暴力団を相手にする捜査四課——のはずなのに毎日のようにうちに来ているのは何故だ——にしているだけあって迫力がある。県内でも屈指の柔道家なのだが娘命のバカ親でもあり、よく娘のことで同じ愛娘家である捜査一課長の小林警視に泣きついていた。

そんな間宮をよくからかっているのが篠原だった。利己主義の篠原に間宮だけでなく俺たちも毎日のように振り回されていた。頭の回転の速さと巧みな話術を持ち合わせており、それを自分の為に余すことなく使う人である。

「まーさんや篠さんはいいよ。好き勝手やってたんだから」

テノールの穏やかな声でそう言うのは、俺がもつとも信頼を寄せている先輩刑事の藤堂だった。彼は無造作に伸ばした前髪をかき上げながら、「周りがどれだけ大変だったか」と大きな溜め息をついた。

篠原たち三人は、中学から大学までずっと一緒に過ごしてきたそ

うだ。そのまま職場まで同じなんて仲良過ぎるにもほどがあるだろう、と初めて聞いた時には呆れたものだ。きっと、これまでにこの二人は藤堂に多大な迷惑をかけてきたのだろう。今の彼の大きな溜め息がそれを物語っている。

そしてこの三人を警察に誘ったのが、何を隠そう大学の二年先輩で柔道部主将だった小林捜査一課長だった。恐ろしい話だ。普通のテニスサークルでよかった、俺。

「藤さん、好き勝手していたのはまーさんだけで俺は違うぞ」

篠原が短く刈上げた頭を撫でながら心外そうに反論した。

「馬鹿言え、お前の方がよっぽど酷かったじゃねえか。高校の文化祭でお前が何をしたか、忘れたとは言わせんぞ！」

今にも飛びかかりそうな勢いで間宮が篠原に食ってかかった。どうでもいいが高校の話を未だに持ち出すのもどうかと思う。四十過ぎているというのに。

「忘れた」

「お前っ、このやろ！」

篠原と間宮は、お互いの学生時代の悪さを罵り合い始めた。よく警察官になれたな、と本気で呆れていると、藤堂が額に手を当て、手に負えないと言うように小さく首を振った。

「俺ら、あんな感じなのか？」と不安げな猪又。

「なろうとしても無理だろ」

その内の一人が上司だなんて悲しすぎる。

「だよな。それにしても藤堂さんって本当にすごいよな」

悪ふざけが過ぎた二人を窘めている藤堂を見つめながら、俺たち三人は頷いた。

さて仕事に戻るか、とカップを置きかけたその時、席を外していた小林が部屋に入ってくるなり篠原の名を呼んだ。――その瞬間、今まで和やかだった空気が独特の緊張感に変わる。

席に座る小林の横に立った篠原は先ほどとは別人のような真面目な表情で、時折、相槌を打ちながら小林と何か話し込んでいる。――

「おそらく、捜査本部の設置が決まったのだろう。やっぱりな、と俺は心の中で呟く。

「緑署に行くぞ」

小林の席から戻るなり、篠原が俺たちに告げた。

――あ。

ほんの一瞬だけ見せた藤堂の悲しげな表情を俺は見逃さなかった。前にも何度か見たことのある表情。

「また書類が山積みされてくな」

若林と猪又が面白がるように言った。二人は藤堂の表情に気づいていないようだった。

「山積みのチョコだったらよかったのにな。そういや、お前チョコもらったか？」

笑い合う二人を恨めしく睨みつけ、いつの間に起きたのか上着を片手に部屋から出ていく田村のあとを追って俺は廊下に走り出た。うしろから若林もついてくる。

俺たちは県警本部の地下駐車場へと向かう。

「やっぱり殺しだったな」

若林が言った。

「そうですね」

地下駐車場に着くと若林はビートルに乗り込み、俺は田村のデミオに乗り込んだ。シートベルトをかけながら、「また、いつもの始まりだな」と運転席に座る田村に声をかける。

「さっさと終わらせるさ」

田村はエンジンをスタートさせ、俺たちを乗せたデミオは地上へと向かって走り出した。

囁くもの (6)

名古屋市緑区にある緑警察署の講堂に設置された捜査本部。

入口には「ピアノリスト殺人事件捜査本部」と筆書きされた看板が取り付けられ、緑署の職員たちが準備のため忙しく動き回っていた。

俺は手許の捜査資料を見ながら、「なあ、そんなに有名なピアノリストだったのか？」と田村に尋ねた。

母親がピアノリストで田村自身もピアノが趣味だと前に言っていたから、知っているかもしれない。

「数年前の浜松国際ピアノコンクールの入賞を皮切りに、国内外のコンクールで上位入賞を果たしていた実力派だ。遅咲きのピアノリストとも言われていた。少し前に大きな国際ピアノコンクールで金賞を取って凱旋帰国したニュースがあっただろ。年齢も年齢だったから大きく取り上げられていたじゃないか」

捜査資料に目を通してながら田村は言った。やっぱり知っていたか。でも、そんな言われてもさっぱり解らんよ。

「あー、そういえば、あったな。そんなニュースが。確か、コンクール後のコンサートチケットが数秒で完売とか何とか。けど彼女が名古屋に住んでいたとは知らなかった」

ちようどその頃、大きな事件を抱えていてニュースを観ている暇などなかった。田村は観ていたみたいだが、そこは深く考えるのはよそう。

「演奏する時くらいしか表に出てこなかったからな」

「へえ。気難しい人だったのか？」

住宅街から離れた一軒家に住んでいたと聞いている。ピアノの音を気にすることだと勝手に想像していたが違ったのか。考えてみれば防音設備くらい整えているか。口に出さなくてよかった。

「さあな。それに――」

急に田村が言葉を止めた。もう会議が始まるのかと思ったが、まだデスク席では篠原たちが頭を寄せ合っていた。

「それになんだよ」

肘をつきながら田村はちらりと俺の顔を見た。

「数年前に左耳の聴力を失っていたから、それもあるかもな」

「……それで演奏なんてできるのか？」

「努力したんだろうな」

田村は短く答えた。

「そうか。――と、始まるようだな」

捜査本部の指揮官である篠原が正面の席に座るのが見えた。その隣に小林課長、そして緑警察署長ら幹部が並ぶ。ようやく捜査会議が始まるようだ。

篠原から任務編成が呼び上げられる。俺と田村は地取り班――現場周辺の聞き込み担当――になった。

次に、緑署の刑事課長である笹島警部から事件の概要が説明された。

殺害されたのは、佐伯美奈。三十二歳。彼女は全焼した家に一人で暮らしていた。他に家族は、瑞穂区柏木町に住む祖母の佐伯馨と失踪中の双子の妹である美和の二人だけ。両親は二十年前に交通事故で亡くなっていた。

「消防本部の通信指令室に最初に通報が入ったのは、二月十六日の午前一時十四分。火災原因は、窓際に置かれた石油ストーブからカーテンに引火したものと思われる。死亡推定時刻は、二月十五日の午後九時から午前十二時の間。司法解剖の結果、気管部分に煤の付着は見られず、鈍器で殴られたことによる脳挫傷が直接の死因だと判明した。凶器については未だ特定できておらず、現場周辺の捜索も行ったがそれらしいものは今のところ見つかっていない」

今回の事件は、駆けつけた消防隊員が焼け跡から頭部に不審な傷のある焼死体を発見したことから始まった。

検視では、床に接していた為、炭化をわずかに免れていた皮膚に

紅斑がなかったことから、火災前に頭部の裂傷により死亡したと判断された。しかし遺体の損傷が激しく、ピアノの横で倒れていたこともあり、事故か殺人かどうかの判断が難しかった為、司法解剖に回された。そして解剖の結果、殺人と断定されたのだ。

続いて、初動捜査にあたった機動捜査隊から報告が始まる。

「火災発生の一時間ほど前に現場付近で物損事故が起きていました。運転手から二月十五日午後十一時十分に通信指令室に通報があり、緑署の交通課員が現場で事故処理をしています。担当した警官が佐伯家の明かりが点いていたのを覚えていました。事故処理は三十分ほどで終わり、その間、付近で不審な人間は確認していないそうです」

「偶然にしてはタイミングが良過ぎじゃないか？被害者との接点はないのか？」

篠原が訝しそうに尋ねる。

「今のところありません。運転手は豊明市在住の会社員で納車されたばかりの車を運転中、ハンドル操作を誤ってガードレールに衝突したそうです」

「そりゃ災難だ。そんなに見通しの悪い道なのか？」

「緩やかな上り坂になっていますが、まっすぐに伸びた一本道です。ただ辺りは竹林に囲まれているので夜になると視界はかなり悪いです」

「そうか」篠原は隣の笹島に顔を向け、「ところで失踪中の妹からまだ連絡はないのか？」

笹島は頷き、「ニュースを見て連絡してきてもよさそうなんだが」「そうだな。殺されたとなれば普通は連絡くらい寄こすもんだ。――国外にいる可能性も視野に入れて動いてくれ」

「現在、美和の出入国記録を確認中だ」

篠原は頷き、その後も所轄の捜査員からの報告が続けられた。

捜査会議が終わり、捜査員たちが続々と講堂から出ていく中、一人の警察官が血相を変えて駆け込んできた。

囁くもの (6-1)

「おい、どうした？」

笹島が声をかけると、その警察官——どうやら交通課長のようだ——は顔を引き攣らせながら、「運転手の山口が、女が飛び出してきたから事故を起こしたと言いついた」と告げた。

講堂内が騒然となる。笹島に至っては「なっ」と声を上げ、その場に固まってしまった。

俺は田村と顔を見合わせる。もしそれが事実なら、その飛び出してきた女が事件に係わっている可能性が極めて高い。初動捜査時にその運転手にも話を訊いたはずだ。これは初動捜査を行った機動捜査隊と所轄署の失態と言われても仕方がない。

「なんで、今頃そんなことを言い出したんだ！」

笹島は顔を真っ赤にして怒鳴り声を上げた。

「それが運転手は……その、人間とは思わなかったから黙っていたと言っている」

今度は捜査員たちの間に「大丈夫なのか、そいつ」という空気が漂う。

「その運転手は薬でもやっていたのか？」

篠原が呆れたように尋ねると、「いいえ、前はありません。事故当時、飲酒していなかったのも確認しています。まして薬をやっていたのなら、うちの部下が見逃すはずありません」と交通課長はキツパリと否定した。

うちに落ち度はない、と言い張る交通課長を笹島は忌々しそうに睨みつけた。

「まだ署内にいるのか？」

篠原が尋ねる。

「はい。うちで待たせています」

「じゃあ、連れてきてくれないか」

篠原は頭を掻きながら煩わしそうに言った。

講堂から出ていく交通課長を目で追っていると、「若、望月、田村ちよっと来い」と篠原に呼ばれた。

「望月たち地取りだろ。他の地取りの奴らはもう外に行っちゃったから無線で知らせるとして、お前らだけでも当事者の話を聞いてその女について現場で聞き込んできてくれ」

「はい」

しばらくして刑事課の部屋に現れた山口は、居心地悪そうに長椅子に座るとキョロキョロと不安げに辺りを見回した。そして篠原と目つきの鋭い笹島が向かいに座ると顔を強張らせ、「す、すみませんでした！」と勢いよく頭を下げた。

「あの、女のこと黙ってたからここに連れてこられたんですね？」

山口はおそろおそろ顔を上げる。

「ええ。あなたにその女性のことを伺いたくて、こちらに来て頂いたんですよ」

篠原が穏やかな口調でそう言うとき山口は頬を引き攣らせた。

「さっき、交通課のおまわりさんに飛び出してきた女の話したら、ものすごい勢いで怒鳴られたんですよ。偉い人まで出てくるし。あの、もしかして俺このまま逮捕されるんですか？」

お前が悪いんだろ、と言うように笹島は山口を睨んだが篠原は、

「はは、逮捕はしませんよ。安心して下さい」と笑って否定した。

しかし、山口はまだ不安そうに顔を強張らせていた。業を煮やした笹島が口を開きかけたのを篠原が制した。

「それにしても納車されたばかりなのに災難でしたね。車は大丈夫でしたか？」

篠原が尋ねると、「修理にかなり時間がかかるそうです。アレを手に入れる為に今まで頑張ってきたのに……」と山口は力なく答えた。

「車、いいですね。私も車が好きでしてね。よく休日に乗り返してますよ」

篠原の車好きは本部でも有名だ。よく小林と愛車の話で盛り上がっているが、内容が専門的すぎて俺には何を言っているのかさっぱり解らない。

「そうなんですか？何に乗ってるんですか？」

山口は引き攣った頬をわずかに弛ませた。

「RX-7です」

「ああ、格好いいですよ。でも維持費、かなりかかりますよね？」

「ふっ」篠原は鼻で笑い、「この手の車に乗るのなら、それは織り込みずみのことでしょう？それでも難癖をつけるなら乗らなければいい」

「す、すみません」

山口はビクリと肩を震わせた。篠原を怒らせてしまったと思ったのだろう。

「まあ、確かにこの車ほど燃費が悪く、メンテナンスを頻繁に必要とする車はないですね」篠原はニコリと微笑む。「でも気持ちいいですよ、本物のスポーツカーは。ロータリーについては言うまでもないですが、あの排気音は痺れますよ。それに他の追隨を許さないエクステリアは秀逸と言っている。社外パーツが多いから妥協せず自分好みにカスタマイズできるのもいいですし、重量バランスも完璧。ああ、ただ難点を言えば低ブースト時のトルクが細過ぎることとボディ剛性の弱さ、特にフロント部分。あと後方の視界が悪すぎることですかね。インテリアがいまいちだけれど、それは走りに特化しているからしょうがないですね。金のかかる美女と付き合っている感じが近いかな」

気持ち良さそうに愛車について語る篠原に、笹島が咳払いをした。

「おっと、すみません。関係のない話を長々と申し訳ない」

そうは言うが、篠原に悪びれた様子はない。

「いえ、勉強になりました。刑事さん、本当に車が好きなんですね」「ええ、その中でもFDは最高です。色々乗りましたが、あれを超えるものはないですね」

篠原が満足そうに言う。山口は羨ましそうに笑った。

篠原と山口が打ち解けているその隣で、笹島はずっと不機嫌そうにしていた。何、呑気に車の話なんかしているんだ、と思っているのだらう。山口の突然の証言のお陰で所轄署は面目を潰されたのだから、苛立つ笹島の気持ちも解らなくもない。

「さて。お手数ですが、事故当日のあなたの行動についてもお訊きしたいので、もう少しお付き合い下さい」

篠原の言葉に山口は急に顔色を変えた。

「俺、何もしてないですよ！車で通っただけだし、殺された女性だって知らないし！」

自分が疑われているのではないかと山口は思ったらしく、興奮しながら長椅子から立ち上がった。

「落ち着いて下さい。あなたを疑っている訳ではありません。すべての関係者の方にお訊きしていることなのでご理解下さい」

「な、なんだあ。脅かさないで下さいよ」

山口はホッとしたように長椅子に腰を下ろした。そして、だいぶ緊張もほぐれてきたのか饒舌に当日の行動を話し出した。

ディーラーから車を受け取ると嬉しさのあまり何軒かの友人宅に自慢して周り、その後、午後十時半頃まで緑区に住む会社の同僚と食事をしてから、東郷町に住む彼女の家に行く為にあの道を通ったのだという。初めて通った道だったらしく、竹林の脇に一軒だけぽつんと建つ佐伯美奈の家を不気味に思ったそうだ。その直後、女が飛び出してきて事故を起こしたらしい。

「その女性は、どこから飛び出てきたか覚えていますか？」

「事件のあった家の方からです。運転席側から突然飛び出てきたから、間違いないです」

自信満々に話す山口に篠原が無言で頷いた。

「飛び出てきたのはどんな女性でしたか？」

「それが、すっごく綺麗な女だったんですよ！容姿端麗、眉目秀麗、八方美人、なんかこんな言葉ありましたよね。そんな感じです。あ

っ、でも見惚れたせいで事故った訳じゃないですよ!」

山口は興奮気味に捲し立てた。

言いたいことは理解できる。いくつか用法が違うけれど。しかし誰もそれについて突っ込みはしなかった。

「判ってますよ」篠原は頷く。「何か他に特徴はありませんでしたか?」

「特徴、ですか?一瞬だったしな。えーと、背は低かったと思います。あと髪は短かったかな。ジーンズを穿いていてTシャツ……だったような」

山口は頭を少し傾け、記憶を辿りながらぼつりぼつりと答える。どうも意識はすべて顔にいつていたようだ。

「では、その女性がどの方向へ逃げていったか覚えていますか?」

「えー、車のことで頭がいっぱいだったからなあ。それに車から降りて辺りを見回したけど、もう影も形もなかったし。だから幽霊かと思ったんですけどね」

山口は肩を竦めてみせた。

幽霊って。篠原もさすがに苦笑いを浮かべている。その後もいくつか質問を続けたが、彼からはそれ以上の情報を引き出すことはできなかった。

「ありがとうございました。事故は災難でしたが怪我がなくて幸いでしたね。また何か思い出した時は報せて下さい」

山口は、やっと帰れる、と大きく息をついて立ち上がると、「ほんと、災難っすよ。やっぱり神様なんていないんですね」と言って部屋から出ていった。

囁くもの (6-2)

俺たちは少し離れた場所から山口と篠原たちのやり取りを見ていたが、話を聞く限りでは彼が嘘をついているようには見えなかった。もちろん山口の当日の行動と彼と被害者との関係も調べることになるが、彼は事件とは関係なさそうに思えた。それよりも――

「神様ねえ」

笹島が呟いた。いい歳して何言ってるんだ、と言いたげだ。

「存在しないってことが解っただけでもよかったじゃないか」

篠原は立ち上がり、興味なさそうに言う大きく伸びをした。期待していたほど情報が得られなかったこともあり、少々ご機嫌斜めだ。

「若さんは相変わらずですね」

顎に手を当てながらニヤニヤしている若林に向かって俺は言った。

「女の子、好きだから」

「でもその女が犯人かもしれないんですよ。もっと特徴があれば聞き込みも楽なんだけどな」

「犯人かどうかはまだ判らないさ。限りなくクロに近くてもな。あと〈容姿端麗な女〉ってのも結構な特徴じゃないか。頑張ってるかい」

「うっす。ところで里見さんは？」

「今こっちに向かっているそうさ。夜の会議には間に合うだろう」
法事で北海道の実家に帰郷中の捜査一課で唯一の女性刑事である里見は、同期の若林と――最初は年下だと思っていたが――コンビを組んでいた。かなりの美人なのに若林は女性として見ていないらしい。さすがに公私の別を弁えてはいるようだ。

ふと目をやると、田村が無表情でこっちを見ている。早く捜査に行くぞ、という無言の圧力をかけているのだ。解ってるよ。睨むな。
「じゃあ、行ってきます」

田村と部屋から出ようとした時、女性警官がちょうど部屋に入ってきて危うくぶつかりそうになる。慌てて避けると、彼女は俺たちに軽く一礼してから篠原たちに声をかけた。

「佐伯美奈さんのご家族の方がお見えになりました」

心なしに彼女の頬が赤く染まっているように見えた。

「ああ、入ってもらって」

祖母である佐伯馨が緑署に来ることになっていたのだ。笹島と話をしていた篠原がそう声をかけると、女性警官は頷いて部屋から出ていった。入れ替わるように部屋に入ってきた人物に、誰もが――いや、田村はいつもの無表情のままだったが――息を呑んだ。陶器のような艶やかな白い肌。長く伸ばした前髪から覗く、憂いを帯びた漆黒の瞳とバラのつぼみのような小さな唇。

――〈聖女〉とは、この少女のことをいうのかもしれない。

目の前に佇むビスクドールのような美少女を見つめながら俺は思った。そして、あの女性警官の頬が赤く染まっていたのはこの美少女のせいだったのかと納得した。

あどけなさの残る可憐な美少女は俺たちに向かって小さく一礼して顔を上げると、何かに気づいたようにこっちに向かって駆け寄ってきた。

「刑事さんだったんですね。あの時はありがとうございました。あの、僕のこと覚えていますか？」

顔を引きつらせた若林に美少女が声をかけた。

驚いたのは俺だけではないはずだ。篠原や笹島があんぐりと口を開けて呆けているのだから。人並の感情表現を持たない田村は別として。

いやいや、今問題にするべきはそんなことではない。俺は若林たちに視線を戻した。すると美少女改め、美少年は再び憂い顔になり、「あの、姉の事件についてなんですが……」と口を開いた。

俺は彼の言葉に違和感を覚える。いや、もっと早くに気づくべきだった。佐伯美奈には失踪している双子の妹と祖母しか家族はいな

いはずだ。それに、美奈は世間一般でいう美人の部類には入るが、彼とはまるで次元が違う。

もちろん篠原たちも気づいていたようで、彼を長椅子に座らせるとそのことについて尋ねた。

「姉とは父親が同じなんです。僕は認知されていないので戸籍上は他人ですが。失礼しました。僕は、水島透といいます」

そう言って、水島は緊張をほぐすように大きく深呼吸をした。

俺は横目で隣に立つ若林を見る。若林は困惑した様子で水島たちのやり取りを眺めていた。

——まさか若さん、男もありますか。

俺の戸惑いに気づいたのか、呆れ顔の若林は俺の頭を軽く小突いた。

「そんな趣味はない」

「じゃあ、ナンパしちやっただんですか？」

「違う。男たちに絡まれていたのを助けただけだ」

そう言って若林は大きな溜め息をついた。

「……間違えたんですか？ 女の子と」

若林は唇をすぼめ、「そうなの。俺の人生最大の汚点だ」と情けない声を出した。

囁くもの (7)

「……通報もせずに逃げ出したりして……すみませんでした」

水島は深々と頭を下げた。

山口の車の前に飛び出してきたのは彼だった。それについては、彼が部屋に入ってきた時から誰もが気づいていたことでもある。

——水島透。市内の大学に通う学生で現場の近所に住んでいるという。

識鑑班——被害者の関係者の聞き込み担当——である若林は彼の話を聞く為に残ることになり、望月たちは聞き込みに向かった。

若林は壁に寄りかかりながら、篠原と水島のやり取りを遠巻きに眺めていた。

「ここ最近、姉の様子がおかしかったんです。それであの夜、僕……」

「美奈さんの様子がおかしかったというのは？」

「一週間くらい前から急に……何かひどく悩んでいる様子でした。理由を訊いても答えてくれなくて。それで余計に心配になって」

「何か思い当たることはありませんか？」

水島は首を振る。

「僕もその時期は忙しくて姉とあまり会っていなかったの……すみません」

「そうですか。では、事件当夜について詳しく訊かせて下さい」

篠原がそう言うと、緊張した面持ちで水島は頷いた。

「あなたは何時頃、佐伯さんの家に行かれたのですか？」

「午後十時五十分頃だと思います。姉の家から歩いて十分ほどの所にあるバイト先から帰る途中、家のリビングの電気がついていたのが気になって……」

なるほど。だから深夜の訪問なのか。

若林は納得しながら、水島の手許をじっと見ていた。さっきから

ずっと、膝の上に置かれた左手親指のつけ根辺りを右手親指で擦り続けている。落ち着かないからか、それとも癖なのか。

「それでどうしましたか？」

「あ、はい。呼び鈴を鳴らしても応答はありませんでした。不安になって、僕は家に上がって」現場の状況を思い出したのか、水島は苦しげに顔を歪めた。「リビングのドアを開けると、姉が……」

「すると、玄関のドアには鍵がかかってなかったんですね？」

「……いえ、かかってました。あの、郵便受けの内側に隠してある予備の鍵を使って」

「あなたは佐伯さんの家の鍵を持っていなかったんですか？」

「はい。姉のいる時にしか行かないので必要ないと断ったんです。それで、予備の鍵を」

水島は苦しげに答えた。

「予備の鍵はいつものように郵便受けの中にあっただんですね？」

「はい」

「そうですか。――失礼しました、続けて下さい」

篠原は唇に人差し指を当てながら低く唸った。

「慌てて、倒れている姉のもとへ……姉は頭から血を流していて……」

「僕は」水島は呻いた。「助けもせずに……」

水島は前屈みになり、膝の上に組んだ両手に頭を乗せた。体が微かに震えている。

「大丈夫ですか？」

「は、い。すみません」

水島はその体勢のまま僅かに頷いた。篠原は再び質問を続ける。

「リビングに入った時、石油ストーブがどこに置かれていたか覚えていますか？」

水島はゆっくりと上体を起こした。そして眉間に深い皺を寄せ、記憶を辿る。

「姉はいつもストーブを窓際に置いていました。カーテンがあるから危ないと注意したら、ピアノが窓際にあるからここに置かないと

寒いよ、と姉は言っていました。……すみません、動揺して
……覚えていません。一番に目に入ったのが姉の姿でしたから……」
水島は申し訳なさそうに答えると、再び親指のつけ根の辺りを擦
り出す。

「他に何か気づいたことはありませんか？」

水島は力なく首を振る。

「そうですか。——家を飛び出したあなたは、車と接触しそうな
ったんですね？」

「……はい。あの、運転手の方は」

「無事ですよ」

水島は安心したように表情を和らげ、「そうですか。……よかつ
た」と呟いた。

若林は山口の顔を思い出す。もし彼が、飛び出てきたのが男だ
と知ったらどんな反応をするだろう。それを考えると思わず口許が
弛んだ。

囁くもの (7-1)

若林は篠原たちに視線を移すと、二人は水島の手許をじっと見ていた。もうこの時点になると彼らも水島の奇妙な手の動きに気づいていた。

「その後、あなたはどうかされましたか？」

篠原は水島の手の動きには触れずに質問を続ける。

「気がついたら……家の布団の中で震えていました。どうしていいのかわからなくて、ただ信じたくなって、夢であって欲しい、これは夢なんだ、と必死に思い込もうとして……」

水島は苦しげに顔を歪め、組んだ手を額に押し当てた。

「普通は誰だって驚くものです。誰もあなたを責めはしません」

篠原の言葉に水島は髪を振り乱しながら首を振る。

「……怖かったんです」水島は震える声で呟いた。「倒れている姉が母と重なって。……母は、くも膜下出血で倒れてそのまま亡くなりました。学校から帰ってきた僕が発見しました。その光景が、また……。今度は姉が。怖かった。また独りに、なるのが……。あの時、僕は現実から逃げようとしたんです」

彼の悲痛な声が室内に響き渡る。篠原たちは水島に自由に語らせる為か、無言のまま彼の話に耳を傾けていた。水島は声をつまらせながら、亡くなった美奈に対して何度も謝罪の言葉を繰り返した。

「……本当は何度も警察に連絡をしようと。でも、受話器を手に取りるたびに」

口ごもる水島に、「どうしました？」と篠原が尋ねた。

「……あの人の、顔が浮かんで」

「あの人？」

「……佐伯、馨さんです」

目を伏せたまま水島が答えた。

篠原は少し考えるように顎を摩りながら、「あなたから見て佐伯

馨さんはどんな人ですか？」と尋ねた。

水島は少し戸惑いの色を見せた。そしてしばらく迷った後、決心したように口を開いた。

「――怖い、人です。僕は小さい頃からあの人が怖かった。声を聞いただけで震え上がるほどでした。母にいつも酷いことを言っ……そのたびに母は泣いていました。僕にもあの人は容赦なかった。あの人にとっては、僕たちの存在自体が許せなかったようです。だから僕たちは、あの人と係わらないように隠れるように生きてきました」

「なるほど。佐伯馨さんと係わることをあなたは恐れたんですね」

「……最低です。僕は自分のことしか考えていない」悔しげに唇を歪めた水島は、すぐに真顔に戻ると真剣な眼差しで篠原を見据えた。

「刑事さん。――姉を見殺しにした僕は、どんな罪になりますか？」

次の瞬間、水島の指が左手の皮膚を傷つけ、そこから小さな血の玉が浮き出た。それでも彼は左手を擦り続ける。

若林は血で赤く染まった水島の左手を見つめる。

彼にとって昨夜は途方もなく長く辛い夜だっただろう。彼の証言が事実ならば――。

篠原を見ると、水島の真意を測りかねているようだった。しばらく黙って考えていた彼はおもむろに口を開いた。

「佐伯美奈さんは即死でした。あなたが見たのは――彼女の遺体です」

手の動きが止まった。水島は目を見張り、顔を強張らせる。そして、本当なのか、と笹島の方に顔を向け、彼が肯定するように頷くと「そ、んな」と声を漏らした。

水島の大きな瞳から零れ出た涙が陶器のような肌を滑り落ちた。

囁くもの (7-2)

「失礼します」先ほどの女性警官が再び部屋に入ってきた。「あの、佐伯さんのご家族の方がお見えになりました」

彼女のうしろから、ずっと背筋の伸びた和服の女性と英国紳士風の男性が部屋に入ってきた。

これが、佐伯馨か――。

顔に出してはいないが若林は馨の容姿に内心驚いていた。

報告では、馨は今年六十一歳のはずだ。それなのに、目の前に現れたのはどう見ても四十代前半の女性にしか見えない。けれど、ただ若く見えるだけではない。艶やかな黒髪を結い上げ、眼力のある鋭い瞳に鼻筋の通った威厳のある顔立ち。そして貫録あるその佇まいは、迷いのない意志の強さを表しているようにみえた。

「美奈の祖母の佐伯馨と申します。彼は顧問弁護士の上田です」

馨の凜とした声が部屋に響き渡った。隣の田上は無言で一礼する。弁護士か。なるほど、聡明そうな顔立ちをしている。馨と同年くらいだろうか。仕立てのいいスーツを着ているが、それを上手く着こなすセンスも備えている。真正正銘の紳士か。

若林は、ざっと馨と田上の観察を終えたと水島に視線を移した。そして眉間に皺を寄せ、目を細める。その先には、怯えるように小さくなって顔を伏せている水島がいた。血まみれになった右手の親指が左手親指のつけ根を執拗なまでに痛めつけている。

部屋を軽く見渡した馨の視線が長椅子に座っている水島を捉え、彼女は眉を顰めた。

「何故、お前がここにいますか？」

馨の厳しい声が水島に向けられた。その声に水島の体がびくりと反応し、右手の親指の爪がつけ根部分に食い込んだ。

「あの……」

「彼が第一発見者なんです」

萎縮している水島の代わりに篠原が答えた。

すると馨は眉を吊り上げ、水島に歩み寄ると彼の頬を強く打った。いきなりすることに若林も篠原も止めることができなかった。

「お前が美奈を殺したのね」

「ちがつ」

水島は慌てて長椅子から立ち上がる。

「刑事さん、彼を逮捕して下さい。彼が美奈を殺したんです。母親に似て意地汚い人間ね。お前に遺産なんてびた一文払うつもりはありませんからね」

馨は汚いものにもでも触れたかのように、彼の頬を打った手をハンカチで拭った。

「僕は殺してなんて……」

親指つけ根に爪を食い込ませたまま胸の前できつく手を組み、水島は声を絞り出した。そんな水島に馨は冷ややかな視線を送る。さすがにまずいと思い、若林が止めに入ろうとすると篠原が二人の間に割って入った。

「佐伯さん、お話はあちらで伺います」

篠原は馨と田上を別室へと案内した。

「僕は……」

取り残された水島は放心したように立ち尽くしていた。若林が水島に近づいていくと彼はゆっくりと顔を上げて若林を見つめた。

「大丈夫？」

彼はこくりと頷いた。

「佐伯美奈さんのこと、話してもらえますか？」

水島は涙を手の甲で拭うと小さく頷いた。

「――姉との交流が始まったのは四年前です。母の葬儀が終わった次の日に姉が家に訪ねてきました。さっきも話した通り、僕たちは佐伯家とは係わらないように生きてきました。だから……最初は迷ったんです」

長椅子に浅く腰かけた水島は膝の上で硬く握られた拳を見つめて

いた。左手の傷には絆創膏が貼られている。若林が渡したものだ。

「でも君は美奈さんと交流を始めた。何故ですか？」

「姉の顔を見て……」

「顔？」

「表情のない姉の顔が母に似ていたんです。……あの人に酷いことを言われたあとの母の顔に」水島は虚ろな目で答える。「姉も僕たちと同じ目に遭っているんじゃないかと思ったんです。それに姉は泣いてくれました。母の為に。独りになった僕の為に。……母は身寄りがなく、僕たちは目立たないように暮らしてきたので母の為に泣いてくれる人はいませんでした。だから、嬉しかった」

水島も美奈もお互い、近くに住んでいることは知っていたらしい。二人はこの日初めて顔を合わせ、言葉を交わした。そして水島は美奈から話を聞くにつれ、彼女の置かれた状況に愕然としたそうだ。

「姉に自由なんてなかった」

仕事だけでなく美奈の生活すべてを管理していた馨。蜘蛛の糸に絡めとられた蝶のように、自由を奪われた美奈は馨の思うままに生かされてきた。

美奈は水島に言ったそうだ。

——私はあの人に殺され続けてきました。

「殺され続けた、か」

若林は唇を指でなぞりながら呟いた。馨と美奈の関係は普通の祖母と孫というものではなかったということか。

馨にとって美奈は家族というより商品だったのかもしれない。そうだとすると先ほど彼女に感じた違和感も頷ける。家族が殺されたというのに随分と落ち着いていて、悲しんでいる様子もみられない馨を奇妙に感じていたのだ。もしかしたら妹の美和の失踪は馨が原因なのかもしれない。

「あの時、逃げ出さなければ……犯人を捕まえられたかもしれない」
ふいに水島が呟いた。その言葉に若林は顔を曇らせる。

「僕が逃げたあとに放火したのなら、犯人はまだそこにいたってこ

とですよね？」

「犯人が現場に潜んでいたとは限らない。犯人が逃走後、窓際に置いてあった石油ストーブから偶然カーテンに引火して火災が起こった可能性もあるし、火災を起こさせる為にわざとカーテンの近くに石油ストーブを移動させて逃走した可能性もある。それに、もし犯人が潜んでいたとしたら逃げて正解だった。君まで一緒に殺されていたかもしれない。――殺人犯を、侮ってはいけない」

「でもっ」

「犯人を捕まえるのは我々警察に任せなさい」

若林が強い口調で言うと、水島は不満げに俯いた。

「いいね？」

「……はい」

囁くもの (8)

厚みのある灰色の雲が空を覆っていた。今にも雪が降ってきそう
で憂鬱になる。勘弁して欲しい。夏も辛かったがこの時期の聞き込
みもかなりキツイ。

寒さでかじかむ手を擦り合わせ、どんよりとした曇り空を見上げ
ながら雪が降ってこないことを祈った。山口のように神が存在する
とは思っていないが、何故かこんな時は神頼みをしてしまう。我な
がら調子が良過ぎて苦笑する。

住宅街の中央に置かれた公園に目を向けると、枝を横へ広げるよ
うに伸ばした木々が冬の寒さを凌いでいた。よく見るとすべて桜の
木だった。春になればたくさんの花を咲かせ公園を桜色に染めるの
だろうが、葉もない枝だけの今の姿は寒々しく淋しげに見える。

「寒いな」

「冬だからな」

田村は素っ気なく言う。次の聞き込み先へさっさと歩いていく。

「お前は相変わらずだな」俺は両腕を摩りながらゆっくりと息を吐
く。口から吐き出された白い息は大気に溶けて一瞬で消えてしまっ
た。「早く春が来ないかな」

体をブルツと震わせ、こっちを見て立ち止まっている田村の許へ
足早に向かう。

聞き込みを始める前に立ち寄った佐伯美奈の家は、巨大な竹林に
囲まれた予想以上に辺鄙な場所にあった。もともと彼女の両親が買
った家で、交通事故で両親が亡くなるまで家族で暮らしていたとい
う。両親の死後、双子は誓の許に引き取られたが、大学卒業を機
に美奈は再びあの家に住むようになったそうだ。

壁が黒く焦げ、ところどころ焼け落ちた家の残骸。その周りに規
制線が張られ、風が吹くたびブルブルと黄色のテープが音を立てて
揺れている。

俺は無残に変わり果てた家を見つめ、改めて犯人の逮捕を誓った。それと同時に厳しい捜査になることを覚悟した。

「あんな場所じゃあ、近所付き合いもなかなかできないよな。今まで聞き込みに戻った家の人たちも彼女に興味は持っていたようだけどさ」

危惧した通り、いくつかの家に聞き込みに戻ったが事件当日の不審者情報はおろか、彼女についての情報も得ることはできなかった。美奈は近隣の住人との係り合いを避けるように暮らしていたようだ。

「その為にあの場所を選んだ、って感じだな」

田村がぼつりと呟く。

次の聞き込み先のインターホンを鳴らしながら、「おいおい、人付き合いが苦手っていうレベルじゃねえな。気難しい人だったのか？」と俺は田村に尋ねた。

「さあな。俺に訊くな」

「演奏とか聴いて判らねえの？」

「演奏を聴く限りだと気難しい感じは受けないな。だが実際どうかは判らないだろ」

無茶を言うなどばかりに田村は俺を睨んだ。

「まあ、確かに」

スピーカーから若い女性の声で応答があった。事件について話が聞きたいと伝えるとドアが開き、不安げな顔をした女性が出てきた。毎回のことだが、田村がメモ役に徹するので必然的に俺が聞き役になる。お前も人付き合い苦手だよな。刑事としてどうよ、それ。

「愛知県警の望月です。彼は田村といいます」

警察手帳を翳しながら名乗ると女性は、はあ、と小さく頷いた。

「佐伯美奈さんの事件について情報を集めています。お手数ですが協力お願いします」

「でも私、亡くなった方とは交流ありませんでしたから情報と言われても」

「亡くなった佐伯美奈さんについてはご存じでしたか？」

「そりゃあ、ここ一帯では有名でしたから。でもコンサートなどで家にあまりいなかったようですし、ご近所付き合いもしてなかったようですよ。彼女、人嫌いだそうですから」

薄着のまま外に出てきた彼女は寒そうに腕を摩りながら答えた。

申し訳ないと思いつつ、質問を続けていく。

「事件当日、この付近で不審な人物や車を見かけませんでしたか？」

「いいえ。昨日は外出しませんでしたから」

またか。

彼女に気づかれないように俺は小さく吐息をつく。この寒さの為か外出する人が少なく、不審者情報がなかなか集まらないでいたのだ。

「では、佐伯さんの家に入ったりしていた方をご存じありませんか？」

彼女は、ああ、と頷いて、「近所の女子大生が時々家に入ったりしていたようですよ」と言った。

「名前は判りますか？」

「名前までは。この先のアパートに住んでいる方で、すごく可愛い女性ですよ」

——水島のことだ。どうやらここ一帯の住人は彼を女性と間違えているようだった。あの容姿だから間違えるのも仕方ないが、男としてはあまり喜ばしいことではないだろう。だが今ここで訂正するのも気が引け、結局、そのまま礼を言っただけで聞き込みを終えた。彼女はホッとした表情で軽く頭を下げ、足早に家の中に入っていた。

この日、美奈に関しての情報を得ることはできなかった。

「——収穫なし、か」

自販機から出てきたばかりの缶コーヒーを両手で包み込むように握りながら、俺は呟いた。かじかんだ掌にじんわりと熱が伝わる。

あの現場でしかも深夜の犯行ともなれば、然もありません、といった感じではあったが、まさかここまでとは思わなかった。

「立地の悪さと時期の悪さが重なったな」

田村はそう言って缶コーヒーのプルタブを開けた。仄かなコーヒーの香りが鼻孔に届く。

「にしても手ごたえがなさ過ぎだ。いくら寒いとはいえ、聞き込んだ先のほとんどの主婦が家にこもってたつてのはどうよ。主婦ってもっと忙しいんじゃないのか？」

「知るか。ただ何軒かの玄関先に食材宅配サービスの箱が置いてあったぞ」

「何それ？なんでそんなのお前が知ってんだよ」

「同じ箱を配達員が配っていた。お前、見てなかったのか？」
「見てない。そんな余裕はない。」

「てことは昨日もその車、来てたんじゃないか？」

「ああ。さっき訊いてきた」

「あ、なんだ。急に走り出したのはそれか。てっきりトイレに行っただのかと思ってた」

田村に睨まれた。

「悪い。で、どうだった？」

田村は肩を竦め、「毎日この時間帯に配達に来ているそうだが、不審な人物だけでなく外を出歩く人自体見なかったらしい」

「……どんだけ寒がりな住人だよ」

俺は思わず声を上げる。

「戻ろう。時間だ」

田村は缶コーヒーを飲み干すと、踵を返した。

俺は空を見上げる。何層にも重なった雲がすべてを隠し、月も星も一切ない暗闇が広がっている。悲しくなるほど何も無い真っ暗な空に言いようのない不安が込み上げる。今ここで雪が降ってきたとしたら喜んで受け入れることができそうだったが、暗闇の空は何も生み出すことはなかった。

その空の下では、整然と立ち並ぶ家々から漏れる明かりと街灯の明かりが、街を暗闇から守るように明るく照らしていた。

「――そうだな」

俺は暗闇の空の下、歩き出した。

囁くもの (8-1)

緑署に戻ると、ほとんどの捜査員たちが捜査本部に戻っていた。俺たちの報告に篠原は「ふーん」と言って口をへの字に曲げた。まあ、大した情報を持ち帰ってこなかったのだから渋い顔をされてもしようがない。地取り班の席につき、ひと息ついていると捜査会議が始まった。時計を確認すると午後八時をわずかに過ぎていた。

まず最初に藤堂が報告を始める。

焼け跡から押収した遺品——といっても、ほとんど残っているものはなかったが——を確認した弁護士の上田から、ブロンズ像がなくなっているという指摘があった。大学の卒業時、美奈に贈られたものらしい。

早速、藤堂たちは確認の為に美奈が通っていた大学に行き、ブロンズ像について聞き込みをしてきた。

「大学側の説明によると、ブロンズ像は優秀な卒業生の上に贈呈するそうで多数のコンクールに入賞し、首席卒業生だった被害者にも贈られていました。大学からブロンズ像を借り受けて鑑定をした結果、頭部の傷痕とブロンズ像の形状が一致しました」

これで凶器は現場から持ち出されたブロンズ像と断定された。

篠原は続いて若林を指名する。水島について調べてきた若林が立ち上がる。その隣には里見が座っていた。

「水島親子は五年前にあのアパートに越してきたそうです。美奈たちの父親である佐伯秀一の会社に勤めていた水島の母親は、秀一の子供を宿したことで馨の逆鱗に触れ、会社を辞めざるを得なかったようです。この件が原因で、馨と秀一は絶縁状態になっていました。事件当夜ですが、水島のバイト先であるイタリアンレストランに確認を取ったところ、確かに彼は店の閉店時間である午後十時半までいつもと変わらない様子で働いていたそうです。これは複数の従業員、そして常連客から証言を得ています。彼が店を出たのが午後十

時四十分過ぎで、こちらでも店長並びに従業員から確認が取れました。ただ、現場を飛び出したあとの彼の足取りは近隣の住人にも聞き込みをしましたが確認できていません。現場から歩いて二十分ほどの場所にある水島のアパートには彼以外に五人の住人がいるのですが、その内の三人は仕事でこの時間帯はいつも不在だそうです。あとの二人も普段から帰りが遅く、事件当夜も家に着いたのは二人とも深夜二時を過ぎていたそうです。それと、住人のひとりが今朝八時頃アパート付近で水島の姿を見ていました。時間的に考えると緑署に向かうところだったと思われます。以上です」

「十分か」

篠原が呟く。

水島が山口の車に飛び出すまでの十分弱という空白の時間。その短い時間で人を殺すことができるだろうか。できるかできないかで考えれば、できるのだろう。しかし今回の事件は計画的なものというより衝動的な殺人に近い。とすれば、その十分間に二人の間で殺人に至る何かがあったと考えられる。それを踏まえてもう一度考えてみると、水島に美奈を殺すことは難しいのではないか。

すると篠原が、「若、お前はと思う？」と若林に尋ねた。

「水島の証言には一応の整合があります。今のところ彼に美奈を殺害する動機もないですし、衝動的な犯行だとした場合、十分弱という短い時間で犯行が行えたかどうか疑問です」

若林は俺と同じ考えを口にした。篠原は額を人差し指で掻きながら息をついた。

「今日の警を見る限り、水島の証言もあながち嘘でもなさそうだな」

笹島は無言で頷く。二人とも苦虫を噛みつぶしたような顔をしている。今朝のことを思い出しているのだろう。

緑署に來た警は、美奈の遺体と対面することも押収した遺品を確認することも拒否したらしい。結局、弁護士の上田が押収品を確認し、ブロンズ像がなくなっていることを指摘したのだ。その時も警

は興味なさそうに「そんなのあったかしら。まあ、田上がそう言うのならあったのでしょう」と言ったそうだ。

彼女にとって興味があるのは名誉や名声だけで、記念品や賞状などの〈物〉には関心がないようだ。その中には美奈も入っていたのかもしれない。さすがの篠原たちも美奈に同情したようだった。

「あの弁護士も大変だな」

篠原が独り言のように呟くと笹島が大きく頷いた。

田上は父親の代から佐伯家の顧問弁護士をしているらしい。さぞ苦勞しているのだろう。篠原の声のニュアンスから彼への憐憫の情が感じ取れた。

「若、ご苦勞さん。次、報告してくれ」

山口について調べてきた捜査員が立ち上がる。

聞き込みの結果、山口の証言通り彼は事故直前の午後十時半まで同僚と食事をしていたのを店の従業員が覚えていた。事故処理後も迎えにきた彼女の車に乗って帰宅している。山口と美奈やその関係者との接点も見つからず、やはり彼は事件には無関係だったようだ。続いて、証拠班――遺留品捜査担当――の捜査員からの報告が始まる。

美奈の寝室にあったパソコンは損傷が激しく、パソコン内の情報を取り出すことはできなかったようだ。明日にでも令状を申請し、プロバイダーに情報開示請求をするとのことだった。

篠原が頷くと、次に妹の所在を追っていた捜査員が立ち上がる。

捜査員の口から、佐伯美和が半月前の一月三十日にドイツから帰国していたことが報告されると、室内が騒ついた。

美和は十年前にドイツに入国しており、その間ドイツから一度も出国していない。つまり十年ぶりに彼女は日本に帰国したことになる。何故、突然日本に帰ってきたのか。もちろん偶然ではないだろう。

「半月前か。まだ美和の空港からの足取りは確認できてないんだよね？」

篠原が尋ねると捜査員は、「残念ながら今日の捜査では確認できていません。現在、鉄道各社の監視カメラの画像解析を行っています。タクシー協会には、美和の現在の写真がないので、一応、佐伯美奈の写真を配布してあります。近日中には足取りが判ると思います」と告げた。

篠原は満足そうに頷く。

そして次に、双子の学生時代の友人たちの証言が報告された。

大学まで同じだった双子ではあったが共通する友人はいなかったようだ。

多数のコンクールに入賞をして注目を浴びていた美奈は、在学中ほとんど練習室にこもりっぱなしだったという。無口で大人しい性格の美奈が唯一心を開いた人物が、ピアノ科教授であり国内屈指のピアニストでもあった水谷千代子だった。残念ながら彼女は三年前に他界しており、葬儀に参列した美奈はその時ばかりは人目を憚らず声を上げて彼女の死を悼んだという。

反対に、社交的で人を楽しませるのが上手だった美和の周りにはたくさん友人がいた。しかしここ十年、美和からの連絡は途絶えていたと友人たちは証言する。

美奈と美和の仲についてはあまり詳しく知る者はいなかった。どうやら、美和の口から美奈についての話は出ていなかったようだ。

「美奈は家にこもりきりで訪ねてくる者も聲や水島以外いなかった訳か。相当な人嫌いだったのか、それとも聲の影響からなのか。どっちにしろ、交友関係はかなり狭いはずだ。関係者への聞き込みを徹底してくれ。ただし、水島の証言をすべて鵜呑みにする訳にはいかない。不審者情報の聞き込みも今以上に強化するように。いいな！」

関係者の中に容疑者がいるかもしれないという流れになると、どうしても現場周辺の聞き込みを担当する地取り班の士気が落ちてしまいがちになる。そうさせない為だろう。俺たち地取り班に向かって篠原が檄を飛ばした。

「美和はどうだ？」

篠原の隣に座る小林が口を挟んだ。

篠原は小林の方に向き直り、「もちろん捨て置けない存在です。名乗り出てこないのも気になりますし、二人が接触した可能性はかなり高いと思われます。馨の話では、美和は美奈よりも出来が悪かったようです。ピアニストとして活躍する美奈に嫉妬した美和が犯行に及んだとも考えられますが、今の段階ではなんとも言えません。美和の足取りについては捜査員を増やして明日から重点的に調べるつもりです」と答えた。

小林が頷く。

「よし、みんな御苦労さん。明日も頑張ってくれ」

捜査会議が終了した。報告書を篠原に提出し、捜査本部から解放される。これから篠原たちデスク陣はひと晩かけて明日の捜査方針を決めるのだ。編成の組み換えも今日の会議の内容からするとあるだろう。

俺は田村の方に顔を向ける。

「行くか？」

「行こう」

囁くもの (9)

オンブラージュ
OMBRAGEは、もともと俺の行きつけの店だった。

カウンター席と丸テーブルの席がひとつあるだけの店内。他に余計なものは一切なく、漆喰の壁には壁かけ時計が静かに時を刻む。ここは酒とジャズを楽しむ為の場所。

店のドアを開けると、ビル・エヴァンスのブルー・イン・グリーンがふわりと俺たちの体を包み込んだ。この瞬間が堪らなく心地いい。

ポートレイト・イン・ジャズというピアノ・トリオ・アルバムに収められている曲で、マスターが愛しているアルバムのうちのひとつである。

「マスター、こんばんは」

俺が声をかけるとマスターは穏やかな笑顔で俺たちを迎えた。カウンターに座ると俺の前にジントニック、田村の前には烏龍ハイが置かれる。

初めて俺がOMBRAGEに来たのは交番勤務についたばかりの頃だった。慣れない仕事の毎日で疲れきっていた俺が、ふらりと立ち寄ったのが始まり。ぼんやりとしながら聞くとともに店内に流れていた曲を聴いていると、ふいに涙が零れ落ちた。驚く俺にマスターが、「カムレイン・オア・カムシャイン」と告げた。なんのことか解らず訊き返すと曲の名前だと言う。そして「名曲は、ただ耳に入るだけでも人の心を打つものです」とも言った。

リズムを生み出す力強いタッチの演奏がジャズの特徴だと勝手に思い込んでいたが、ここで聴いたビル・エヴァンスは違った。ガラス細工のような繊細で美しいタッチから生み出される透明感あるピアノ・サウンド。

かのマイルス・デイヴィスは、ビル・エヴァンスの演奏をこう表現したという。

——ビルの演奏には、いかにもピアノという感じの、静かな炎のようなものがあつた。

それ以来、俺はこの常連となり上質な音楽を聴いて英気を養ってきた。一課に配属になってからは田村を連れてここに来るようになっていた。

「お前どう思う？」

「まだ、よく判らない」

グラスを傾けながら澄まし顔で答える田村に、俺は意地悪く笑う。

「佐伯美奈とお前って似てるよな」

田村が怪訝な顔で俺を見返した。

「人付き合いが苦手なところ」俺は唇に指を当て、「いや、お前より重症かも。ほら彼女、医者だけでなく歯医者にもかかってなかっただろ？だから遺体の確認にも手間取ってたじゃねえか。結局、わずかに炭化を免れた腹部に事故の時の手術痕が残ってて美奈と断定されたけどさ。ここまでくると人嫌いも徹底してるって感じだよな。医者嫌いでもあるのかな？」

「お前じゃあるまいし」

「別に俺は嫌いじゃねえよ。医者は」

「医者は、な」

「うっせ」

「彼女の場合、医者嫌いっていうよりPTSDだったんじゃないか？」

烏龍ハイをひと口飲むと田村は素っ気なく言った。

「PTSD？確か、心的外傷後ストレス障害だっけ？」

「居眠り運転のトラックが佐伯夫妻と美奈の乗った車に突っ込み、両親は即死。後部席に乗っていた美奈も意識不明の重体で病院に搬送されたらしいな」

「病院は……彼女にとって禁忌の場所だった、てことか」

俺は閉口する。

何故、気づかなかったのか。両親を失い、自らも生死をさまよう

ほどの重傷を負ったのだ。彼女の心に大きな傷として残らない訳がない。

「陸上競技会に出場する美和のところに向かう途中での事故だったそうだが」田村が抑揚のない声で言う。横目で俺を見た。「お前が落ち込んでどうする」

「別に。落ち込んでねえよ。――ところで美奈は誰に殺されたんだろうな？」

俺は話題を逸らすことにする。

「今の段階で分かるわけないだろう」

「……そうだけど。そこを頭使って考えようって言ってんだよ。水島の話信じれば、美奈は午後十時五十分よりも前に死んでいたことになる。その二時間後、火事が発生した。それが偶然なのか、それとも故意によるものなのか」

「判断は難しいだろうな」

火災班が調べたところ、石油ストーブになんらかの細工をした形跡は見られなかった。だが、火事なんて起こそうと思えばどうとでも起こすことはできる。カーテンの近くに少しだけ石油ストーブを移動させればいだけなのだから。

「だよな。どっちにしろ燃えてしまったのは痛い。すべて灰になっちゃった」

ふと耳を澄ますと、ビル・エヴァンスの代表作であるワルツ・フォー・デビーが流れていた。美しいメロディを紡ぎ出すピアノ・サウンドに耳を傾けていると、最期の瞬間まで演奏を続けたビル・エヴァンスの姿と美奈が重なった。

左耳だけとはいえ、ピアニストである美奈が聴力を失ったことで受けた衝撃がどれほどのものだったか――俺には解らない。簡単に解るとも言って欲しくないだろう。それでもピアノを弾き続けた。それほど彼女にとって大切なものだったのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7327d/>

COMBINATION

2011年11月15日03時27分発行